

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XIII—2

1986

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XIII—2

1986

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

序

県下のは場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査はすでに13年目を迎え、は場整備事業の拡大に伴う発掘調査件数の増加によって種々の資料や成果が蓄積されております。

発掘調査で得られたその成果を公開し、広く埋蔵文化財に関する御理解を深めて頂く一助にしたいと、ここに昭和60年度に実施いたしました発掘調査の報告書を4分冊に分けて刊行するものであります。

最後に発掘調査にあたり、御協力頂きました地元関係者並びに関係諸機関に対し、厚く感謝の意を表すと共に報告書の刊行に御協力頂きました方々に対しても厚くお礼申し上げます。

昭和61年3月

滋賀県教育委員会

教育長 南 光 雄

例 言

1. 本書は昭和60年度県営ほ場整備事業に伴う近江八幡市柿木原遺跡、同市八甲・黒橋遺跡、同市勧学院・田中堂遺跡、同市柿ノ町遺跡、犬上郡甲良町下之郷遺跡の発掘調査報告書で、昭和60年度に発掘調査し、整理したものである。
2. 本調査は県農林部からの委託（再配当）により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 発掘調査にあたっては、近江八幡市教育委員会、甲良町教育委員会の協力を得た。
4. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
5. 本事業の事務局は次のとおりである。

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	市原 浩
課 長 補 佐	中正 輝彦
埋蔵文化財係長	林 博通
タ 技師	葛野 泰樹
管 理 係 主 事	山本 徳樹

財賀県文化財保護協会

理 事 長	南 光雄
事 務 局 長	江波弥太郎
埋蔵文化財課長	近藤 滋
調 査 三 係 長	大橋 信弥
タ 技師	宮崎 幹也
タ 技師	仲川 靖
総 務 課 長	山下 弘
タ 主 事	泉 喜子
タ 囖 託	中谷サカエ

6. 本書の執筆・編集は、調査担当者宮崎幹也、仲川靖が行い、文章の末尾に執筆者名を付した。
7. 出土遺物や写真、図面については滋賀県教育委員会で保管している。

目 次

I. 近江八幡市柿木原遺跡	
1. はじめに	1
2. 位置と環境	1
3. 調査経過	2
4. 検出遺構	3
5. 出土遺物	10
6. まとめ	23
II. 近江八幡市八甲・黒橋遺跡	
1. はじめに	31
2. 位置と環境	31
3. 調査経過	31
4. まとめ	34
III. 近江八幡市勤学院遺跡・田中堂遺跡	
1. はじめに	35
2. 位置と環境	36
3. 調査経過	36
4. 検出遺構	38
5. 出土遺物	48
6. まとめ	61
IV. 近江八幡市柿ノ町遺跡	
1. はじめに	71
2. 位置と環境	71
3. 調査経過	72
4. まとめ	73
V. 大上郡甲良町下之郷遺跡	
1. はじめに	75
2. 位置と環境	75
3. 調査の経過	76
4. 調査の結果	77
(1) 遺構	77
(2) 遺物	87
5. まとめ	89

挿図目次

Ⅰ. 近江八幡市柿木原遺跡	
第1図 レンチ配置図	3
第2図 8 レンチ東側遺構平面図	4
第3図 8 レンチ S X0801遺構図	4
第4図 19 レンチ S B1910遺構図	6
第5図 S E1903遺構図	8
第6図 S E1904遺構図	9
第7図 S X1901遺構図	11
第8図 17 レンチ遺構図	27
第9図 19 レンチ遺構図	29
Ⅱ. 近江八幡八甲・黒橋遺跡	
第1図 レンチ配置図	32
第2図 試掘レンチ土層観察図	33
Ⅲ. 近江八幡市勤学院遺跡・田中堂遺跡	
第1図 レンチ配置図	37
第2図 第1レンチ S B201遺構図	39
第3図 第1レンチ S H001遺構図	40
第4図 第2レンチ S D X001遺構	43
第5図 第2レンチ S D X002遺構	44
第6図 S D X001土器出土状況図	41
第7図 S D X002土器出土状況図	42
第8図 S D X002土器出土状況図	42
第9図 S D X002土器出土状況図	45
第10図 S E201遺構平面図断面見通図	46
第11図 第4レンチ南端遺構図	47
第12図 田中堂遺跡試掘レンチ土層観察図	59
第13図 田中堂遺跡試掘レンチ土層観察図	60
第14図 第1レンチ遺構図	65
第15図 第2レンチ遺構図	67
第16図 第3レンチ遺構図	69

IV. 近江八幡市柿ノ町遺跡	
第1図 トレンチ配置図	72
第2図 試掘トレンチ土層観察図	73
V. 大上郡甲良町下之郷遺跡	
第1図 下之郷遺跡位置図	76
第2図 下之郷遺跡 トレンチ配置図	77
第3図 下之郷遺跡 第1、第2トレンチ遺構	78
第4図 下之郷遺跡 第3トレンチ土層図	79
第5図 下之郷遺跡 第3トレンチ遺構図	80
第6図 下之郷遺跡 S B-01遺構図	81
第7図 下之郷遺跡 S B-02遺構図	82
第8図 下之郷遺跡 カマド遺構図	83
第9図 下之郷遺跡 第4トレンチ上層図・遺構図	84
第10図 下之郷遺跡 S B-05遺構図	85
第11図 下之郷遺跡 S B-06遺構図	85
第12図 下之郷遺跡 第6トレンチ遺構図	86
第13図 下之郷遺跡 遺物実測図	88

図版目次

I. 近江八幡市柿木原遺跡

- 図版一 柿木原遺跡 1. 17トレンチ全景（南から） 2. 8トレンチS E X0801検出状況
図版二 柿木原遺跡 3. 19トレンチ全景 4. 19トレンチS E 1905より西側
図版三 柿木原遺跡 5. 19トレンチS B 1910周辺 6. 19トレンチS E 1901検出状況
図版四 柿木原遺跡 7. 19トレンチS E 1903曲物出土状況 8. 19トレンチS E 1904息つき竹検出状況
図版五 柿木原遺跡 17トレンチ出土遺物 19トレンチ出土土師皿
図版六 柿木原遺跡 黒色土器20・21. (S E 1905出土)
図版七 柿木原遺跡 黒色土器22. (S D 1962出土) 23. (S E 1911出土)
図版八 柿木原遺跡 黒色土器24. (S E 1912) 25・26・27. (遺構面) 28. (S K 19) 29. (S E 1905)
図版九 柿木原遺跡 30~45. (瓦器碗) 46~51. (瓦器小皿) 52~55・60・61. (青磁) 56~59・62・63. (白磁)
図版十 柿木原遺跡 64~70. (常滑焼甕) 71~72. (常滑焼鉢)
図版十一 柿木原遺跡 73~78. (常滑焼鉢) 79. (瓦質羽釜) 80. (羽釜) 81. (鍋) 82. (羽釜脚)
図版十二 柿木原遺跡 19トレンチS E 1903出土曲物
図版十三 柿木原遺跡 84・85. (S E 1904出土横柄と刀子) 86・87. (S E 1907出土板草履)
図版十四 柿木原遺跡 箸 88~91. (S E 1905) 92. (S E 1908) 93~97. (S E 1911)
図版十五 柿木原遺跡 出土遺物実測図
図版十六 柿木原遺跡 出土遺物実測図
図版十七 柿木原遺跡 出土遺物実測図
図版十八 柿木原遺跡 出土遺物実測図
図版十九 柿木原遺跡 出土遺物実測図
図版二十 柿木原遺跡 出土遺物実測図
図版二十一 柿木原遺跡 出土遺物実測図
図版二十二 柿木原遺跡 出土遺物実測図
図版二十三 柿木原遺跡 出土遺物実測図
図版二十四 柿木原遺跡 出土遺物実測図
図版二十五 柿木原遺跡 出土遺物実測図
図版二十六 柿木原遺跡 出土遺物実測図
図版二十七 柿木原遺跡 出土遺物実測図
図版二十八 柿木原遺跡 出土遺物実測図
図版二十九 柿木原遺跡 出土遺物実測図
図版三十 柿木原遺跡 出土遺物実測図

II. 近江八幡市八甲・黒橋遺跡

- 図版一 八甲・黒橋遺跡 1. T-2 試掘状況 2. T-3 試掘状況

III. 近江八幡市勧学院遺跡・田中堂遺跡

- 図版一 勸学院遺跡 1. 第1トレンチ全景（西から） 2. 第1トレンチ全景（東から）
図版二 勸学院遺跡 3. 第2トレンチ全景（東から） 4. 第3トレンチ S E 201
図版三 勸学院遺跡 5. 第3トレンチ余景（東から） 6. 第4トレンチ全景（南から）
図版四 勸学院遺跡 7. S D X001No. 1 弥生式土器出土状況 8. S D X001No. 2 弥生式土器出土状況
図版五 勸学院遺跡 9. (S K 001) 10・11. (S E 301) 12. (S K 301) 13. (第2トレンチ包含層)
図版六 勸学院遺跡 14・15. (S E 302)
図版七 勸学院遺跡 16～29. (S E 201)
図版八 勸学院遺跡 30～33. (S D 201)
図版九 勸学院遺跡 34. (S E 201)
図版十 勸学院遺跡 35～40. (S E 201)
図版十一 勸学院遺跡 41～43. (S E 303) 44. (S D 201)
図版十二 勸学院遺跡 出土遺物実測図
図版十三 勸学院遺跡 出土遺物実測図
図版十四 勸学院遺跡 出土遺物実測図
図版十五 勸学院遺跡 出土遺物実測図
図版十六 勸学院遺跡 出土遺物実測図
図版十七 勸学院遺跡 出土遺物実測図

V. 大上郡甲良町下之郷遺跡

- 図版一 (上) 下之郷遺跡調査前風景
(下) 第1トレンチ全景
図版二 (上) 第2トレンチ全景
(下) 第3トレンチ全景
図版三 (上) 第3トレンチ S B -01
(下) 第3トレンチ S B -02
図版四 (上) S B -01 カマド
(下) S B -02 カマド
図版五 (上) S B -01 カマド(南より)
(下) S B -01 カマド(北より)
図版六 (上) 第3トレンチ S D -03
(下) 第4トレンチ全景
図版七 (上) 第4トレンチ S B -05
(下) 第4トレンチ S B -06
図版八 (上) 第6トレンチ全景
(下) 第6トレンチ S B -08
図版九 下之郷遺跡 出土遺物
図版十 下之郷遺跡 出土遺物



近江八幡市中南部主要遺跡分布図

- | | | |
|------------------|------------|------------|
| 1. 柿木原遺跡調査範囲 | 22. 妙感寺遺跡 | 42. 西中北遺跡 |
| 2. 八甲・黒橋遺跡調査範囲 | 23. 岩倉山北遺跡 | 43. 西中遺跡 |
| 3. 勸学院・田中堂遺跡調査範囲 | 24. 岩倉山南遺跡 | 44. 汐ノ口遺跡 |
| 4. 柿ノ町遺跡調査範囲 | 25. 倉橋部A遺跡 | 45. 谷氏館遺跡 |
| 5. 柿木原遺跡 | 26. 安吉遺跡 | 46. 常衛遺跡 |
| 6. 八甲遺跡 | 27. 倉橋部廢寺 | 47. の場遺跡 |
| 7. 黒橋遺跡 | 28. 栗木山遺跡 | 48. 金剛寺遺跡 |
| 8. 勸学院遺跡 | 29. 倉橋部B遺跡 | 49. 金剛寺城遺跡 |
| 9. 柿ノ町遺跡 | 30. 瓶割山城遺跡 | 50. 宮ノ後遺跡 |
| 10. 七ツ屋遺跡 | 31. 小田中遺跡 | 51. 九里氏館遺跡 |
| 11. 玉養寺遺跡 | 32. 馬淵城遺跡 | 52. 長瀬遺跡 |
| 12. 御館前遺跡 | 33. 長光寺遺跡 | 53. 間野遺跡 |
| 13. 揖ノ内遺跡 | 34. 上田氏館遺跡 | 54. 日吉野遺跡 |
| 14. ラカン塚遺跡 | 35. 上田廢寺 | 55. 揖ノ内遺跡 |
| 15. 供養塚古墳 | 36. 寒蔵遺跡 | 56. 森ノ前遺跡 |
| 16. 住蓮坊古墳 | 37. 蔵ノ町遺跡 | 57. 東田遺跡 |
| 17. 岩塚古墳 | 38. 半田遺跡 | 58. 鷹飼遺跡 |
| 18. 千僧供庭寺 | 39. 高田遺跡 | 59. 出町遺跡 |
| 19. 觀音堂遺跡 | 40. 西海道遺跡 | 60. 南田遺跡 |
| 20. 馬淵遺跡 | 41. 大手前遺跡 | 61. 北田遺跡 |
| 21. トギス塚古墳 | | |

I. 近江八幡市柿木原遺跡

1. はじめに

本報告は、昭和60年度県営は場整備事業（近江八幡市武佐地区上田第3工区）に伴う近江八幡市柿木原遺跡の発掘調査にかかるものである。

柿木原遺跡は、上田町の南側に位置し、これまでに、市教委、県教委の分布調査で、古墳時代から室町時代にかけての遺物の散布が確認されていた。ここに県営は場整備事業が実施されるにあたって、事前に発掘調査を行い、遺構の保護策を講じることとした。

調査は、滋賀県教育委員会が同農林部から依頼と経費（5,500,000円）の再配当をうけ、財團法人滋賀県文化財保護協会が実施した。

発掘調査にかかる体制は次のとおりである。

調査主体 滋賀県教育委員会

調査機関 財團法人滋賀県文化財保護協会

調査指導 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課 技師 葛野泰樹

財團法人滋賀県文化財保護協会埋蔵文化財調査三係 係長 大橋信彌

調査担当 同上 技師 宮崎幹也

同上 技師 仲川 靖

調査補助員 小森伊知郎、西村利通

調査作業員 井上一三、北尾正一、久郷 熊、小西秀夫、小西増一、田川初二、橋口勝次、橋口和平、木本みよ、中井千代、橋口きぬ、橋口きみ、平田志津子（敬称略）

調査にあたっては、近江八幡市教育委員会をはじめ、滋賀県農林部耕地建設課、同八日市県事務所土地改良第二課、近江八幡土地改良課、同市上田町地区土地改良区、同市上田町明光守住職、正円寺住職の方々に多くの協力を仰いだ。

なお、本報告の執筆、編集には仲川があたった。

本文中に使用した遺構の略記号は次のとおりである。S B : 堀立柱建物、S H : 突穴住居、S D : 溝状遺構、S K : 土壙状遺構、S E : 井戸状遺構、S X : 土壙墓・火葬墓、S R : 自然流路

2. 位置と環境

柿木原遺跡は、近江八幡市上田町から西宿町にかけて所在する。上田町は、近江八幡市の東南部に位置し、標高は概ね95.5~97.0mを測る。旧中山道の六枚橋の北に位置し、比較的水はけの良い微高地である。

柿木原遺跡周辺の縄文時代の様相については、当遺跡の東にある常衛遺跡で縄文晩期の壺棺墓が検出されており、この時期の集落址の存在が予想されている。

弥生時代に入ると、鐵鉢遺跡、出町遺跡、勅學院遺跡等で集落が營まれていたものと思われ、突穴住居址、方形周溝墓等が検出されている。

古墳時代には、現在の市役所周辺の七ツ塚古墳、長塚古墳、東漸寺古墳群のほか、千僧供町の供養塚古墳、トギス塚古墳、住連坊古墳、岩塚古墳などがあり、一連の古墳群を形成している。

奈良時代においては、信城寺（上田庵寺）、長光寺庵寺、千僧供庵寺等の寺院があったとされるが、現在では遺構の確認まではされていない。又、近江8郡のうちの諸生郡の郡衙の推定地として御館前遺跡、勧学院遺跡等があげられているが、これまた遺構の確認まではおよんでいない。

平安時代から鎌倉時代にかけては、馬瀬荘上村に属し、現上田町の町名に由来する上田氏が佐々木氏より分派し、範を置いたとされ、上田氏族遺跡がこれに推定されている。

室町時代から戦国時代にかけては、要害の地とされ、観音寺山城を中心とする、金剛寺城、馬瀬城、瓶割山城等の佐々木氏、あるいは織田信長の出城、砦跡が知られている。

3. 調査経過（第1図）

今年度の調査地点は、遺跡の北西部にあたり、東海道新幹線、国道8号線、市道近江八幡一日野線に囲まれた範囲で約11haの面積である。調査は、排水路敷を中心に一部切土箇所と合せて1~21トレンチを設けた。発掘調査は、昭和60年5月13日から23日まで宮崎が、5月23日から8月5日まで引き続き仲川が担当した。調査では、幅2m、深さ1mの範囲で掘削が行われる排水路敷箇所と現況より10cm以上の床下下げを行う切土箇所において、順次機械による表土除去、遺構検出、写真撮影、実測作業を行った。

1トレンチは、市道を横断する排水路を作る際の市道右廻路に伴うもので、溝状遺構が2条検出された。しかし範囲が限定されていたため性格については不明である。

2~4トレンチまでは、遺物、遺構とも認められなかった。

5トレンチは、標高95.7mを測り、一段高い畑地で耕土直下より遺構を認めた。

6~7トレンチは、再び一段下がるが、Pitと溝状遺構2条を検出した。遺構面は浅く耕土直下わずか10cmで検出した。

8トレンチでは溝状遺構、土壤基、Pitを検出したが遺構の遺存は良くなかった。

9~11トレンチでは自然流路と近世の野井戸を検出するにとどまった。

12トレンチは、標高96.7m前後を測る一段高い畑地で耕土直下60cmの地点でPit群、井戸状遺構等を検出した。

13~15トレンチでは、耕土直下で黄色粘質土の地山に達するが、いずれも擾乱されていて遺構、遺物とも存在しなかった。

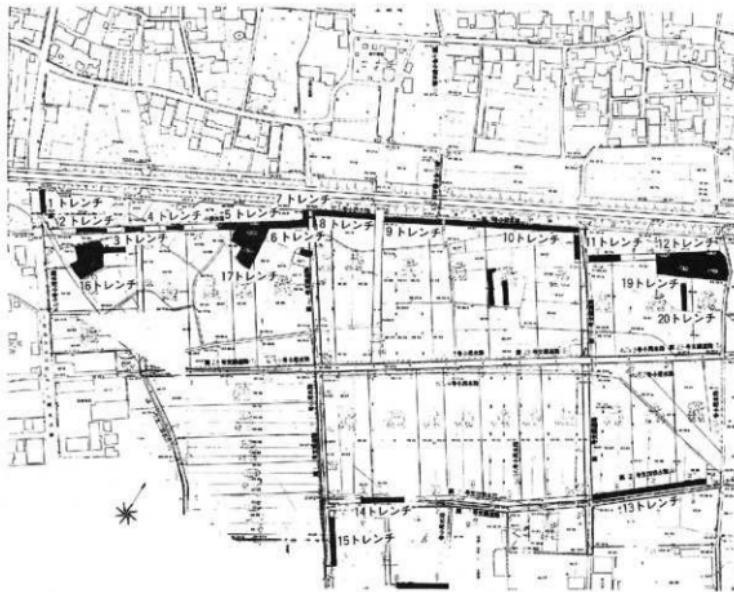
16トレンチは、標高95.5mを測る畑地で、古墳の可能性があったが、耕土直下で黄褐色粘性砂質土に達するほか、周辺においても黄色粘質上の地山で擾乱されており、遺構、遺物とも存在しなかった。

17トレンチは5トレンチの南に接する切土箇所で、耕土直下において掘立柱建物跡と堅穴住居址、溝状遺構、土壤状遺構を検出した。

18トレンチ、21トレンチは、それぞれ5トレンチ、10トレンチの南に位置する切土箇所であるが、遺構は存在しなかった。

19トレンチは、12トレンチの南に接する切土箇所で、400基近い数のPit群と井戸状遺構13基等、遺構密度の高い箇所であった。

20トレンチは、19トレンチの南に位置する切土箇所に、20トレンチの遺構の範囲を確認するため設けたが、自然流路のみで遺構は存在しなかった。



第1図 トレンチ配置図

以上のように排水路敷を中心にトレンチ調査をした結果、新幹線軌道敷沿いの畠地において遺構が良好に遺存していた以外は、ほとんど擾乱により消滅していた。

ここでは、遺構密度の比較的高かった8トレンチ、17トレンチ、19トレンチについて報告することにした。

4. 検出遺構

第8トレンチ（第2図）

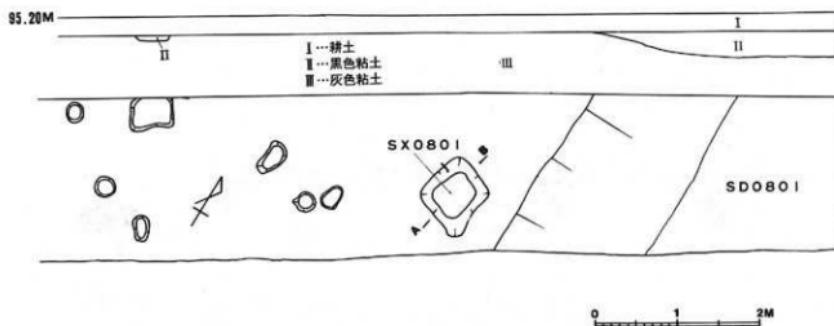
基本層序は第1層耕土、以下黄灰色粘質土の地山である。遺構内埋土は茶褐色粘質土もしくは黒色粘質土である。ここでは、柱穴とみられるPit 4基、土壤内に長甕と丸甕を含めた甕棺墓と思われるもの1基、溝状遺構1条を検出した。

S X0801（第3図）

トレンチの東端にてS D0801に接して検出した。土壤の掘り形は一辺60cmの方形で、底は舟底状を呈する。埋土中において木炭片のほか植物質の腐蝕物が掘り形肩部にて認められた。土壌中央には、口を南に向けた近江型長甕が半分遺存していた。又、長甕の口縁に接する形で小型丸底甕が納められていた。土器内には骨片、その他特筆すべきものは遺存していなかった。時期は6世紀末頃とみられる。

S D0801

ほぼ南北方向に流れる溝で、西側肩部のみ検出した。幅2.0m以上、深さ20cmを測る。溝の肩部より多量の土器片が出土したが遺存は良くなかった。時期は弥生時代後期とみられる。



第2図 8トレンチ東側遺構平面図

第17トレンチ（第8図）

基本層序は、第1層耕土、以下黄灰色粘性砂質土である。遺構面は、黄茶褐色粘性砂質土である。ここでは、掘立柱建物跡2棟、堅穴住居址1棟、溝状遺構7条、土壤状遺構18基を検出した。

S B1701

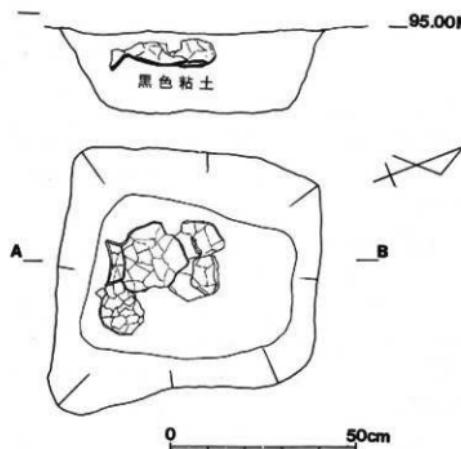
東西3間、南北5間の南北棟である。柱間距離は東西で1.5~1.7m、南北で1.2~1.8mを測る。柱穴は一辺80cm前後の隅丸方形で、一部不定形のものもある。深さは20cm前後で上面がかなり削平されている。柱痕は30cmと大きなものである。柱穴掘込みから白鳳時代の杯が出土しており、一部の柱穴を切るPit内埋土から奈良時代中期の高杯、杯身が出土していることから、時期は、白鳳時代（7世紀後半）から奈良時代前期（8世紀前半）のものと思われる。

S H1701

トレンチ南西隅で、北辺と東辺の一部を検出した。床面は、全体のおよそ5分の1が遺存しており、他は削平されて消滅している。一辺6mの方形の堅穴住居で、深さは10cmを測る。壁溝はない。四柱穴も不明である。北辺中央部で、焼土痕があり、取りつけカマドがあったとみられる。壁に沿う形で杯身が3点程出土している。時期は白鳳時代（7世紀後半）とみられる。

S D1702

トレンチ中央を東西に横断する幅60~80cm、深さ20cm前後を測る溝で、S B1701を切る。溝内埋土より7世紀後半から



第3図 8トレンチS X0801遺構図

8世紀初頭にかけての須恵器杯身、杯蓋が出土している。

第19トレンチ（第9図）

基本層序は、第1層耕土、以下黄茶色粘性砂質土、茶褐色粘性砂質土である。遺構面は黄色粘性砂質土で概ね標高97.0m前後を測る。ここでは掘立柱建物跡10棟、井戸状遺構13基、溝状遺構7条、土壤状遺構5基、火葬墓跡5基を検出した。

S B1901

東西2間分の柱穴を検出した。南北に延びる建物とみられる。柱間距離は東西で1.80mを測る。柱穴は径60cm前後の円形、もしくは不定形のもので、深さは50cm前後である。

S B1902

東西2間、南北2間以上の縦柱の南北棟である。柱間距離は東西で2.40m、南北で1.80mを測る。柱穴は径20～50cm前後の円形、もしくは不定形のもので、深さは15～20cm前後である。

S B1903

東西2間、南北1間以上の縦柱の南北棟である。柱間距離は、東西南北ともに2.70mを測る。柱穴は径30cm前後、深さ20cmの円形、もしくは不定形のものである。

S B1904

東西3間、南北2間以上の縦柱の建物である。柱間距離は、東西南北ともに2.70mを測る。柱穴は径20～60cmの円形、もしくは不定形のもので、深さ20～30cmを測る。

S B1905

東西2間、南北2間以上の縦柱の南北棟になる建物である。柱間距離は、東内2.10m、南北2.70mを測る。柱穴は30～50cmの円形、もしくは不定形で、深さは15～20cmを測る。

S B1906

東西3間、南北3間の縦柱の建物である。柱間距離は、東西南北ともに2.70mを測る。柱穴は30～60cm前後の円形、もしくは不定形で、深さは20～30cmを測る。

S B1907

東西2間、南北4間の縦柱の南北棟である。柱間距離は、東西で2.40m前後、南北で2.10m前後を測る。柱穴は、30～60cm前後の不定形のもので、深さ20cm前後を測る。

S B1908

東西4間、南北3間の東西棟である。柱間距離は、東西で2.10m前後、南北で1.80～2.10m前後を測る。柱穴は、径30～50cm前後の円形である。西南隅の2柱穴に柱根が遺存しており、径15～20cm前後の丸太を八角形に削取りしたもので、30cm前後遺存していた。柱穴の深さは概ね20～30cmである。

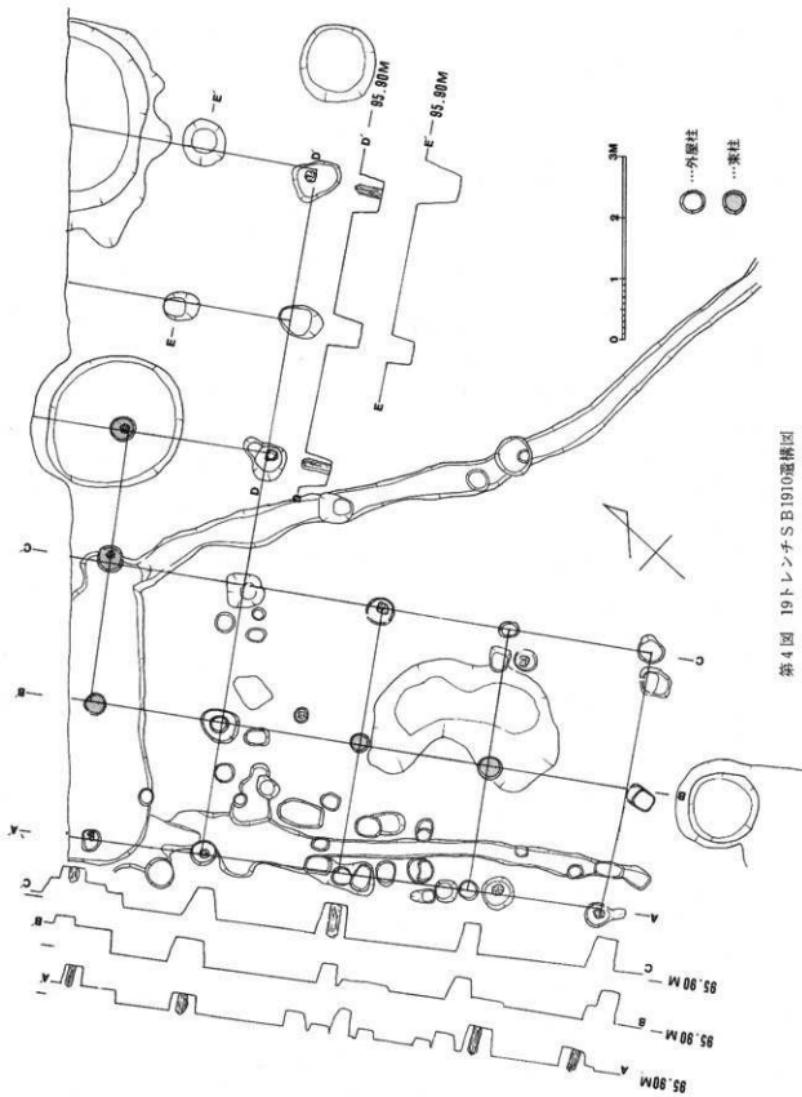
S B1909

東西4間、南北3間の東西棟である。柱間距離は、東西で2.70m前後、南北で1.80～2.10m前後を測る。柱穴は、径30～50cm前後の円形である。深さは20cm前後を測る。

S B1910（第4図）

東西5間、南北1間以上の主屋の南西隅に、東西2間、南北3間の南北棟がとりつく逆L字型の曲り家である。柱間距離は、主屋の東西で2.10～2.40m、南北は、東側2筋の柱列と西側1筋めが、2.10m、中のS K1904、S E1904を切る柱筋が2.40mを測る。柱穴は30～60cm前後の円形、もしくは不定形で、深さは30～40cmである。主

第4図 19トレンチSB1910断層図



尾にとりつく南北棟は、柱間距離が、南北で2.10m、東西で2.10mを測る。柱穴は30~40cm前後の円形で、深さは外側柱筋がやや深く40cm前後、中の柱筋が30cm前後である。柱痕は、いずれも15~20cm前後で、八角形に面取りをしたものが8箇所の柱穴内に遺存していた。主屋のうちS K1904とS E1904を切る柱穴は掘形が、いずれも浅く、径15cm前後の柱であることからみて束柱とみられる。さらに、外側の柱筋は、掘形も深く、柱も太いので、梁桁を支える側柱とみられる。柱穴掘形内からは、いずれも土師皿、黒色土器等の破片が多量に出土している。

S D 1901

トレンチの西側、S B1902の西に位置し、建物群とは平行に南北に流れる。幅60~70cm、深さ5~10cmを測り、南端で2条に分かれる。埋土中より土師皿、黒色土器、瓦質火舎が出土している。

S D 1902

S E1905にとりつく南北に流れる溝で、幅60~70cm、深さ10~15cm前後を測る。溝内より完形に復元できる黒色土器塊が出土している。

S D 1903

S K1902、S E1905に付随する南北に流れる溝で、幅60~70cm、深さ15~20cmを測る。

S D 1904

S K1903の南東隅から南に伸びる幅30~60cm、深さ10~15cmの溝で、埋土中に土師皿、黒色土器碗の破片を含む。

S D 1905

S K1904の南東隅から南東方向へ伸びる幅30~60cm、深さ15~20cmの溝である。

S D 1906

S E1906にとりつく東大の幅80~90cm前後の溝で、埋土中より土師皿、黒色土器の破片が出土している。

S D 1907

トレンチ西隅にて検出した幅1.80~2.00m、深さ30~40cmの溝で、南西隅で東に曲がる。一連の建物と同一方向にあるため建物を画する大溝と考えられる。埋土は、柱穴内埋土と同じ黒褐色粘性砂質土であるが、遺物は南西隅で、常滑焼、土師皿の破片が若干出土した以外は、ほとんど包含していない。

S E 1901

径1.60m、深さ1.50mを測る。井戸枠は抜き取られて遺存しない。上層に茶褐色の遺物包含層が堆積し、下層は黒灰色粘質土である。

S E 1902

径2.20m、深さ1.50mを測る。井戸枠は遺存しない。上層は遺物包含層、中層は腐蝕土層、下層は黒灰色粘質土である。

S E 1903 (第4図・図版四-7)

径1.00m、深さ1.30mを測る。埋土は、上層が暗茶褐色粘性砂質土の遺物包含層、下層が黒灰色粘質土、最下層は暗青灰色粘土である。下層に短径40cm、長径57cm、器高22cmを測る楕円形曲物の完形品が遺存しており、井戸枠の最下部にあたるものとみられる。

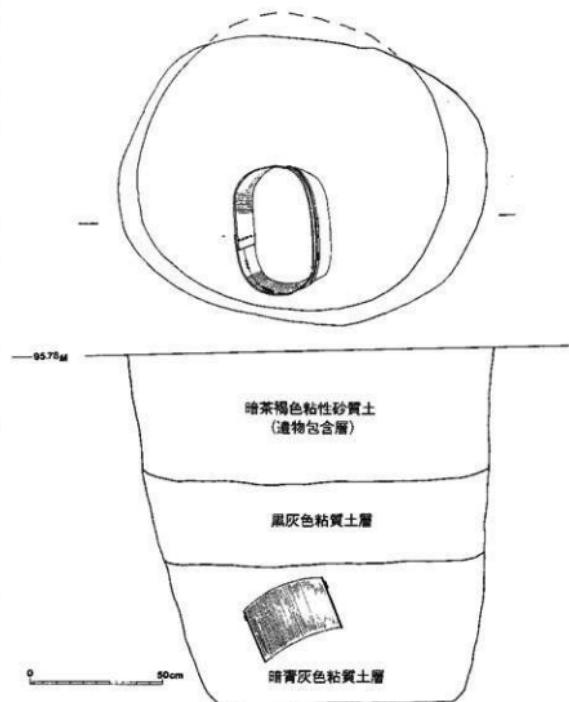
S E 1904 (第5図・図版四-8)

径2.00m、深さ1.50mを測る。井戸枠は遺存していない。埋土内にS B1910の柱穴が切り込まれており、束柱が遺存していた。又、井戸の埋土中央部には、節を抜いた径3~4cm、長さ1.20mの先を突がらせた竹が井戸底

まで指し込まれていた。埋土は、第1層が茶褐色粘性砂質土の遺物包含層、第2層が黒灰色粘性土層、第3層が暗灰色粘性土層、三層より土師皿、横櫛（図版十三-84）、刀子（図版十三-85）、箸が、それぞれ1点ずつ出土した。時期は、S B1910より古く、12世紀後半とみられる。

S E 1905

径5.00m、深さ1.20mを測り、井戸枠は遺存していないかかった。実際の井戸枠の掘程径は、3.00mで、井戸枠を抜き取る際に抜けたものとみられる。埋土は、S E 1904と同じであるが、第2層と第3層の間に筆、マコモ等の植物遺体が薄く堆積している。遺物の多くは、第1層より出土したものであるが、第2層および第3層より完形品となる黒色土器塊、土師皿と箸が数本出土し



第5図 S E 1903遺構図

ており、井戸を廃絶する際に投棄されたものと思われる。又、井戸の周辺には、一辺15~20cm前後の方形のPitが八角形状に並び、八角形の上層根があったことが推察される。時期は出土遺物より13世紀前半に廃絶した井戸とみられる。

S E 1906

径1.00m、深さ1.10mを測る井戸で、井戸枠は抜きとられて遺存しない。

S E 1907

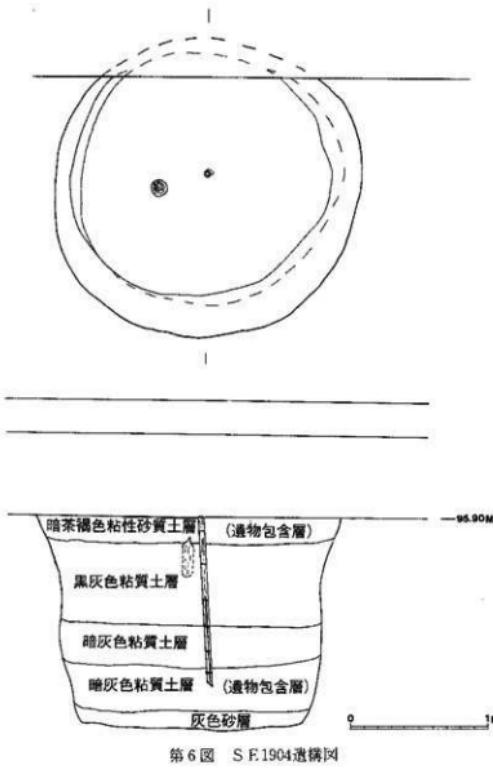
径0.70m、深さ1.00mを測る井戸で、井戸枠は遺存しない。埋土はS E 1904と同じである。第3層より、一枚の板草履（図版十三-86・87）が出土している他、羽釜、常滑辣鉢（図版十一-71）が出土した。遺物より13世紀後半頃に廃絶したとみられる。

S E 1908

径1.20m、深さ1.00mの井戸で、枠は遺存しない。

S E 1909

S E 1905の西南に位置する径1.00m、深さ0.80mの井戸で、枠は存在しない。



第6図 S E 1904遺構図

S K 1901

S E 1905の西に位置するが、S E 1909に伴なう東西3.80m、南北2.80m、深さ22cmの長方形のプランをもつ土壙で、底はほぼ水平になっている。洗場のような施設と考えられる。黒色土器焼、土師皿、羽釜、瓦器等が出土している。

S K 1902

S D 1903に接続する東西2.40m、南北2.50mの台形状の土壙で、深さは30cmを測る。底はほぼ水平で、S K 1901同様の洗場のような施設で、S D 1903は排水施設と考えられる。黒色土器焼、小碗、土師皿、羽釜等が出土している。

S K 1903

S E 1902の東に位置する東西5.00m、南北1.00m以上の長方形プランの土壙で、深さは20cmを測る。東南隅より排水施設のS D 1904がとりつく。

S K 1904

S K 1903の東に位置し、S K 1903を切る東西4.50m、南北1.50m以上の長方形プランの土壙で、深さは40cmを測る。東南隅に排水施設のS D 1905がとりつく。S B 1910の柱穴と柱根が埋土中にあることより、S B 1910より

S E 1910

S E 1909の西南に位置する径0.60m、深さ0.80mの井戸で、枠は遺存しない。

S E 1911

トレンチ北端に位置する径3.00m、深さ1.20mの井戸で、枠は遺存しない。埋土は、S E 1904と同じである。第3層の暗灰色粘性土より箸、黒色土器等のまとまった遺物が出土している。廃絶時期は、12世紀後半とみられる。

S E 1912

径0.80m、深さ1.20mの井戸で枠は遺存しない。埋土はS E 1904と同じで、第3層の暗灰色粘性土層より黒色土器碗完形品が1点出土した(図版八-24)。廃絶時期は12世紀後半とみられる。

S E 1913

トレンチの東南に位置する径1.00m、深さ0.80mの井戸で枠は遺存しない。

先行する施設である。黒色土器碗、皿、土師皿、常滑焼甕等が出土しており、土師皿、常滑焼甕の形態からみて14世紀初めに埋められたものとみられる。

S K1905

S K1904とS E1906の間に位置するひょうたん形の土壙で、礫が多量につまっていた。

S X1901(第6図・図版三-6)

トレンチ西南隅に位置する火葬墓で、ほぼ原形をとどめている。北に台形状に小石を積んだ祭壇状の施設と、南に棺を焼いた焼成施設から成る。焼成施設は、東西80~100cm、南北120cmの長方形のプランを成し、周囲が2~3cmの幅で焼土化している。全体に20cm前後掘りくぼめ、火の運びを良くするために三列に自然石を配置し、棺を置く台石としている。石の底は火を受けておらず、当初より置かれたものである。焼成部は、全体に灰と炭、骨片が堆積していたが、量的には少なく、人為的に焼いてから骨片等を採集したとみられる。棺の釘と骨片が中央部で若干確認できた。祭壇部とみられる小石群は、ほとんど火を受けておらず、灰、炭の堆積も認められない点より、棺を焼却した後に作られたものとみられる。土器等の出土をみなかったため、時期は不明であるが、建物群よりは後出するものとみられる。

S X1902

S X1901の北西に位置する径80cm前後を測るやや台形状の火葬墓で、深さは10cmを測る。埋土に焼土、灰、炭、骨片を含んでいた。焼成部のみの施設である。

S X1903

S X1902の北に位置し、一辺1.50m前後を測るやや台形状の遺構で、表面が焼土化しており、若干炭が混入していた。

S X1904

S X1903の南に位置し、規模はS X1903よりやや大きい。表面が焼土化しており若干炭が混入していた。

S X1905

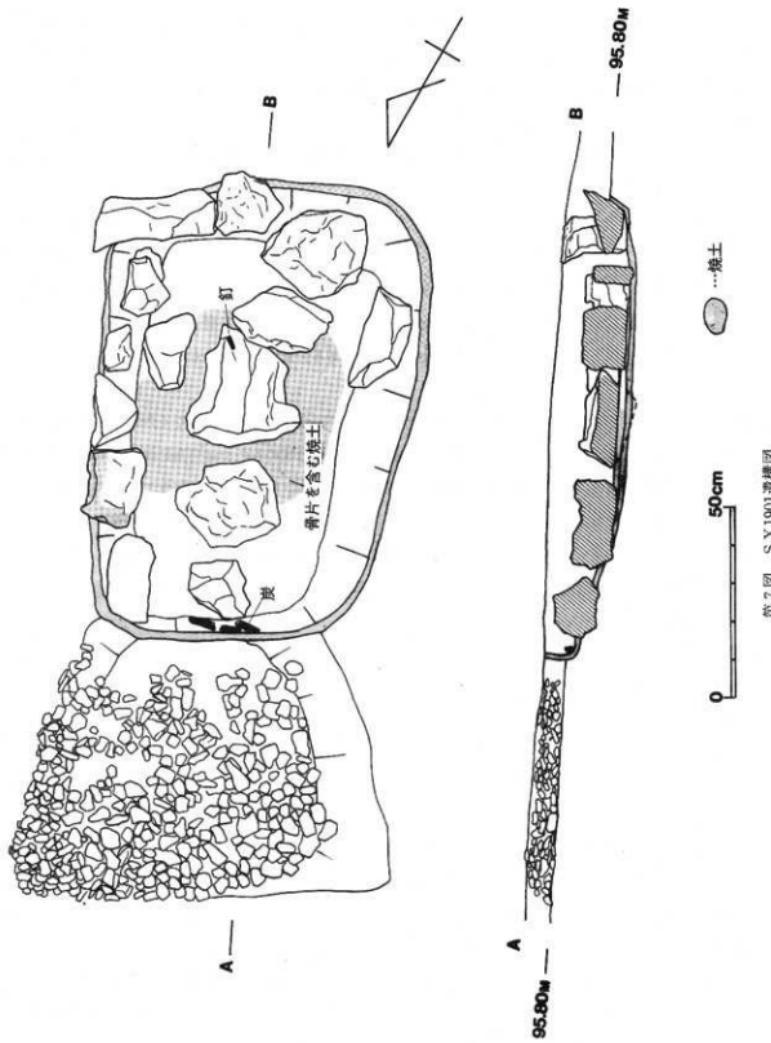
S X1902の西に位置し、一辺2.00mの大方形プランを成す。深さは30cmを測る。焼土、炭、骨片等は遺存していない。火葬墓になるかはやや疑問が残る。

5. 出土遺物

ここでは、主に19トレンチの出土遺物のうち比較的まとまって出土した土師皿、黒色土器、瓦器碗、常滑焼をとりあげて説明する。ただし、各遺構より出土した遺物は、井戸の場合は、廐船後に井戸栓を抜き取った跡、埋め戻しに使用した土に混入した土器片が、今回出土していること、同様に土壤状遺構、溝状遺構も堆積埋土に混入しているものが、ほとんどであるため、必ずしも、個別の遺構に伴う遺物で、遺構の年代を決めるものではないことを留意しておく必要があった。そのため、実測図版は、器種ごとにまとめるにとどまった。

土師皿

概ね、9タイプに分類できる。横田洋三の編年より、口縁部が一段または二段のナデにより引き起こされ、内側あるA₂タイプの4・5と口縁部が直線的に立ち上がるA₃タイプ、へそ皿のB₂タイプ、口縁部が大きく開き端部がやや外反するB₃タイプである。



第7図 SX1901遺構図

黒色土器

一般的に畿内で認められる主に内面のみに炭素を吸着させるもの（A類）や内外両面が漆黒色を呈するもの（B類）は、あまり認められなかった。とくに（A類）においては、内面が磨耗している場合、近江型黒色土器との区別がつきにくいこともある。大半は、形態、成形方法に瓦器の影響を受けたとされる近江に通有な黒色土器である。この近江型黒色土器は、大別すると2つのタイプに分かれる。又、多くは碗で、2点程小皿と小皿が出土している。

近江型黒色土器は、大橋信彌の編年による富波遺跡例（以下富波タイプ）の要素をもつものと、手原遺跡SD01出土例（以下手原タイプ）に分かれる。出土量は、手原タイプの方が多い。

富波タイプとしたものは、67～73、88～97、130、131、134～137、157、158、165～167、173の土器で、口、体部は内弯して外上方へ伸び口縁部で甘い稜をとり、外反するもので、高台部の断面がやや方形に近い肉厚の逆台形状のしっかりしたものである。調整は、内面が丁寧な研磨調整のあと、やや幅の細い花弁状暗文を密に施す。外面は、口縁部が比較的丁寧なヨコナデを施し、一部、杉江遺跡例のようにヘラ磨きを施すものもある。さらに高台部の接続面に、内面と同様放射状のヘラ磨きを施すものもある。又、器形そのものも歪みがなく、正円に近いものが多い。

手原タイプとしたものは、基本的には、富波タイプと大差はないが、口縁部の稜がなく内弯したまま伸びるものや直線的に伸びるものがある。高台部の断面は、やや貧弱な逆台形状のものや逆三角形状を呈する。調整は、やや粗雑化の傾向がみられ、ハケ調整、研磨調整など痕跡が残る。内面の花弁状暗文も、幅の広い暗文を数条施すものや、花弁状を成さないもの、富波タイプのように何度も花弁を重複させて密に施さず、一輪のみにするように、やや手抜きの感がある。外面も、指圧痕が明様に残り、口縁外側の横ナデも粗雑化する。又、高台部のはりつけも雑で、接続面に粘土のはみ出しや、割れを生じるものが多い。器形もかなり歪みが生じ、口縁部が波うつようになっている。

小皿、小碗については、181、182の小碗と183、184の小皿の4点だけであるが、調整手法等からみて富波遺跡例に併行するものとみられる。

瓦 器

出土点数が少なく、黒色土器との比較は困難であるが、口縁端部が直立ぎみの形態を呈するA類（202、203、205、206、207、210）と、口縁端部がわずかに外反するB類（208、209、211）と、口縁部と体部の境界に明瞭な稜をもち、やや角ばった感じを与えるC類（204、211～215）に分類される。

A類は、船堀編年のF型式またはG型式、白石編年のII-1またはII-2に相当するものと思われるが、在地色の強い土器のようにも考えられる。B類は、船堀編年のG型式または白石編年のII-2型式、C類は、船堀編年ではH型式、白石編年ではII-3型式にあたる。

常滑焼

小皿（234）、碗（235）、水瓶（236）、甕、鉢の出土がある。甕は、口縁部の形態から、3種類あり、口縁端部が外へ伸びたあとやや萎縮し、先端部に面取りを行い上方へつまみ出すA類と、「匂」状の受け口を呈するB類、口縁が肩に接近しており「N」形になるC類である。

鉢も、3種類あり、高台が断面逆三角形のA類と、断面長方形の腰高のB類と、高台が消滅し、口縁が指頭で押しナデされた平坦面をみせるC類である。

甕A類は、221、222、B類は、223～225、227～233、C類は、226がこれにあたり、鉢A類は、249～253、B

類は、237～240、254、C類は、241がこれにあたる。

甕A類は、赤羽編年¹²⁵によるII-前半から後半（1150～1200年代）、B類はIII-前半から後半（1250～1350年代）、C類はIV-後半（1400～1450年代）に比定できる。

鉢もA類がII-前半（1150～1200年代）、B類がII-後半（1200～1250年代）、C類がIV-後半（1400～1450年代）に比定できる。

以上の4器種による編年を総合すると、土師皿のA₂-4・5、A₃-2・3・4が1200～1300年代、A₃-5・6が1300～1400年代、A₃-7・8・9、B₂-1・2が1400～1500年代、B₃-1が1500年代と、瓦器の白石編年II-2が12世紀中葉、白石編年II-3が12世紀末から13世紀初頭、黒色土器の富波タイプが12世紀後半、手原タイプが13世紀前半、常滑焼壺A、鉢Bが1150～1200年代、壺B、鉢Bの1250～1300年代、壺C、鉢Cの1400～1450年代のそれに、概ね併行して出土していることがわかる。

又、星こそ少ないが、青・白磁の輸入陶磁器、及び東播系の神出產もしくは魚住産の片口鉢の出土をみると、今後その流通経路を知る意味で貴重な資料といえる。

柿木原遺跡出土遺物観察表

器種	器形	No.	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
須	坏身	1	口径 基高	10.0 3.7	底部はやや突出する 体部は内窓ぎみで上方へ開き、口縁部に直立する。 【縫合部は丸く收める】	底部外面、ヘラ切大調整 他は回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 青灰色
	坏身	2	口径 器高	12.6 4.0	底部水平、体部はやや内窓ぎみで上方へ開き、 口縁部との境に付いて縫合をとる。口縁部はやや外反ぎみに直立し、端部を丸く收める	底部外面、ヘラ切のあと指おさえ、ナデ、 他は回転ヨコナデ	焼成 良 底部外面使用確認 胎土 良 色調 灰色
	坏身	3	口径	16.0	体部はやや内窓ぎみに上方へ開き、 口縁部は直線的に外上方へ伸びる 【縫合部は丸く收める】	体部外面、下半、指压痕、ナデ、 他は回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 青灰色
	坏蓋	4	口径	14.0	体部は直線的に外下方へ伸びる 【縫合部にて屈曲し、重下する】 縫合部は丸く收める	回転ヨコナデ 底部外面、自然輪付着	焼成 良 胎土 良 色調 青灰色
	坏身	5	口径 器高	12.5 4.3	底部やや突出する、体部はやや内窓ぎみで上方へ開き、 口縁部との境に付いて縫合をとる 【縫合部はやや外反ぎみに直立し、端部を丸く收める】	底部外面、ヘラ切のあとナデ 他は回転ヨコナデ	焼成 良 底部外面使用確認 胎土 良 色調 灰色
恵	坏身	6	高台径 高台高	10.0 0.5	底部水平、底部と体部の境より内側に、外にふんばる 端部をつまみ出した高台を底盤に付す	底部外面、ヘラ切のあとナデ 他は回転ヨコナデ はりつけ高台	焼成 良 胎土 良 色調 灰色
	坏蓋	7	口径	16.0	天井部水平、天井部から体部にかけてやや屈曲し段を成し 【縫合部にかけてやや外上方へ再び屈曲】あと端部にて下方へ屈曲させる	回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色
	坏身	8	口径 基高	11.0 4.1	底部水平、休部より口縁部にかけてやや内窓ぎみに上方へ伸びる、端部は丸く收める	底部外面、ヘラ切大調整 他は回転ヨコナデ	7と同じ
	坏身	9	口径 器高	13.8 4.8	底部水平、体部は若干内窓ぎみで外上方へ伸びる 【縫合部はやや外反ぎみに外上方へ伸びる】	5と同じ	7と同じ
	坏身	10	口径 器高	16.4 6.5	底部はやや突出する 底部よりやや内窓ぎみしたあと体部は直線的に外上方へ伸びる 【縫合部はやや外反ぎみに外上方へ伸びる】 縫合部はややとかぎみに丸く收める	底部外面、指压痕、ナデ 他は回転ヨコナデ	焼成 甘い 土師質 胎土 良 色調 白灰色 淡赤褐色
器	坏身	11	口径	16.0	休部より口縁部にかけて直線的に外上方へ伸びる 【縫合部はとがる】	回転ヨコナデ	焼成 やや甘い 胎土 良 色調 黄灰白色
	坏身	12	高台径 高台高	10.0 0.5	6と同じ 端部のつまみ出しあと大きく外へ出る	底部へラ切大調整 他は回転ヨコナデ	7と同じ
石製品	ト石	13	残存度 幅	7.3 2.3	断面方形のくさび型	三面にいたずらを認む	泥岩
土筒器	高坏	14	底径径	11.0	八の字状にやや外反ぎみに付く、 底部で端部を屈曲させる	脚部上半はヘラによるていねいな削り 他はヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 赤褐色

器種	器形	No	法量 (ml)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
須恵器	环状	15	口径 18.4	天井弧、水平 口縁部にてやや段を成し内側 したあと端部を屈曲させ、や やとかげきみにする	回転ヨコナデ	7と同じ	pit内 (同一箇所)
	水瓶	16	高台径 5.6 高台高 0.4	体部は直線的に外へ広へ伸び る、底部と体部の境よりやや 内側に外にふんばる台形状の 高台を付す、接地面は外側に ある	底面内面、指圧痕 他は回転ヨコナデ	7と同じ	
	壺	17	口径 22.0	肩部は直線的に内上方に伸び 肩縁部で大きく内凹し屈曲 したあと外上方へ聞く 口縁部は外側と内側に面を とりやがりきみにつまみ 出す	口縁部、内外面、ヨコナデ 肩部外面、ヨコ方向のハケも しくは端ガキ目 肩部内面、同心円文を刻んだ 板状工具による連続タキ	7と同じ	
土師器	口径 器高	18 21	8.0 ~8.6 1.4 ~1.5	底部は水平なものとやや弯曲 するものがある 口縁部はやや内窓し外上方へ 聞く、端部は丸く収める 器形のひずみはない	底部外面、指圧痕 口縁部および底面内面ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 黄灰褐色	SE1904 第2層 A ₃ -4 タイプ
	口径 器高	22 30	8.0 ~9.4 1.2 ~1.5	底部は水平なものとやや弯曲 するものがある 口縁部はやや内窓して外上方へ 聞く 口縁部は丸く収める 全形にひずみしている	底部外面、指圧痕 口縁部および底面内面ヨコナデ 「」の字状の ナデを施すものもある	焼成 良 胎土 良 色調 黄灰褐色 黄灰白色 淡赤褐色 黄灰茶色	SE1905 第2層 31, 32は 第1層 22 A ₂ -3, 5 31 タイプ 30 A ₃ -3, 4 28はA ₃ -5 タイプ 31はB ₂ -1 タイプ 32はA ₃ -5 タイプ
	口径 器高	31	8.0 1.9	底部は山型にへこむ、へそ凹 口縁部は上方に直線的に聞く、 端部はやや内窓し、面をとり、端 部はややとがる	底部外面、指圧痕 口縁部および底面内面ヨコナデ		
	口径 器高	32	14.0 2.0	底部は水平、口縁部はやや内 窓して上方に直線的に聞く 端部はやや内窓し、端部は丸く 収める	底部外面、口縁部外面下半、 指圧痕 他はヨコナデ		
	口径 器高	33 34	8.0 9.0 1.5	底盤はやや弯曲する 「」の字状の ナデを施すものがある 底部はやや内窓したあと外 上方へ聞く、端部はやや内側 に屈曲し、丸く収める	32と同じ	焼成 良 胎土 良 色調 黄灰白色	SE1909 A ₃ -4 タイプ
	口径 器高	35 36-1 36-5	8.0 1.5 ~1.7	底盤はやや弯曲する 口縁部はやや内窓したあと外 上方へ聞く、端部はやや内側 に屈曲し、丸く収める	32と同じ	焼成 良 胎土 良 色調 黄灰褐色 黄灰白色	SF1911 A ₂ -4 タイプ
	口径 器高	37 41	8.2 ~10.0 1.0 ~1.8	底部は水平なものとやや弯曲 するものがある、口縁部はや や内窓したあと外上方へ聞く 口縁部は丸く収める	底部外面、指圧痕 他はヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 黄灰褐色 黄灰白色	SE1912 A ₂ -4 タイプ
	口径 器高	42	10.0 14	底部平、口縁部はやや外反 ぎみに外上方へ聞く、端部外 面に面をとり、端部はややと がる	底部外面、指圧痕 他はヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 淡赤褐色	SX1901 周辺 A ₂ -5 タイプ
	口径 器高	43 59	8.0 ~8.6 1.5 ~2.0	22~30と同じ 53は42と同じ	32と同じ	20~30と同じ	pit内 A ₃ -4 タイプ
	口径 器高	60 61	7.0 1.8	底部は山型にへこむ、へそ凹 口縁部はやや内窓して外上方 に伸び、端部外延にて外反し 端部はやや屈曲してつまみ出 し丸く収める	底面外面、指圧痕 口縁部外面、口縁部 外面、指圧痕、つめ跡が連續 に残る、他はヨコナデ、内 面は「」の字状にナデ	焼成 良 胎土 良 色調 黄灰白色	SK1904 B ₂ -1 タイプ
	口径	8.0		底部は水平	32と同じ	焼成 良	pit内

器種	器形	No	法量 [cm]	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
土 師 器	皿	62 l 66-1 l 66	11.0 11.4 16.0 1.6 22 2.1	口縁部はやや外反ぎみに外上方へ伸び、口縁部でやや屈曲し端部は丸く收める ～屈曲させ外反させる端部は丸く收める		胎土 良 色調 黄灰茶色 黄灰白色 墨灰色	イコ面 62-66-4 Aa-8, 9タイプ 66-5 Bb-1タイプ
黒 色	口径 器高 高台径 高台高	15.0 5.0 ~5.6 5.0 l 73	15.0 5.0 ~5.6 0.4 ~0.5	体部は大きく内窓して外上方へ伸び、口縁部でやや屈曲し端部は丸く收める ～屈曲させ外反させる、外面が丸く突出する 67, 69か、口縁部と体部の外面縁に明顯な段線をとるが、72 73がある 断面、逆三角形、ないし逆台形状の外へふんばる安定した高台を底面に付す	口縁部外面ヨコナデ 体部外縁正面反 腹の強い斜毛調整（幅1cm） を口縁部でヨコ、体部内面斜方向に施したあと、幅の細い方向に施したあと、幅の細い方向に施す 口縁部内面に沈線をめぐらす 高台ははりつけ	焼成 良 胎土 良 色調 口縁部内面黑色 体部外面、底部 淡黄灰白色 淡黄茶色	SE1905 富波遺跡タイプ
燒	口径 器高 高台径 高台高	14.6 4.6 5.4 ~6.0 l 87	~15.0 4.6 5.4 ~6.0 0.4 ~0.5	体部はやや内窓して外上方へ伸びるか、直腹の大きく外上方へ伸び、口縁部でやや屈曲し、立ち上がるものと外反するものもある。端部は丸く收める ～口縁部と体部の境に甘い接をとるものもある ～断面逆三角形の外へふんばる高台を付す	口縁部外面ヨコナデ 体部外縁正面反 口縁部内面ヨコ、体部内面斜方向に斜毛調整（幅1cm）を施すものもある 体部内面にヨコ状の暗文を施すものもある ～口縁部内面に沈線をめぐらす 高台ははりつけ、77, 78は体部外面にX印のヘタ記号を付す	焼成 良 胎土 良 色調 口縁部外面、 体部内面、黒色 体部外面、底部 淡黄灰白色 淡黄茶色	SE1905 手原SD1タイプ 85, 86-2番、黒 灰色粘土より出土 井戸掘き取り後の 理上に埋入したもの 65 圖版六-21 66 圖版六-20
土 器	高台径 高台高	5.4 ~5.8 0.5 ~0.6	5.4 ~5.8 0.4 ~0.5	外へふんばる外面がやや外反する 断面逆三角形状、もしくは逆台形状の高台を底面に付す 88は大きく内窓する体部を呈する	外面ヨコナデ はりつけ高台	焼成 良 胎土 良 色調 淡黄灰白色 淡黄茶色 内面 黑色	SE1905 富波遺跡タイプ
	高台径 高台高	5.4 ~5.8 0.4 ~0.5	5.4 ~5.8 0.4 ~0.5	外へふんばる 断面逆三角形状、もしくは逆台形状の高台を底面に付す	外面ヨコナデ はりつけ高台	焼成 良 胎土 良 色調 淡黄灰白色 内面 黑色	SE1905 手原SD01タイプ?
	高台径 高台高	5.6 0.3	5.6 0.3	外へふんばる断面逆台形状の 軽平な高台を底面に付す	外面ヨコナデ はりつけ高台	焼成 甘い 胎土 良 色調 98-102と同じ	SE1905 志那郡タイプ
	口径	15.0	15.0	体部はやや内窓して外上方へ伸びる ～口縁部はやや屈曲して立ち上がり、端部は丸く收める ～口縁部と体部の境は不明瞭 ～口縁部内面に浅い沈線をめぐらす	口縁部外面ヨコナデ 体部外縁、指圧痕 体部内面にやわらかな花弁状暗文を施す 110, 119, 114は無文 112 はスヌの暗文をせず 111は斜毛調整をする	焼成 良 106, 109, 113 114は甘い 他は普通 胎土 良 色調 淡黄灰白色 内面 黑色 112は淡黄灰白色	SE1905 手原SD01タイプ
	口径	15.0	15.0	体部は外上方へ直線的に伸びる ～口縁部はやや屈曲して立ち上がり、端部は丸く收める ～口縁部と体部の境に甘い接をとり、～口縁部はやや屈曲し外反する 端部は丸く收める	口縁部外面、ヨコナデ 体部外縁、指圧痕 体部内面にやわらかな花弁状暗文ある ～口縁部内面に浅い沈線をめぐらす 123-127は無文	焼成 120-123は良 124-127はや や甘い 胎土 良 色調 淡黄灰白色 120-122は内 面 黑色	
	口径	15.0	15.0	体部はやや内窓して外上方へ伸びる ～口縁部と体部の境に甘い接をとり、～口縁部はやや屈曲し外反する 端部は丸く收める	口縁部外面、ヨコナデ 体部外縁、指圧痕 体部内面、暗文を施す、～口縁部内面に沈 線をめぐらす	焼成 良 胎土 良 色調 口縁部外面、 体部内面、黒色、 体部外縁、淡黄 灰白色	SE1901 手原SD01タイプ

器種	器形	No	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
墨	口座	129	15.0	体部は大きく内窓し、外上方へ伸びる 口縁部と体部の境に甘い枝を とる。口縁部は丸く收める 内面に沈めぐる	口縁部外面ヨコナデ、若干へ うき 体部外側指圧窓、内面は刷毛 調整のあと、ていねいな花弁 状繪文を施す	焼成 良 胎土 良 色調 淡黄灰白色 内面 黒色	SE1909 富山遺跡タイプ
		130	15.0	体部はやや内窓して外上方へ 伸びる 口縁部はやや外反し、端部で 立ち上り丸く收める。端部 内面に沈めぐる	I. 口縁部外面ヨコナデ、体部外 側指圧窓 II. 内面はやや難い花弁状繪文 130は若干手形調整を施す	129と同じ	手原SD01タイプ
	口座	131	15.0	体部はやや内窓して外上方へ 伸びる I. 口縁部はやや外反し、端部で 立ち上り丸く收める。端部 内面に沈めぐる	I. 口縁部外面ヨコナデ、体部外 側指圧窓 II. 内面はやや難い花弁状繪文 130は若干手形調整を施す	129と同じ	手原SD01タイプ
		132	15.0	体部は大きく内窓し、外上方へ 伸びる 口縁部と体部の境に枝をとり 口縁部はやや外反し、端部を 丸く收める。端部内面に沈め ぐる	口縁部外面、ヨコナデ 体部外側、指圧窓 内面、花弁状繪文なし	129と同じ	SE1910 富山遺跡タイプ
	口唇 高台径 高台高	133	15.0 4.5 4.8 0.5	128と同じ 底面部へふんばる断面逆三 角形状の高台を付す。口縁部 周囲に凹凸程度の凹溝を施 す	口縁部外向、ヨコナデ 体部外側、指圧窓 内面、花弁状繪文を施す ス落書きせず	焼成 良 胎土 良 色調 内外面とも淡黄 灰白色	手原SD01タイプ
		134	15.0 5.0 -5.3	132と同じ 武部外へふんばる、断面逆 三角形のもしくは逆V字形の 高台を付す	129と同じ	129と同じ	SE1911 富山遺跡タイプ 135、四版七-23
		137	5.2 -5.8 0.7				
焼	口径	138	15.0	128と同じ 141-143は、口縁部まで直 線的に伸びる端部で若干曲がさ せる。体部と口縁部の壁は不 規則	128と同じ	128と同じ	手原SD01タイプ 143は、志野中タ イプか
		143					
	口唇 高台径 高台高	144	15.0 4.5 5.5	体部はやや内窓したあと、直 線的に外上方へ伸びる。口縁 部はやや削出しで立ち上り 端部を丸く收める。体部と口 縁部は甘く收める。体部と口 縁部周囲にふんばる断面逆V 形のものを底面に付す	口縁部外面ヨコナデ 体部外側、指圧窓 体部内側に花弁状繪文を施す 口縁部端部近くに沈縫を めぐらす はりつけ高台	焼成 良 胎土 良 色調 内面 黒色 外側 淡黄灰色 144は底部内面に重ね 焼き田窓あり	SE1912 144、四版八-24 手原遺跡タイプ
		146	0.5				
	高台径 高台高	147	5.4 0.7	外にふんばる断面逆二角形の 高台を底面に付す	外向ヨコナデ。はりつけ高台 底面外面に△印のヘラ記号を 付す	焼成 良 胎土 良 色調 淡黄灰色 内面 黑色	SE1906 手原遺跡タイプ
		148	5.2 0.5	外にふんばる外側がやや外反 する断面逆台形状の高台を底 面に付す	外向ヨコナデ 内面に花弁状繪文 はりつけ高台	焼成 良 胎土 良 色調 淡黄灰白色 内面 黑色	SE1907 手原遺跡タイプ
	器	149	5.4 0.5	148と同じ	外向ヨコナデ はりつけ高台	焼成 良 胎土 良 色調 淡黄灰白色 内面 黑色	SK1912 手原遺跡タイプ
		151	5.3 0.5	外にふんばる断面逆台形状の 高台を底面に付す	外向ヨコナデ はりつけ高台	焼成 良 胎土 良 色調 淡黄灰白色 内面 黑色	SK1904 手原遺跡タイプ
	高台径 高台高	152	6.6 0.5	外にふんばる外側がやや外反 する断面逆台形状の高台を底 面に付す	外向ヨコナデ はりつけ高台	焼成 良 胎土 良 色調 淡黄灰白色 内面 黑色	SK1903 手原遺跡タイプ
		153	5.2 -5.8	外にふんばる断面逆台形状の 高台を底面に付す	外向ヨコナデ はりつけ高台	焼成 良 胎土 良	pit内 手原遺跡タイプ

器種	器形	No.	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
黒	壺	156	高台高 5.1 ～0.5	155は、外面部がやや外反し、 端部を丸く収める	155は、暗文なし	色調 淡黄灰白色 内面、黒色、灰色	
		157	口径 15.0 高台径 6.0 高台高 0.7	体部は大きく内寄したあと外上方へ伸びる。体部と口縁部の間に甘く接ぎとり、口縁部はやや外反したあと外上方へ伸びる。端部は丸く収める。やや内傾する複合形形状の場合を底部に付す	口縁部外面、ヨコナデ 体部外面、指圧痕 体部内面に花押模文を付す はりつけ高台、口縁部内面に 付線	焼成 良 胎土 色調 淡黄灰茶色 内面 黒色	SE1911 南 窓波遺跡タイプ
		158					
		159	口径 15.0 器高 5.1 高台径 4.7 高台高 0.6	157と同じ	口縁部外面 ヨコナデ 体部外面、指圧痕 159は若干花押模文、160 は無文。はりつけ高台、159 はスス蒸着せず	焼成 159ややせいい 160は良 胎土 色調 淡黄灰白色 内面 黑色	SD1902 159、岡原七-22 手原遺跡タイプ
		160					
	甌	161	口径 15.0 器高 4.6 ～5.0	144～146と同じ	144～146と同じ 162、163はスス蒸着のみ	焼成 162以外はやや 甘い 胎土 色調 淡黄灰白色 淡灰茶色 内面 黑色	pit内 手原遺跡タイプ
		162	高台径 5.6 ～5.8				
		163	高台高 0.5				
		165	口径 15.0 器高 5.1 ～5.7	体部は大きく内寄したあと外上方へ伸びる。口縁部と体部の間に接し成り、口縁部はやや反り、端部を丸く収める	口縁部外面 ヨコナデ 体部外面、指圧痕 内面に調節捺印 はりつけ高台	焼成 良 胎土 色調 淡黄灰茶色	イコウ面 富松遺跡 タイプ
		167	高台径 6.0 ～6.8	底部に外へんぶらん断面を含む 形状の内厚の高台を付す	口縁部内面に丸い付線		165 国版八-25 166 国版八-27 167 国版八-26
土	甌	168	口径 15.0	144～146と同じ	144～146と同じ	焼成 良 胎土 色調 淡黄灰白色 内面 黑色	イコウ面 手原遺跡タイプ
		172	～	169～171は本部と口縁部の 境に接しとらず直線的に伸びる			
	高台	173	高台径 6.0 高台高 0.7	外へんぶらん、断面逆台形状 の肉厚の高台を底部に付す	外面 ヨコナデ はりつけ 高台	焼成 良 胎土 色調 淡黄灰白色 内面 黑色 底部内面に重ね焼き压 痕	イコウ面 富松遺跡タイプ
		174	高台径 5.2 ～6.0	外へんぶらん、断面三角形も しくい逆台形状の高台を底部 に付す	173と同じ	焼成 良 胎土 色調 淡黄灰白色 淡灰茶色 内面 黑色	イコウ面 手原遺跡タイプ
		180	高台高 0.4 ～0.6				
小 壺	口縁	181	口径 9.0 器高 10.0 3.0	体部はやや内寄したあと直線 的に外上方へ伸びる。口縁部 と体部の境に接しとり口縁部 はやや屈曲して外反する。端 部は丸く収める。外へんぶら ん逆台形状の内厚の高台を底 部に付す	口縁部外面 ヨコナデ 体部外面、指圧痕 体部・口縁部内面、横方向の へラ磨き。はりつけ高台、181 は口縁部内面に付線	焼成 良 胎土 色調 黑色	181はSK1903 国版八-28 18はSK1905
		182					
	口縁	183	口径 10.0	体部は外上方へ直線的に伸び る。口縁部は丸く収める	口縁部および内面、へラ磨き 底部外面、指圧痕	焼成 良 胎土 色調 黑色	183 SE1905 国版八-29 184 SE1901
		184	器高 1.8				
輸入陶磁器（青磁）	甌	185	口径 15.6	体部はやや内寄して外上方へ 伸びる。	口縁部外面にヘラミガキのしの き調節文を施す。 全面に青緑色の半透明釉	焼成 良 胎土 色調 青緑色	国版九-52 国版九-53
		186		口縁部は丸く収める			
	口縁	187	15.6	直線的に外上方へ伸びる。口 縁部で端部は丸く収める	体部外面にやや細かなヘラミガ キの露文を施す。 全面に青緑色の半透明釉	焼成 良 胎土 色調 青緑色	国版九-54
		188	17.8	187と同じ	内外面とも露文	焼成 良 胎土 良	国版九-55

器種	器形	No.	法 量 (cm)	形 態 上 の 特 徵	手 法 上 の 特 徵	そ の 他 の 特 徴	遺 構・備 考	
		189	高台径 高台高	5.0 0.7	底面部に断面方形状の内厚の安定した高台を付す 底面部は周囲で体部は内窪みに外側へ伸びる	185、186と同じ 高台はつまり出し	色調 うぐいす色	
		190				185、186と同じ	四版九-60 四版九-61	
輸入陶磁器 (白釉)	塊	191	口径	20.0	体部は直線的に外上方へ伸びる、口縁部はやや横曲して立ち上がる、191、193に直線的に伸びる、192、194がある 口縁部外面にやや大なりの玉縁の193、194がある	やや滑味のかかった白色透明釉をかける 191、193は気泡を含む	焼成 良 胎土 良 色調 やや青味のかかった白色	四版九-56 四版九-57 四版九-58 四版九-59
		194						
	小皿	195	高台径 高台高	7.4 1.3	195は断面逆三角形の安定した高台 196は断面逆三角形の内厚の安定した高台いずれも底面部の盛壁無い	195は、底部内面、体部内面に櫛ガキの模文 196は、高台と体部の境に羽状の模文が施され、やや青っぽい白色透明釉をかける	焼成 良 胎土 良 色調 やや青味のかかった白色	四版九-62 四版九-63
		196		0.8				
瓦	小皿	197	口径 器高	10.0 1.8 ~21	底面部はほぼ水平 体部はやや内窪して外上方へ伸びる、198は口縁部との境に接し成る、口縁部は外反する、窓型れすれもなく取める	口縁部外面ヨコナダ 体部外弧、指圧痕 体部内面でくびれた刷毛削除のあと連続する蛇行模文を施す	焼成 良 胎土 良 色調 黒色	197~199、201 SE1905 200、pit内 四版九-50
		198						
	塊	202	口径	15.0	体部は若干内窪みに外上方へ直線的に伸びる 口縁部で若干屈曲し丸く收める	口縁部外面、ヨコナダ? 体部外弧、指圧痕 体部内面、横む向のていねいなヘラ磨き 体部外弧、上半部は連続する蛇行模文	焼成 良 胎土 良 色調 黑色	SE1905 四版九-30
		203						
器	塊	209	口径	15.0	体部はやや内窪みに外上方へ伸びる、口縁部と体部の境に明瞭な接を成し、口縁部で屈曲し立ち上がる204と、接を成さない、205~207、二段の接を成し、端部を上方につまら出す203、208、209がある、いずれも端部は丸く取れ、内面に刃跡をめぐらす	口縁部外面ヨコナダ? 体部外弧、指圧痕 体部内面接のていねいなヘラ磨き 205は体部上半部に連続する蛇行模文	202と同じ	SE1905 四版九-32 ~九-37
		210	口径 器高 高台径 高台高	14.8 4.9 4.2 0.6	体部はやや内窪して外上方へ伸びる、口縁部と体部の境に接を成す、端部外面をとり、接を成し、端部を上方へつまみ出す、底面部に外へふんばる逆立形状の窓台を付す	口縁部外面、磨き 体部外弧、指圧痕 体部内面、横方向のていねいなヘラ磨き はりつけ窓台	202と同じ	SD1902 四版九-39
	器	212	口径	14.0	211と同じ 窓台は不明	口縁部外面、ヨコナダ、ヘラ磨き、体部外弧、指圧痕、ヘラ磨き、体部内面、横方向のていねいなヘラ磨き、体部外面、上反側に羽状の模文	202と同じ	pit 内 四版九-40
		213	口径	14.0 15.0	211と、同じ 高台は不明	211と同じ	202と同じ	イコウ pit 内 四版九-41 四版九-42 四版九-43
		216	高台径 高台高	5.0 ~5.2 0.4 ~0.6	底部に外へふんばる、断面逆立形の窓台を付す	底部内面、暗文 219は体部外弧、ヘラミガキ	202と同じ	218、219、 SE1905 216、220、pit内 217、イコウ面 四版九-47
		220						
		221	口径	40.0	口縁部は大きく外上方へ聞く 端部はつまり出して丸く取れる、口縁部と窓部の境は不明瞭	口縁部と体部外面はヨコナダ 体部内面、光、刷毛削除、肩部に指圧痕、肩部に自然輪付着	焼成 良 胎土 良 色調 内面 灰茶色	

器種	器形	No.	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
常 要		221				外面 外面灰色	
		222	口径 40.0	221と同じ 端部が外面に倒を取る	口縁部と体部外面ヨコナデ 体部内面、ヨコナデ、指圧痕	焼成 良 胎土 良 色調 灰黄色	pit内 図版十一-67
		223	口径 35.6	口縁部は外反し端部は逆L字 状の受口を呈する	ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 暗灰茶色	イコク面 図版十一-66
		224	口径 30.0	類部と肩部を画する線がなく 肩部は輪郭的 口縁部は逆L字形状の受口を呈 する	口縁部、体部内面、ヨコナデ 体部外側、ヘラナデ	焼成 良 胎土 良 色調 茶色	イコク面 図版十一-65
		225		体部上半に最大径を有する 肩部は直線的に外反し、口縁 部にて外反する。底部は不明 瞭	肩部、体部内面、ヨコナデ 体部上半、ヘラおさえ 体部下半、ヘラ削り 押印は施さず	焼成 良 胎土 良 色調 淡黄灰色 茶褐色	SK1904 図版十一-70
		226	口径 30.4	口縁の腰帶は広く外側への伸 びは鈍る、口縁が弱に近接し てあり、「N」形になる	外面 ヨコナデ 内面 刷毛調整	焼成 良 胎土 良 色調 茶色	SK1904 図版十一-68
		227		直線的に外上方へ伸びる 体部下半	外面刷毛調整、ヨコナデ 内面窓、刷毛孔、(板伏工具 か?)下半格子状の連続す る押印を施す	焼成 良 胎土 良 色調 茶褐色	pit内 図版十一-69
		228 230		体部上半部	内外面、刷毛調整 格子状の押印を付す 押印の内面にあて木、指おさ えの跡がある	焼成 良 胎土 良 色調 外面 灰茶色 内面 灰色	228 SE1905 229 イコク面 230 SE1906
		231 232	底脚径 20.0	底部水平、体部は直線的に外 上方へ伸びる	内外面ともナデ	焼成 良 胎土 良 色調 暗灰色 茶褐色	SE1905
		233	底脚径 12.0	231、232と同じ	内外面ともナデ	焼成 良 胎土 良 色調 乳白色	
小 皿	口径 器高	234	8.0 2.0	底部水平、体部は外上方へ直 線的に伸びる。口縁部で肥厚 し、端部は丸味を帯びる	底部、回転糸切腹 体部内外面、底部内面、ヨコ ナデ	焼成 良 胎土 良 色調 黒色砂粒含む 灰色	pit内
		235	口径 16.6 器高 7.0 高台径 7.0 高台高 0.5	体部はやや内凹ぎみに外上方 へ伸びる。口縁部はやや外反 し、端部で立ち上がり丸く收 める。底部と体部の境に凹面 逆三角形の高台を付す	底部外面、回転糸切腹 体部内外面、ヨコナデ、底部 内面、指圧痕。はりつけ 高台、高台側面にもみ压 痕。体部と高台部の境にヌタ 痕	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	イコク面
焼 水 瓶		236	武部径 13.0	体部下半よりやや内凹ぎみに 外上方へ伸びて中央部でやや膨 らむ。肩部は内側に凹曲する 口縁部は大きく外上方へ外反 する。底部外面、高台状につ まみ出す	ヨコナデ 口縁部 刷毛に輪付着	焼成 良 胎土 良 色調 灰茶色 灰色	イコク面 pit内 SE1905
		237 240	口径 30.0	体部は直線的に外上方へ伸び る。口縁部は腰帶がやや薄くな り、端部で肥厚し、丸く收 める。粘土ひもの巻上げ痕 残る	ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	237 SE1907 図版十一-71 238 イコク面 240
片 口 鉢		241	口径 30.0	体部は直線的に外上方へ伸び る。口縁部が押しぬけさせ 平凹面を有する	ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 青灰色	pit内
		247	口径 30.0	体部は直線的に外上方へ伸び る。端部でやや屈曲する。端部	ヨコナデ	焼成 良 胎土 良	247 SD19 248 SE1908

器種	器形	No.	法景(回)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
東海螺貝器	片口鉢	248		外腹は丸味を帯び面を成す、端部はく取れる		色調 青灰色	
常滑焼	片口鉢	249	高台径 12.0 ~15.0	体部はやや内湾きみもしくは直線的に外上方へ傾く	体部外面、ヘラ削り、ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	250 SK1905 他はイコウ面 模版十一-73 74 75
	片口鉢	253	高台高 ~1.0	底部部と体部の境に断面逆台形状の外にふんばる安定した肉厚の台を付す	体部内面、ヨコナデ		
	片口鉢	254	高台径 15.0 高台高 1.7	体部は外上方へ聞く 底部と体部の境に断面逆台形状の外にふんばる頗る高い丸足した高台を付す	底部外面、ヘラナデ 体部外張、ヘラ削り 他はヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	イコウ面 模版十一-76
東須稚貝器	片口鉢	255 256	高台径 12.0	底部水平 体部は外上方へ聞く	ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	255 イコウ面 256 SE1905 模版十一-77-78
瓦羽器	口径	257	20.0	口縁部内側にし、端部は平坦面を有する、口縁部が下に水平に伸び、断面台形状の突起状の脚をはりつける	ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 黒色	SE1904 模版十一-80
	口径	258 l 261	~21.0	口縁部は直線的に上方へ伸びる、口縁部は平坦面を成す 体部はやや内湾きみ外上方へ伸びる、口縁部下に水平に伸びる逆台形状の脚をはりつける	ヨコナデ	257 と同じ	258 SE1904 259 SE1905 260 SE1907 261 SE1907 模版十一-79
	口径	262	16.0	257 と同じ 体部お驚き丸味を帯びる	ヨコナデ	257 と同じ	pit内
壺	口径	263	22.0	261 と同じ	ヨコナデ	257 と同じ	pit内
	口径	264	30.0	体部直線的に上方へ伸び、 やや内湾きみもしくは直線的に内側する、端部はく取れる 口縁部は半円に、水平に伸びる 突起状の脚をつまみ出す	ヨコナデ 体部外面、指圧痕	257 と同じ	SE1905 SE1907 模版十一-81
土師器	丸	265 l 267	口径 24.0 ~26.0	体部から口縁部にかけてやや内湾きみもしくは直線的に内側する、端部はく取れる 口縁部は半円に、水平に伸びる 突起状の脚をつまみ出す	体部外面、ヨコナデ、指圧痕 体部内面、刷毛調整	焼成 良 胎土 良 色調 灰茶色 黄褐色	265 SE1904 266 SE1905 267 SE1905
瓦	羽条脚	268 l 275		脚部と体部接地面の内側は人字内側する、断面は切形で 脚は直線的に伸びる 脚部底面地はやや内側に屈曲する	ヘラナデ、ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 黑色	268 ~ 269 SE1904 270 ~ 274 SE1905 275 SE1912 模版十一-82
	火	276		体部はやや内湾きみに伸びる 1半周に2条の突帯をめぐらす、 突帯間に菱形の四面文の中に花文を施した押印を施す	ヨコナデ	焼成 やや甘い 胎土 良 色調 黑色	イコウ面
器合		277		体部は直線的に外上方へ伸び 上端部に2条下端部に1条以上の突帯を付し、上端の突端間に菱形の四面文に花文を施した 押印の文様を施す	ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 墓灰色	イコウ面
		278		体部は内湾きみに立ち上がり 口縁部は丸味を有する、端部上面に平坦面を成す、上端部に2条の突帯を付し、突端間に菱形文を 付す	ヨコナデ、刷毛調整	焼成 良 胎土 良 色調 淡赤褐色	イコウ面
		279		体部は直線的に外上方へ伸びる、方型の底部を成し直胴に 脚部へ削りによる面取り	ヨコナデ	焼成 良 胎土 良	SK1905 SD1901

器種	器形	No.	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
瓦器	火合	280		輪郭状の脚をつける	削毛調整	色調 黒灰色	
				底部水平、体部より上方へ直線的に伸びる、体部下端に1条の突起を有する	体部外側、底部外側、ヨコナデ、体部内面、底部内面、ヨコナデ、指圧痕	焼成 良 胎土 良 色調 黑灰色	イコウ面
鉄製品	釘	281 ~ 283	太さ 0.5 ~0.6			一面削片 板目付着	SX1901 板面に使用
鍔製器	刀子	284	刃渡り 7.0 (残存部) 幅 2.0 厚み 0.4	直刀		全面 サビ付着	SE1904 第2層 図版十三-85
						ホルンフェルス? (安山岩系) 片面のみ磨毛 一面さっ痕あり	
石製品	ト 石	285	長さ 7.0 (残存部) 幅 6.5			砂岩 片面のみ磨毛	SE1905 横 pit 内
		286	長さ 12.5 (残存部) 幅 4.0 ~6.0				SE1906 上層
木製品	横円形曲物	287	長さ 57.0 幅 44.0 高さ 22.0 厚み 0.7	小判型 一枚板を縫立ててじ合せ 上下にタガをもつける 全体の上部はひくさく下の部分が大きい、断面が台形状を呈する 側板の下部はタガの上から小孔があなたれ竹筋によつて一枚板がめり込まっていたとみられる小孔は、曲面部に多くがたれている	側板の曲面部内面に幅0.5~0.8cm間かくで平行のケビキを施す、側板の腰に込みは、上段と下段の2ヶ所に分かれ上段が1列上外下内4段腰じ下段が1列上内下外3段腰じタガの部分は左方2ヶ所に施され左が2列上外下内3段腰じ、右が1列上内下外2段腰じ、側板は板目取り	ネズミ歯きりによる選 続文か御版に2ヶ所、 上面のタガに3ヶ所施 されている	SE1903 下層 図版十二-83
			長さ 22.4 幅 8.7 厚み 0.4 ~0.5	小判型 一枚板を中心で割り2分する 両端の中央よりやや下にコの字型の切込みを入れる。コの字型の切込みと合わせて、この部位に鼻緒がつく、頂部の寄れをはさんで小孔がうがたれており「2分した板をここの穴でもってお止めた」とみられる	全面ていねいな削り 板目取り	片面にい草の残片及び 虫糞が残る 裏面には、塵埃のみに い押圧痕があり、表面 のい草を折り込んだと思われる	SE1907 第2層 図版十三-86, 87
品	板草履	288					
品	横梅	290	長さ 11.0 幅の長さ 3 ~4.5 高さ 4.5 厚み 1.0	弧状に湾曲 歯はきわめて深い	板目取り 全面ていねいな削り	材質 つば	SE1904 第2層 図版十三-84
斗きよう	291		長さ 14.5 幅 11.5 厚さ 3.0	凹状を呈し、中央部の切れ込みは、のみにより荒く仕上げられている			SE1905
著	292 ~ 296		長さ 20.0 ~21.3 太さ 0.3 ~0.6	両端が細る 矢矧と同様の 形態 全面刀子で削り、面をとり断 面は5角形ないし8角形を呈 する	面とりはきわめてていねいに 施してある	材質 ひのき、もしく は杉	SE1904 SE1905 図版十四 SE1908 図版十四 SE1911 図版十四

6. まとめ

今回の調査では、調査地の西側に位置する17トレンチで白鳳時代から奈良時代中期にかけての遺構が、東側に位置する19トレンチで鎌倉時代初めから室町時代にかけての遺構が検出された。

遺構が検出された箇所は、いずれも畠地で、標高96.7m前後を測る。その他の水田施設は、いずれも後世の削平を受けており、特に国道8号線寄りは、ほとんど攪乱されており消滅している。

17トレンチは、県の遺跡分布図に記されている上田庵寺（信城寺）の南限にあたる。上田庵寺は、現在、その伽藍配置、規模等は不明で、若干、東海道新幹線の際に瓦の出土をみるのみである。しかしに、上田町内に所在する淨土真宗興正寺派正円寺に伝わる江戸時代後期の寺院縁起によると、

「文正元年二月拾三日創立、住吉大字上田ニ信城寺（真乘寺トモ云ウ）七堂伽藍ノ寺院アリ、天台宗ナリシカ兵災に罹り焼失セリシヲ、現今 新藏寺ト云ウ畠地アリヲ面積凡四町歩位アリテ同寺ノ跡ナリト云ウ 其頃、塚根源左衛門正利ナルモノアリ 當ニ佛教ヲ信シ燈籠シテ教心ト称シ 自ラ庵ヲ建テ竹戸庵ト称シ 日夜崇敬シ意ヲナリシカ 信城寺ノ荒廃シヲ住僧ナキヲ見テ名刈ノ庵口ヲ悲ミ 燃残リノ佛像ヲ遷シ残存ノ経巻ヲ収集シテ庵ヲ改メテ正円寺ト称ス 時ニ文正元年貳月拾參ノ日ナリ 是レヲ當時ノ始祖トス（後略）」

とあり、聖徳太子作といわれる薬師如来立像の焼仏が一体安置されており、上田庵寺にまつられていたものとされている。

検出した遺構で、上田庵寺の時期に概当する白鳳時代から奈良時代にかけてのものとしては、SB1701、SH1701、SD1703があり、中でもSB1701の掘立柱建物跡は、ほぼ北に棟方向をとる建物で、柱穴も大きなものである。しかし、寺院内に位置する構造物とするには、周辺に関連する遺構がないことより寺域外の寺院に関連する集落の施設とみられる。

19トレンチは、当初予想されなかった鎌倉時代から室町時代にかけての遺物、遺構が密集しており、特に遺物の量は、今回の調査で出土した内の9割が19トレンチのものである。

鎌倉期における近江の遺跡の特徴は、第一に近江型黒色土器の出土があげられる。これは、すでに、久野部七ノ坪遺跡、手原遺跡の報告書で、その出現経緯について詳細に記されているので本稿では省略するが、いわゆる畿内の黒色土器から瓦器に移行する時期において、近江では、依然、黒色土器の生産が根強く残り、黒色土器の製作手法（ヘラ磨き、暗文）を取り入れ、瓦器と黒色土器の共存期間が畿内心中心部に比較して長かったという点である。又、決まって各遺跡では、黒色土器の出土量に比較して瓦器の出土量が極めて少ないという点も共通することである。即ち当時の日常雑器の約8割を黒色土器と上師器が占めていたと言ってもよい。

19トレンチ出土の黒色土器は、大橋信弥の編年によると、高波遺跡出土例のタイプと手原SD01出土例のタイプに大別される。前者は12世紀後半、後者は13世紀前半に位置づけられている。

瓦器の出土量は極めて少ないが、白石編年的II-2型式とII-3型式に大別され、前者が12世紀中葉、後者が13世紀初頭に位置づけられ、黒色土器の年代とはほぼ併行する。

土師皿については、「平安京在京四条三坊十三町、長刀鉢町遺跡」の報告にある横田洋三の編年によるとA₂タイプの4・5、A₃タイプの4・5・6・8・9、B₁タイプの3、B₂タイプの1・2、B₃タイプの1に概当するタイプが出土している。A₃タイプの4が12世紀後半、B₃タイプの1が14世紀後半から15世紀初頭になり、この間の土師皿が概ね出土している。

次に常滑焼の壺、山茶碗、水瓶、片口鉢が出土しており、赤羽一郎の編年によると、Ⅰ-前半による壺、片口鉢、Ⅱ-後半による小皿、片口鉢、壺、Ⅲ-前半とみられる水瓶、壺、Ⅳ-後半とみられる片口鉢、壺が出土している。Ⅱ型式のものは1150年代から1250年代（12世紀後半から13世紀中葉）Ⅲ-前半は1250年代から1300年代、Ⅳ-後半は1400年代から1450年代（15世紀初頭から中葉）にかけて位置づけられている。

これらを総合すると概ね12世紀後半から15世紀初頭にかけての遺物が出土している。

出土遺物と遺構における年代決定は今回の調査では不充分であったが、遺構の切合関係から察すると概ね3-4期に分かれるものと思われ、終末期の遺構としては、SK1904、SB1910、SX1901、SX1902がある。

次に歴史的な流れから19トレンチの遺構を考察すると、19トレンチの畠地は、小字「垢離場」と称し、現在上田町内にある浄土真宗本願寺派明光寺の故地とされている。明光寺の山号「垢離山」も彼の地の地名をとて称したとされる。明光寺の縁覚は、寺伝によると、

「天文元年三月、聞基ハ往昔、村ノ某ノ一子、道心深クシテ真言宗ノ門ニ付、出、得道シテ积ノ立言ト名ク、里ノ表ニ草創シテ垢離庵ト名ク（後略）」

とあり、天文元年（1532年）に寺を開いたとわかる。これに概当する時期の遺物、遺構はともに検出されておらず、火葬墓SX1901ですら天文年間までは下らないとみられる。

又、上田の地は、正円寺の縁覚によると、「上田氏系図之覚」に

「当国上田邑者、往古建暦年中之頃、佐々木四郎舎弟 佐々木右衛五郎ト云シ者アリ、諦音寺山乃城門ヲ退起シ（後略）」

とあり、建暦年間（1211-1212）に佐々木氏の流れをくむ者が聞いたとされている。さらに、篠田神社の由来によると上田町は、承平二年（932年）の田券（東寺文書）に安吉郷上田庄と記され、沙々貴一族が庄内の水田を所有していたこと、又、神社の西に「正安二年庚子 賑主□□氏」と刻す1300年建立の宝鏡印塔が一基あり、篠田神社創建者の供養塔と推定される市の史跡指定になっている。そして、正長元年（1428年）九月、足利義教が上田の地を京極持清に与え、その後京極氏の所領となり、永享八年（1436年）京極持清が賑主となり、当神社の拝殿の上葺を成したとある様札がある。それによると、

「永享八丙辰八月二十一日始之十月二日造畢、奉造營上田社拝殿上葺之事

當造村人數八十七人 社僧沙弥久郷殿、賑主京極中務少輔 神主右近三郎左衛門允、同右馬四郎右衛門允、大工島之郷左近允、助士同郷新左衛門允 同不祥」

とある。ここにある「久郷殿」は、上田の有力豪族で、開創者とも言われ、現在でも小字名に「久郷」「久郷前」「久郷出」の地名が残る。なお、久郷氏の居館跡は、上田氏館遺跡として遺跡分布図に記載されているが、その所在地は、まだ確認されていない。

19トレンチにおける、これらの記事と関連するものとしては、SB1910の他、13基出土検出された井戸と、それに付随する土壤状遺構の洗場と排水施設である。又、建物群を大きく区画したSD1907の溝も注意する必要がある。^{注15}特に、SB1910は、東西5間×南北1間以上の主屋に、東西2間×南北3間の従者が宿直する待がとりつき、主屋の東側1間分は廊下になると思われる構造で、知恩院蔵の『法然上人絵詞伝』にある美作国久米郷押領使添間時国^{注16}の館によく似た構造の建物である。さらに、19トレンチの東端を南北に伸びる農道は、旧の長光寺道とされており、当遺跡が集落の西南限にあたるものとみられる。

今回の調査では、中世の篠田郷の一端を解明するにとどまったが、これを機に、市内、及び周辺諸地域に点在する中世集落の解明、さらに、当時の庄園の様相を解明していく手がかりとなれば幸いかと思う。（仲川 緒）

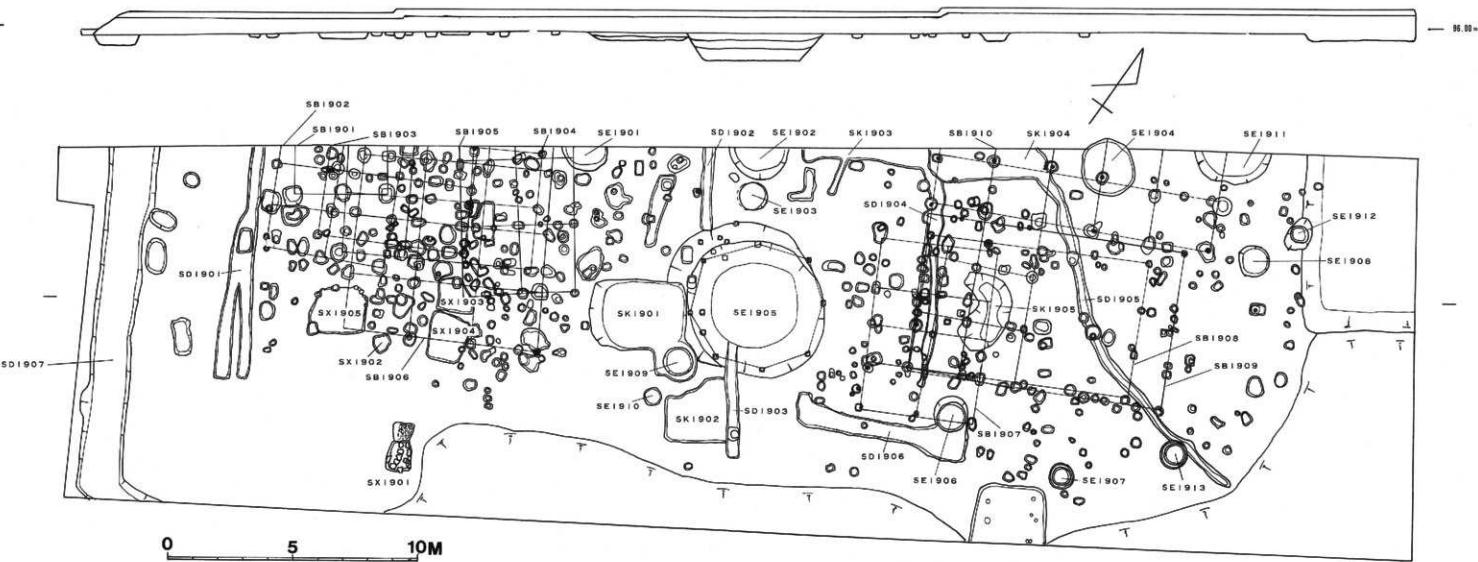
- 注1 横田洋三「出土土師皿編年試案」(『平安京跡調査報告』第5輯、古代学協会 1981)
- 横田洋三「土師皿の分類と編年観」(『平安京跡研究調査報告』第11輯、古代学協会 1984)
- 注2 大橋信弥「近江型黒色土器再考」(『手原遺跡発掘調査報告書』 東京教育委員会他 1981) 以下手原遺跡報告と略す。
- 注3 丸山竜平・山口辰一「富波遺跡調査報告」(『滋賀県文化財調査年報』 1975)
- 注4 手原遺跡報告
- 注5 稲垣省也「法隆寺出土の瓦器焼—瓦器編年試論—」『大和文化研究』 6-4
白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二、三の問題」『古代学研究』 54
- 別所健二「野路岡田遺跡発掘調査報告」(『草津市文化財調査報告書』 6 草津市教育委員会 1982)
- 注6 赤羽一郎「常滑窯の段階区分と各段階の様相」(常滑焼 考古学ライブラリー 23 ニューサイエンス社 1984)
- 注7 兼藤保明「近江の東播系中世須恵器」(『近江地方史研究』 11)
- 注8 「滋賀県遺跡目録—昭和55年度—」
- 注9 大橋信弥他「久野部遺跡発掘調査報告書、一七ノ坪地区」(滋賀県教育委員会 1977)
- 注10 手原遺跡報告
- 注11 同上
- 注12 注5と同じ
- 注13 注1と同じ
- 注14 注6と同じ
- 注15 「週刊朝日百科 日本の歴史1」「東国武士の館 上浜田遺跡による復元」朝日新聞社 1986
- 注16 「週刊朝日百科 日本の歴史2」「地方豪族の館、法然上人繪詞伝より」 朝日新聞社 1986

参考文献

- 「内側遺跡、後藤館遺跡発掘調査報告書」八日市市教育委員会 1983
- 「長塚遺跡発掘調査報告書」守山市教育委員会他 1985
- 「吉地大寺遺跡発掘調査報告書」中主町教育委員会 1985
- 「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 XII-3」滋賀県教育委員会他 1985
- 「近江出土の中世陶磁、常滑と輸入陶磁を中心として」滋賀県立近江風土記の丘資料館 1985
- 「世界陶磁全集 3 常滑、信楽、備前、越前、丹波」小学校
- 「図説 発掘が語る日本史」2、関東、甲信越編 新人物往来社 1985
- 「木器集成」古代編 奈良国立文化財研究所 1985



第8図 17トレンチ遺構図



第9図 19トレンチ遺構図



1. 17トレンチ全景（南から）



2. 8トレンチSX0801検出状況



3. 19トレンチ全景（東から）



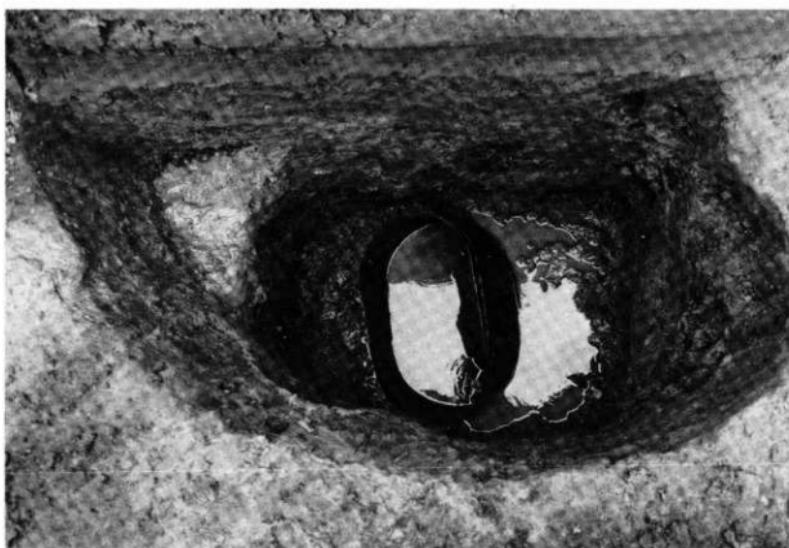
4. 19トレンチSE1905より西側



5. 19トレンチSB1910周辺



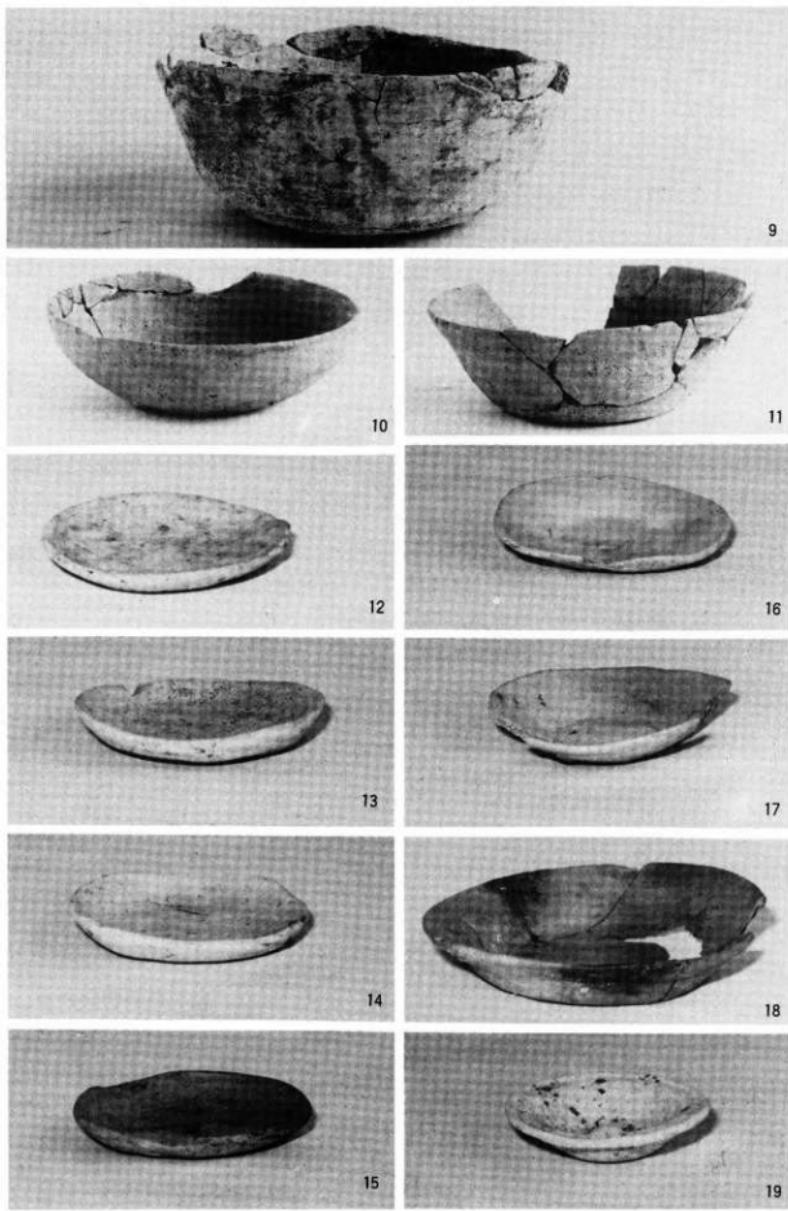
6. 19トレンチSX1901検出状況



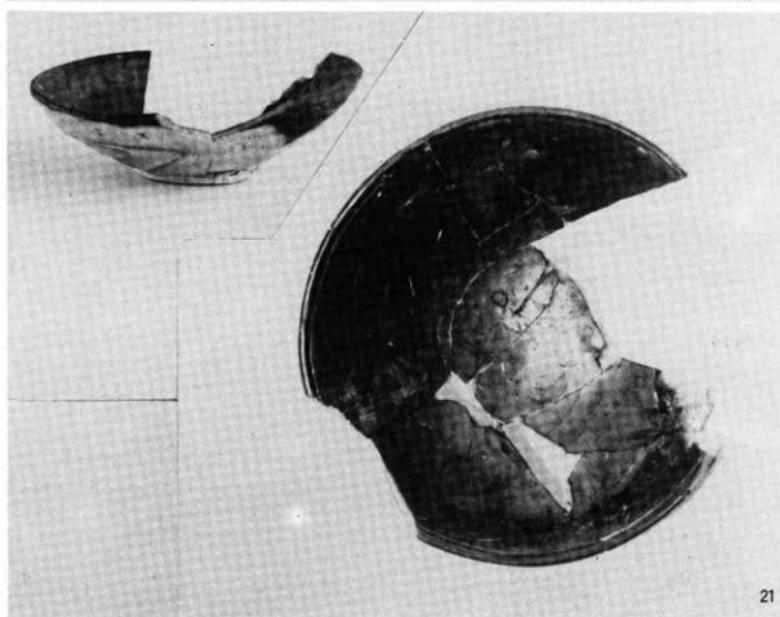
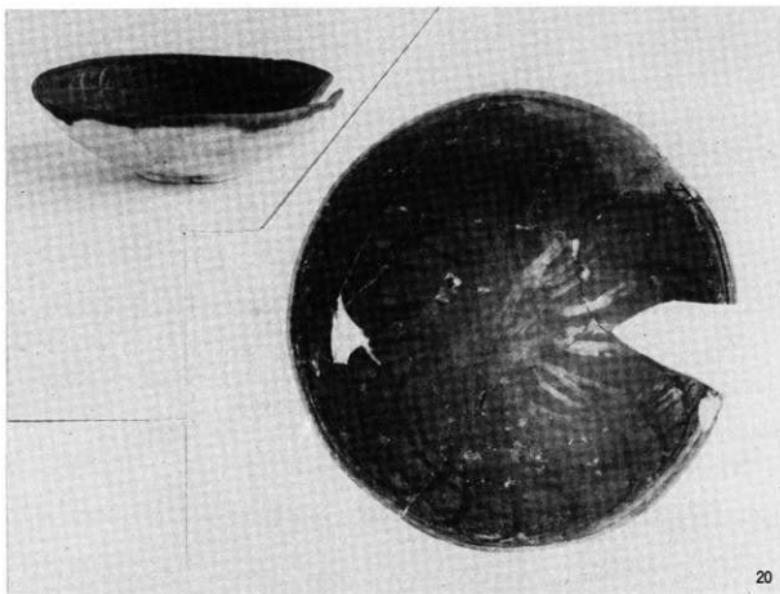
7. 19トレンチSE1903曲物出土状況



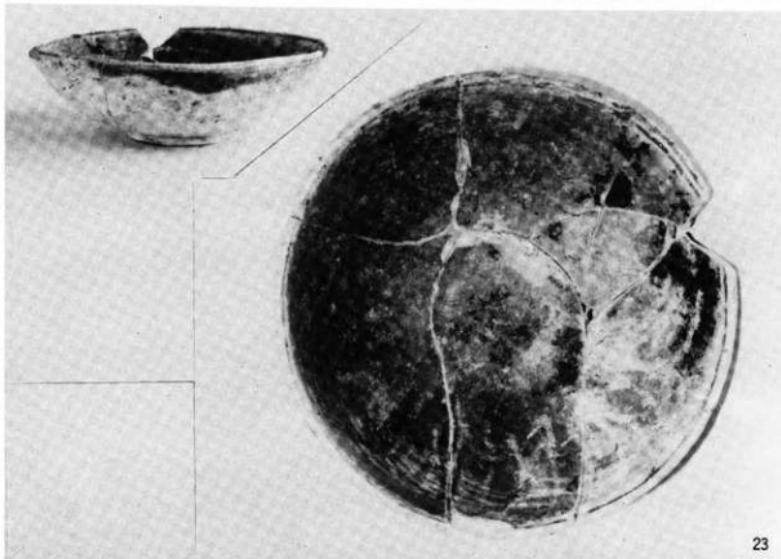
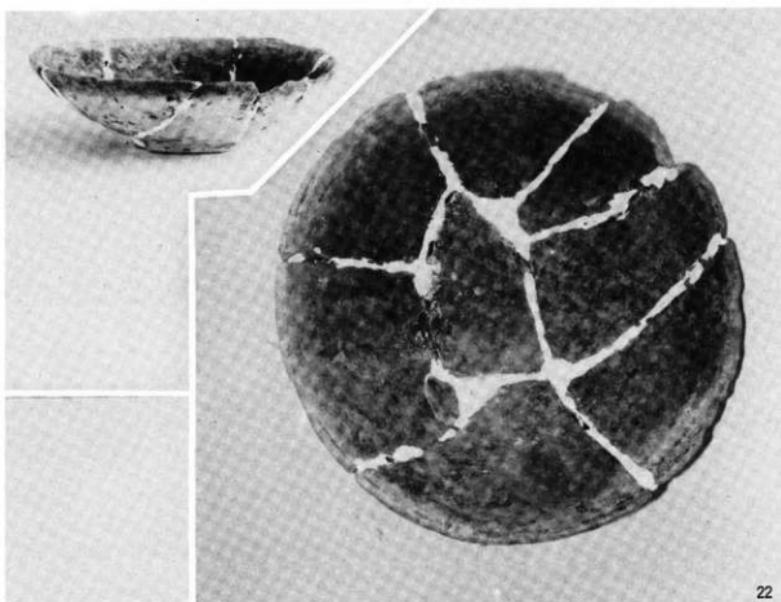
8. 19トレンチSE1904虫つぎ竹検出状況



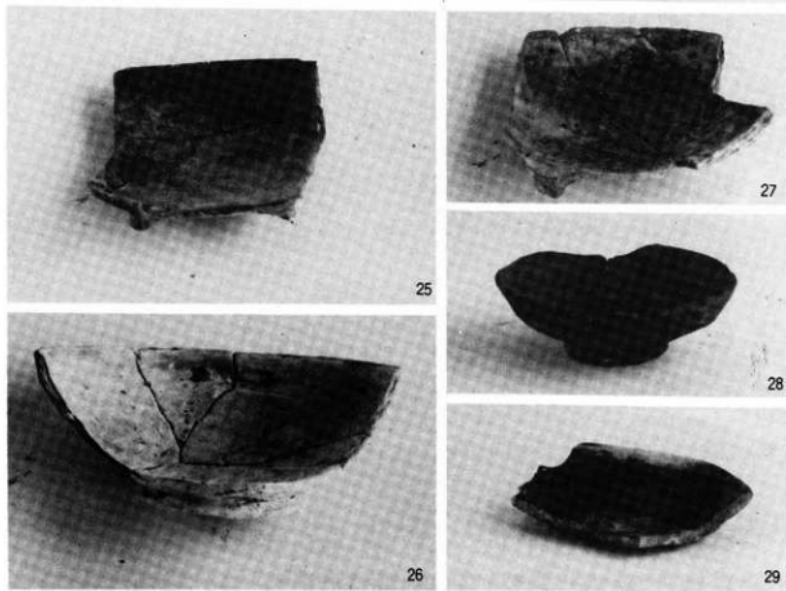
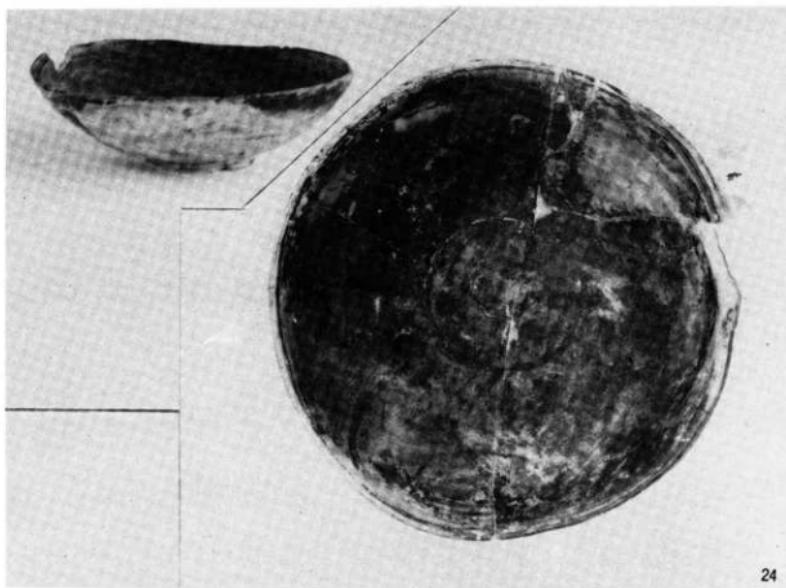
9～11(17トレンチ出土) 12～19(19トレンチ出土)



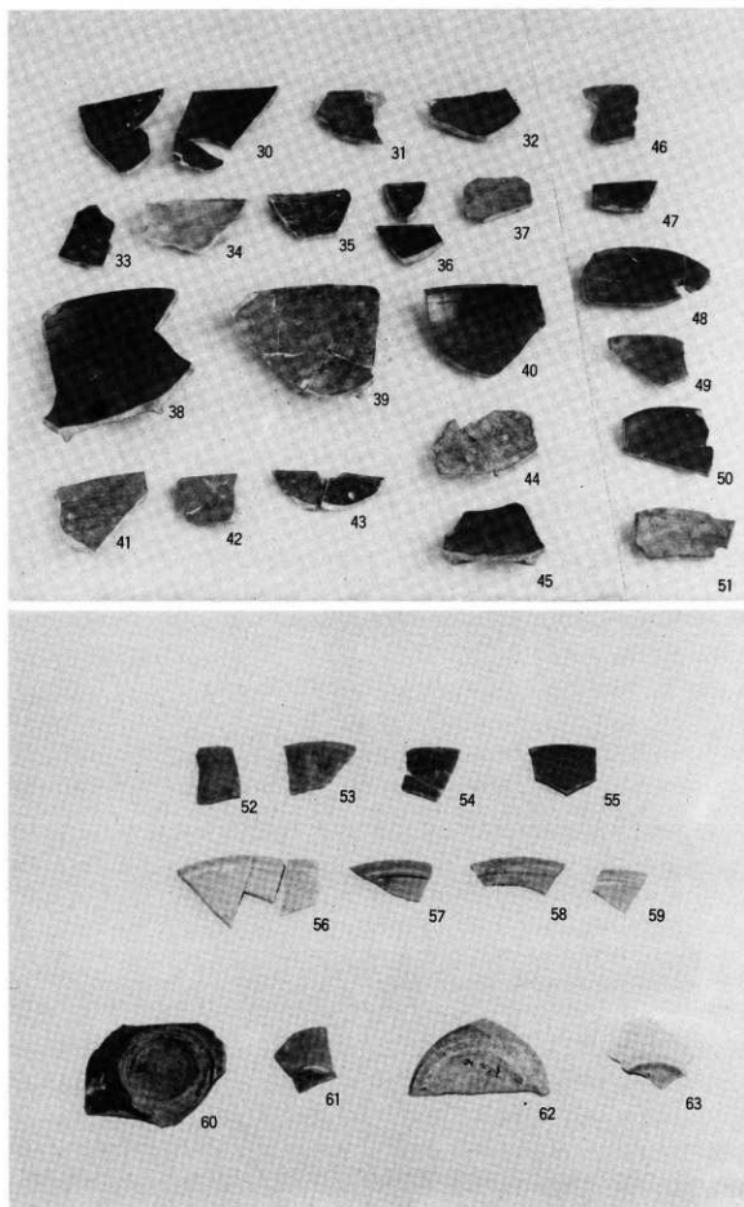
黑色土器 20・21 (SE1905出土)



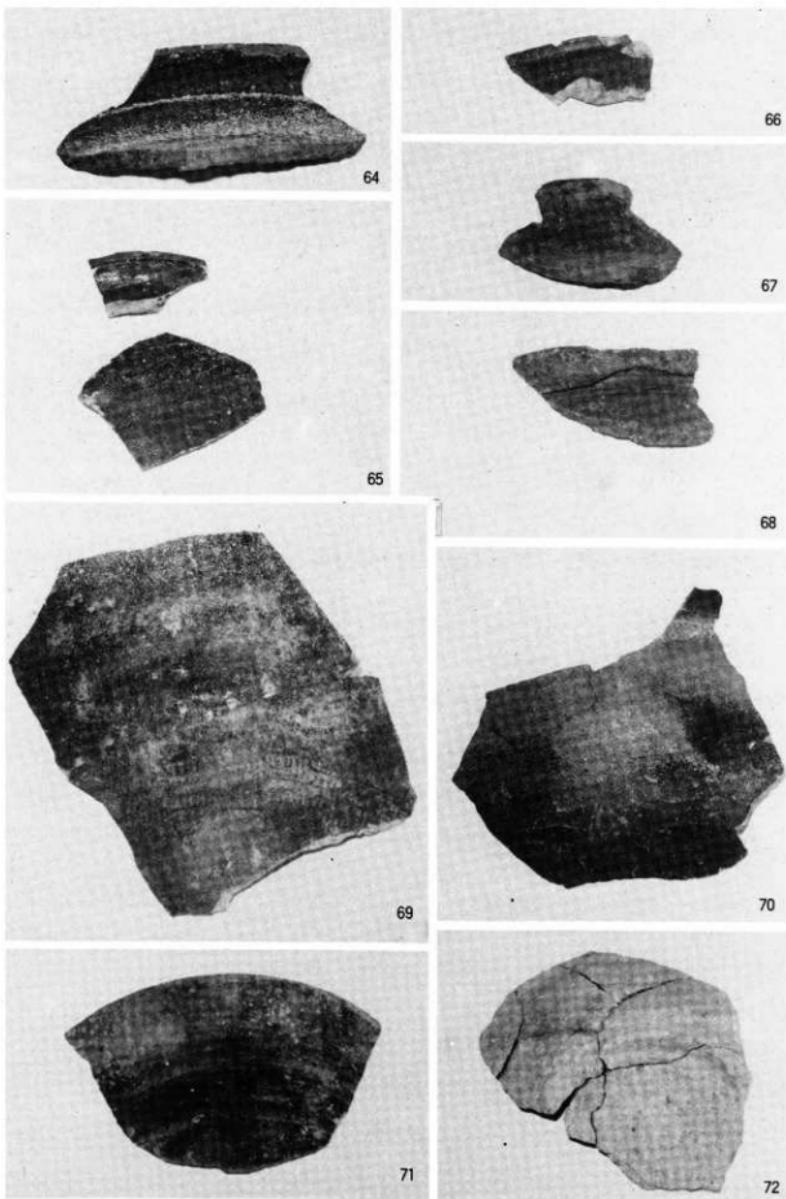
黑色土器 22 (SD1902出土) 23 (SE1911出土)



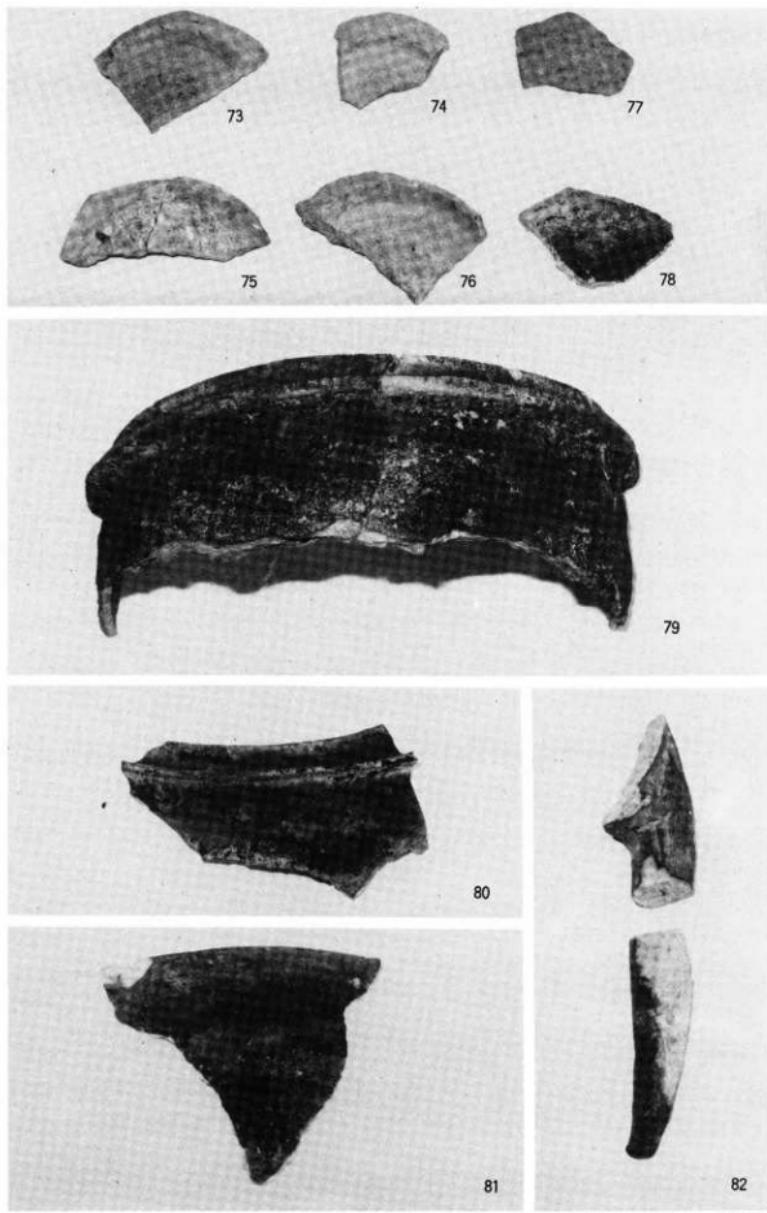
黒色土器24 (SE1908) 25. 26. 27 (遺構面) 28 (SK1901) 29 (SE1905)



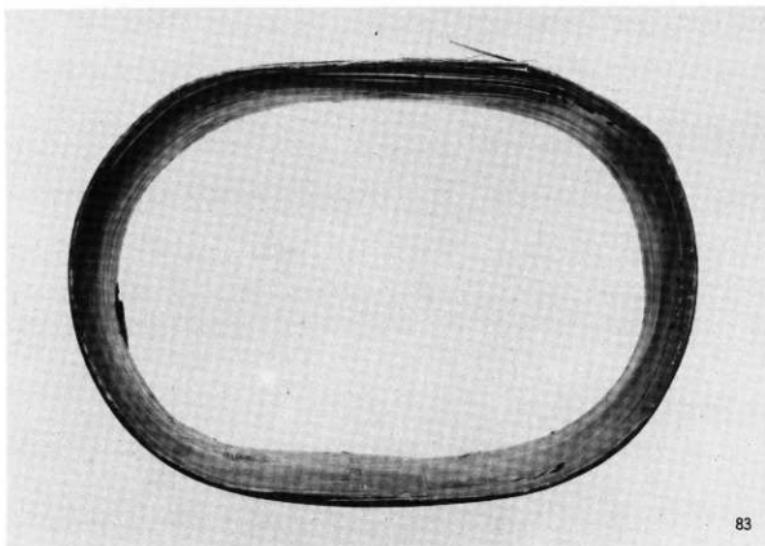
30~45 (瓦器碗) 46~51 (瓦器小皿) 52~55. 60, 61 (青磁) 56~59. 62, 63 (白磁)



64~70 (常滑焼甕) 71~72 (常滑焼鉢)

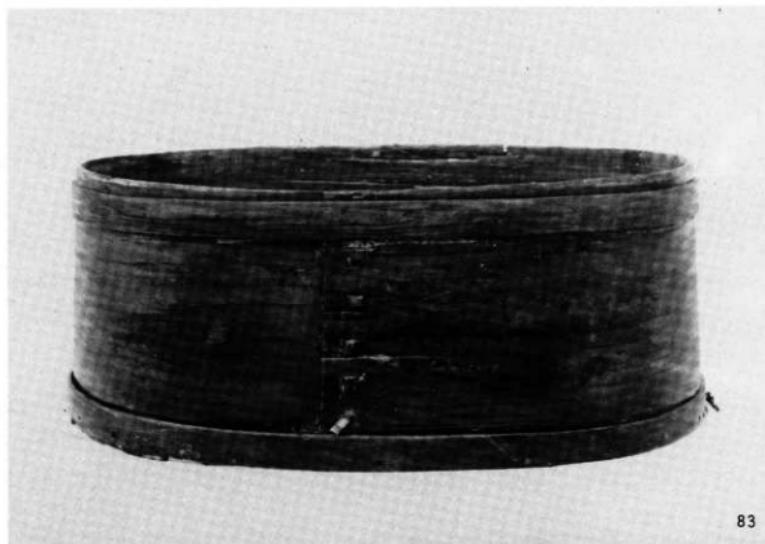


73～78（常滑焼鉢） 79（瓦質羽釜） 80（羽釜） 81（端） 82（羽釜脚）



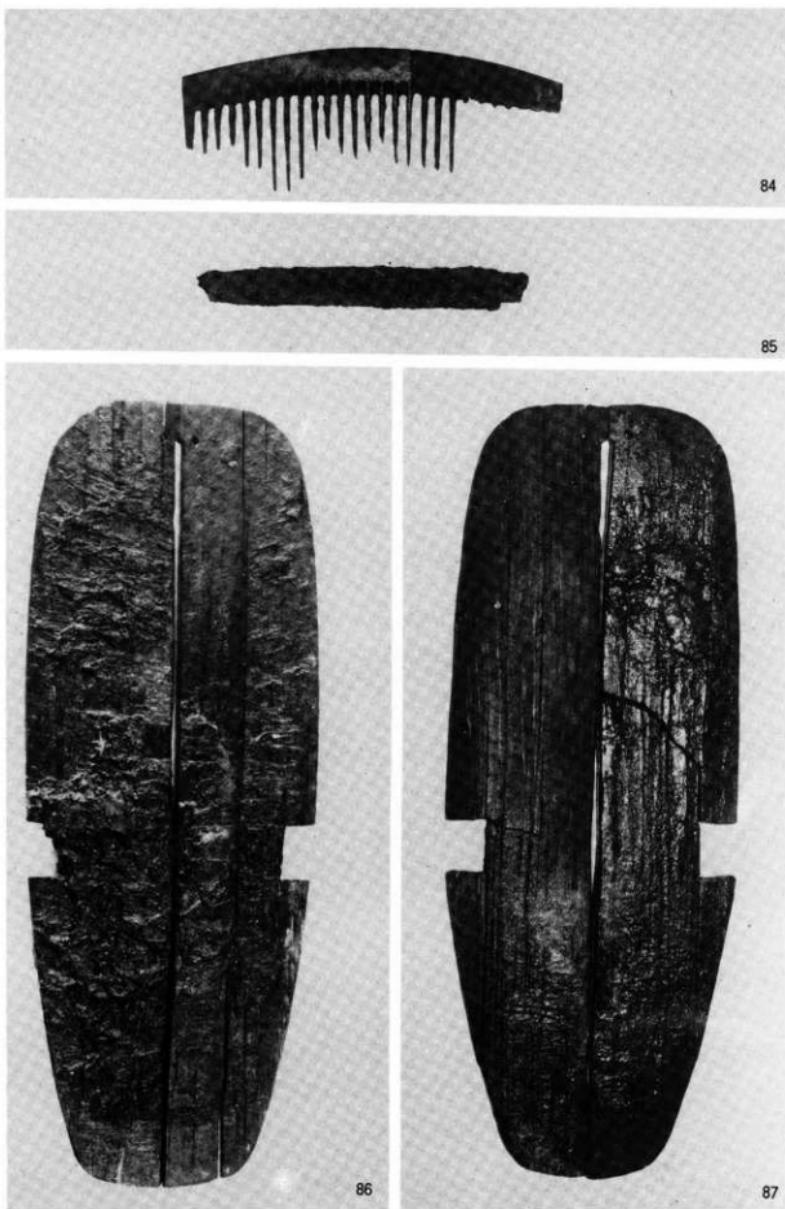
83

19トレンチS E 1903出土曲物（上から）

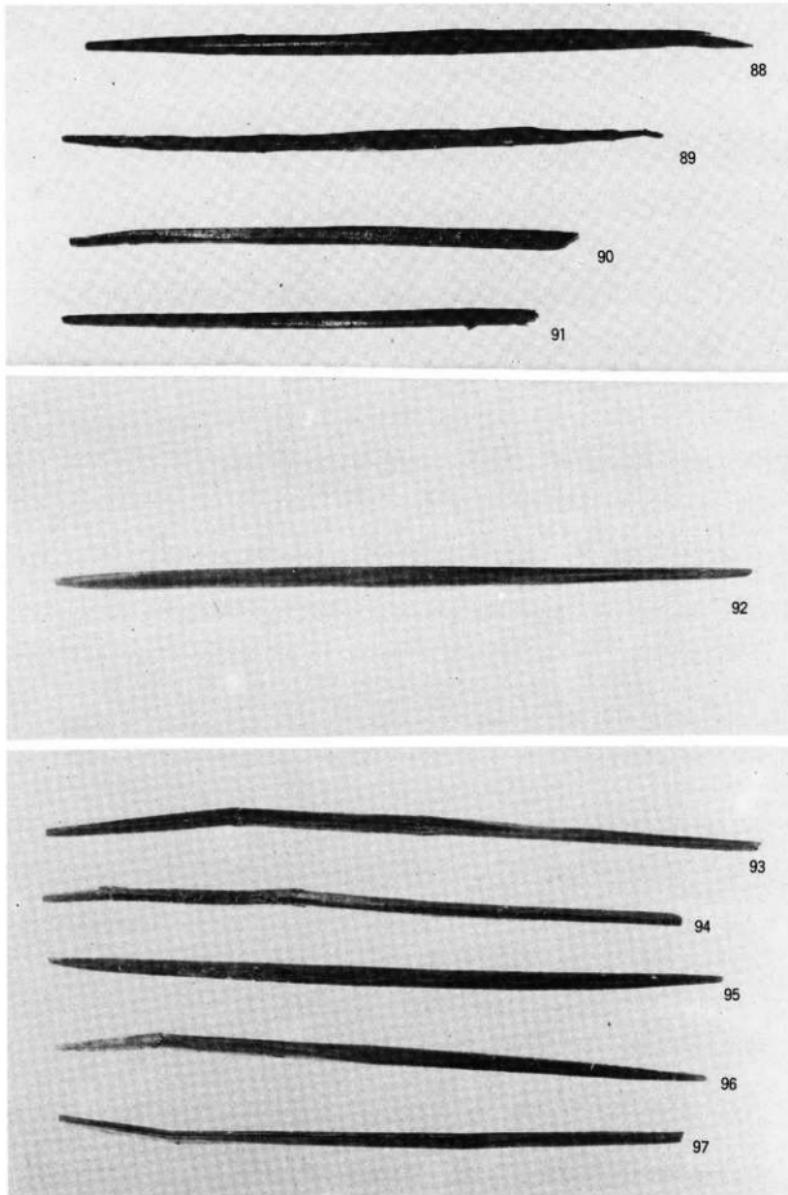


83

19トレンチS E 1903出土曲物（横から）

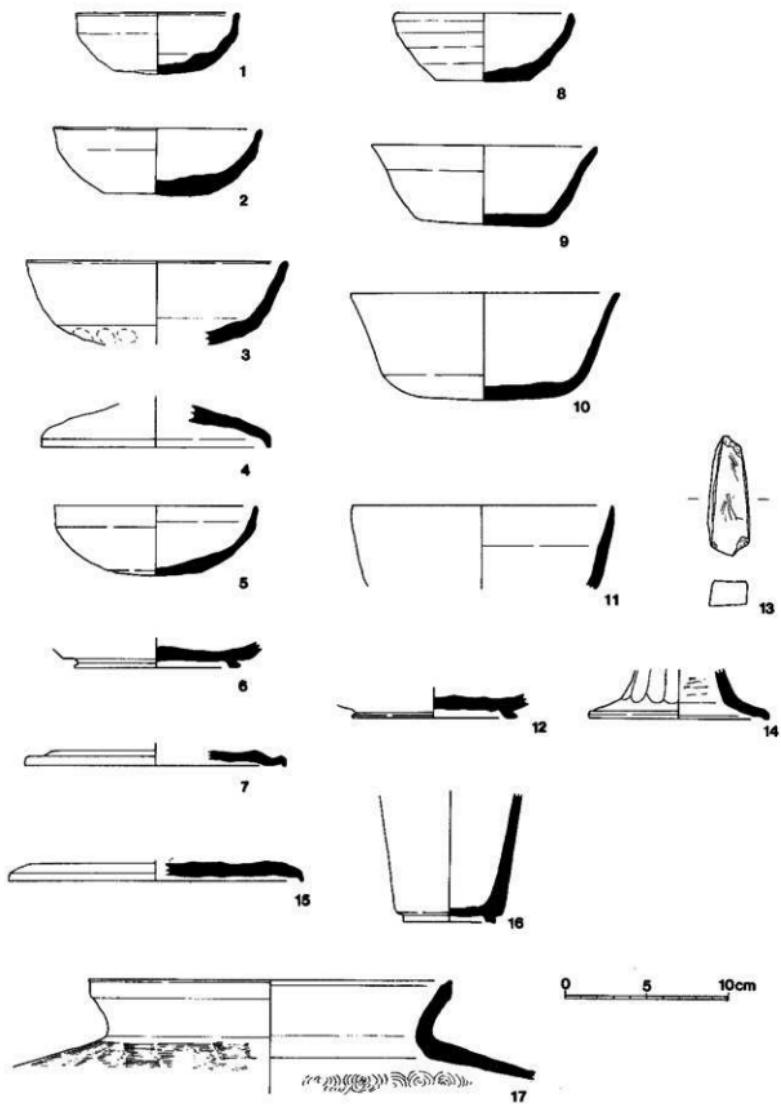


84. 85 (SE 1904 出土櫛と刀子) 86. 87 (SE 1907 出土板草履)

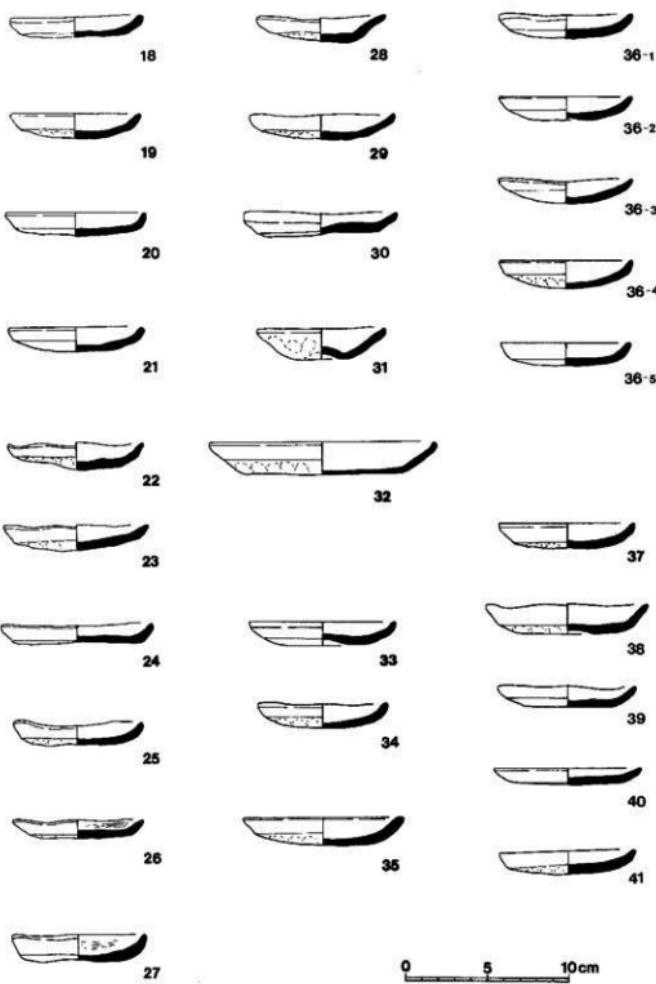


答：88～91（SE1905） 92（SE1908） 93～97（SE1911）

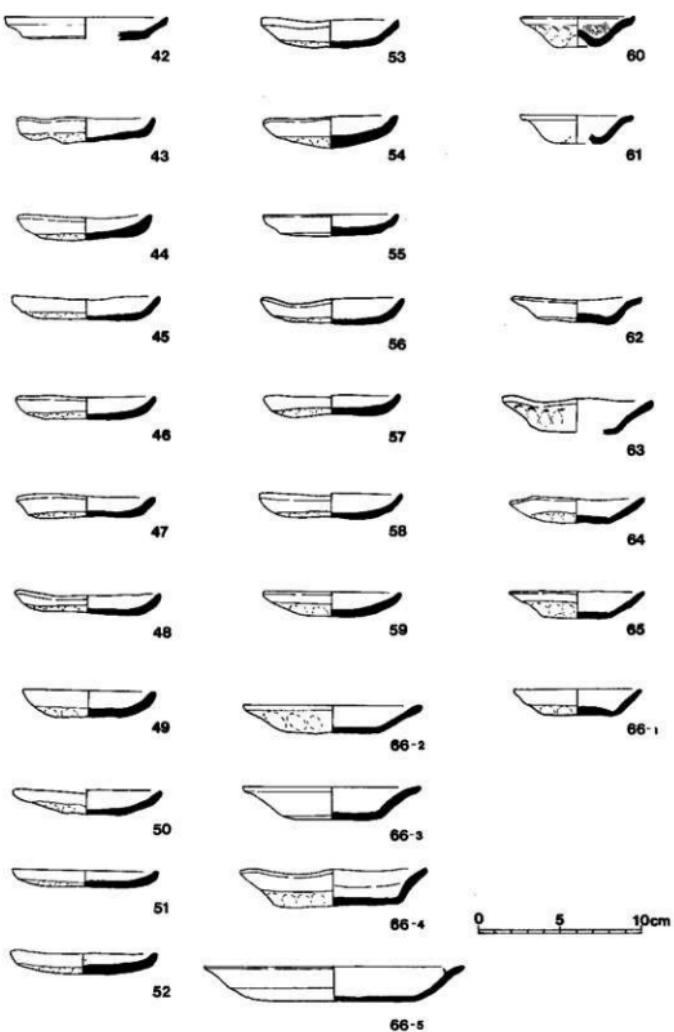
図版一五 柿木原遺跡



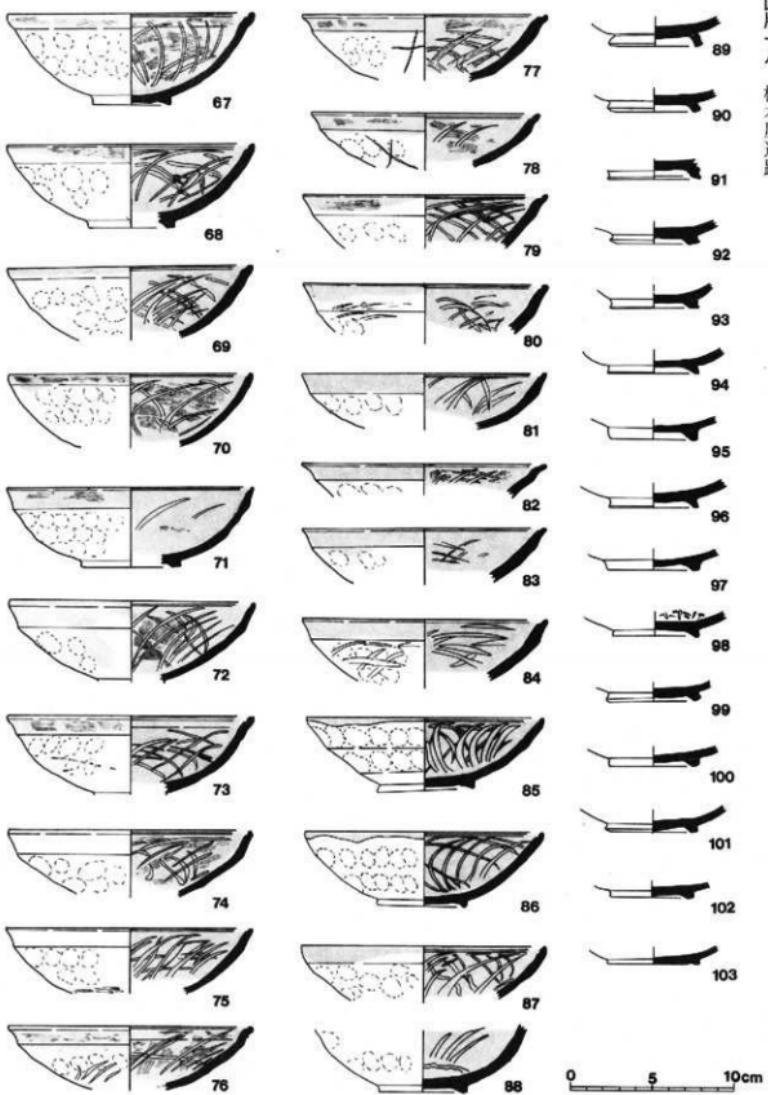
17 レンチ出土遺物



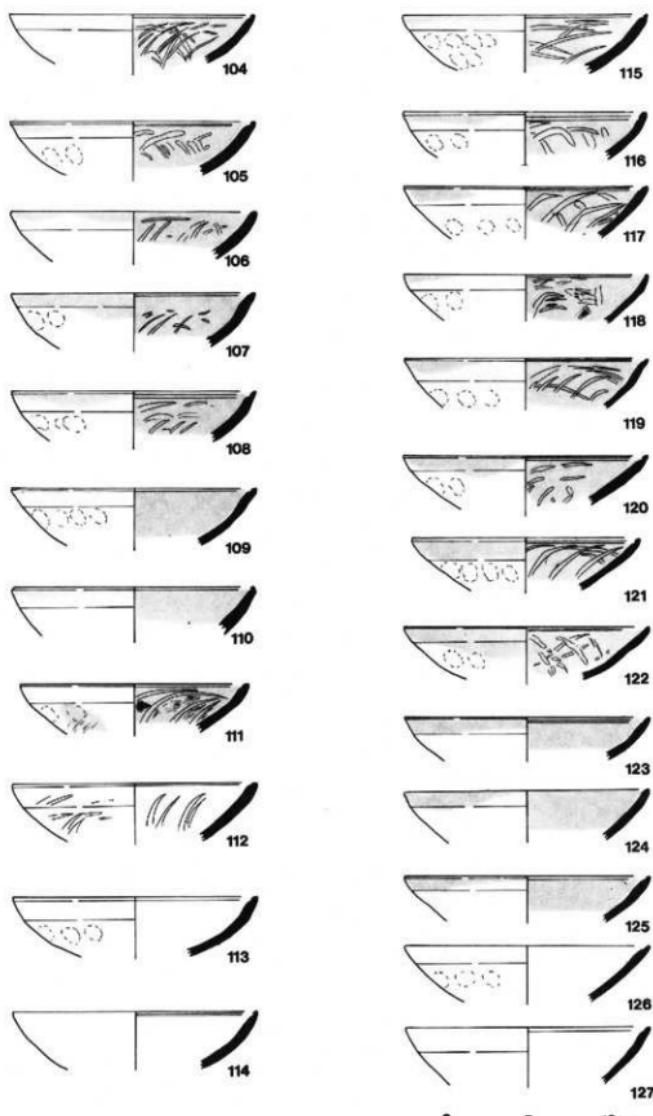
18~21 (S E 1904) 22~32 (S E 1905) 33~34 (S E 1909) 35~36~5 (S E 1911)
37~41 (S E 1912)



42 (S X 1901) 43~59 (p i t 内) 60~61 (S K 1904) 62~66 (イコウ面)

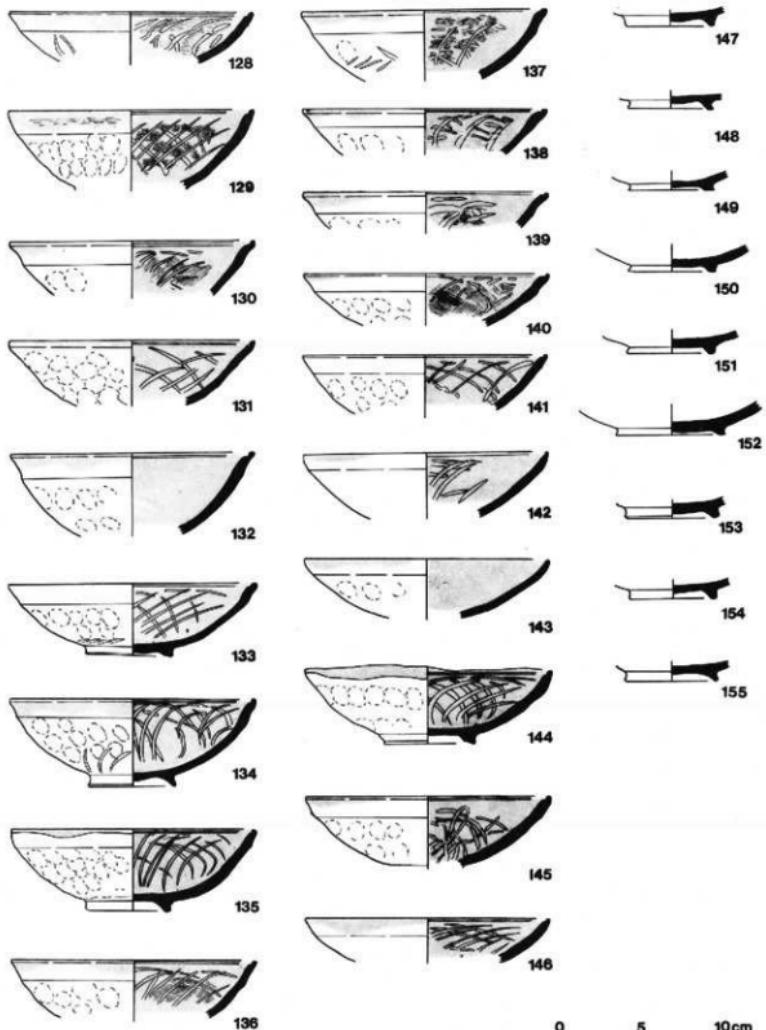


67~103 (S E 1905)

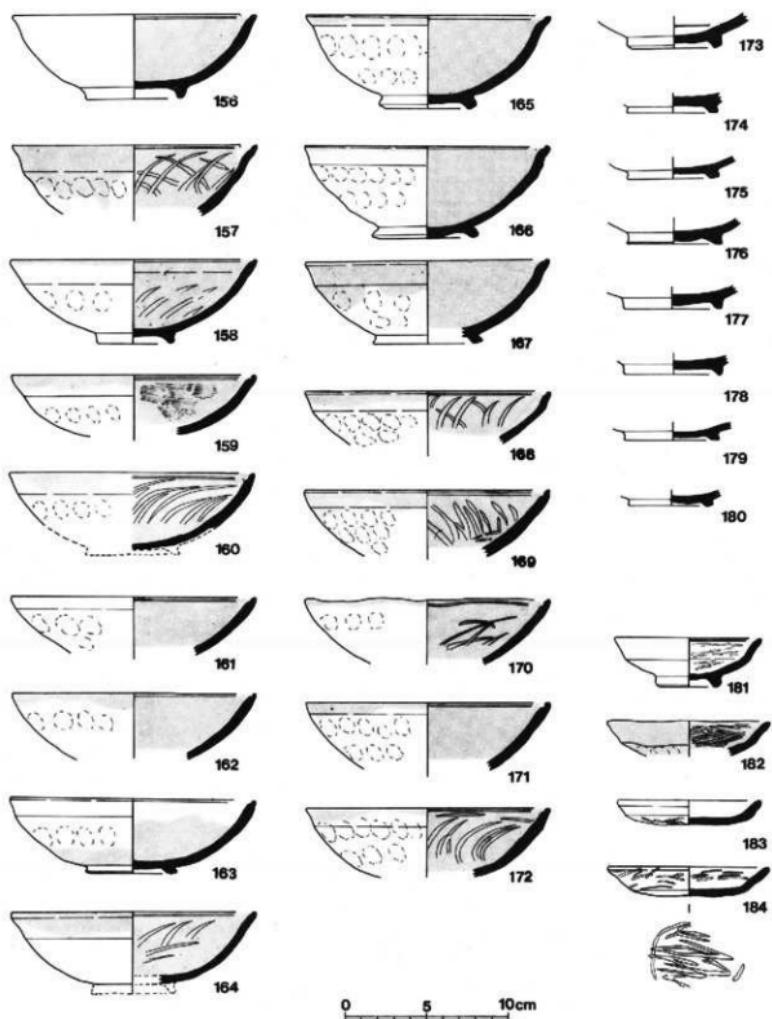


0 5 10cm

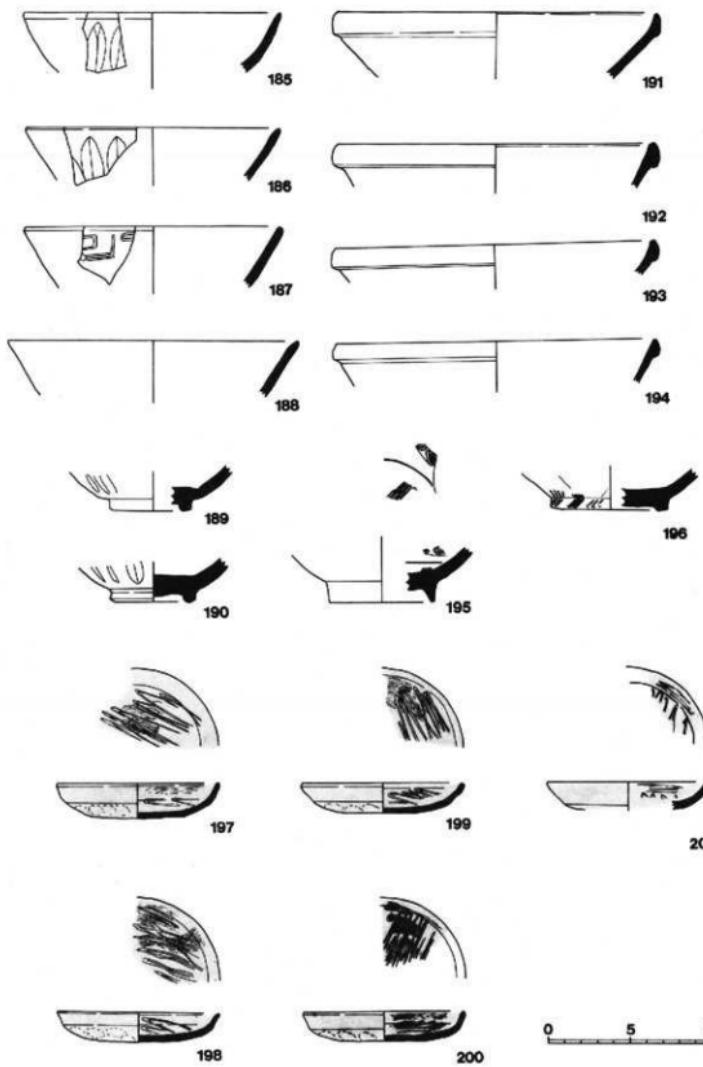
104~127 (S E 1905)



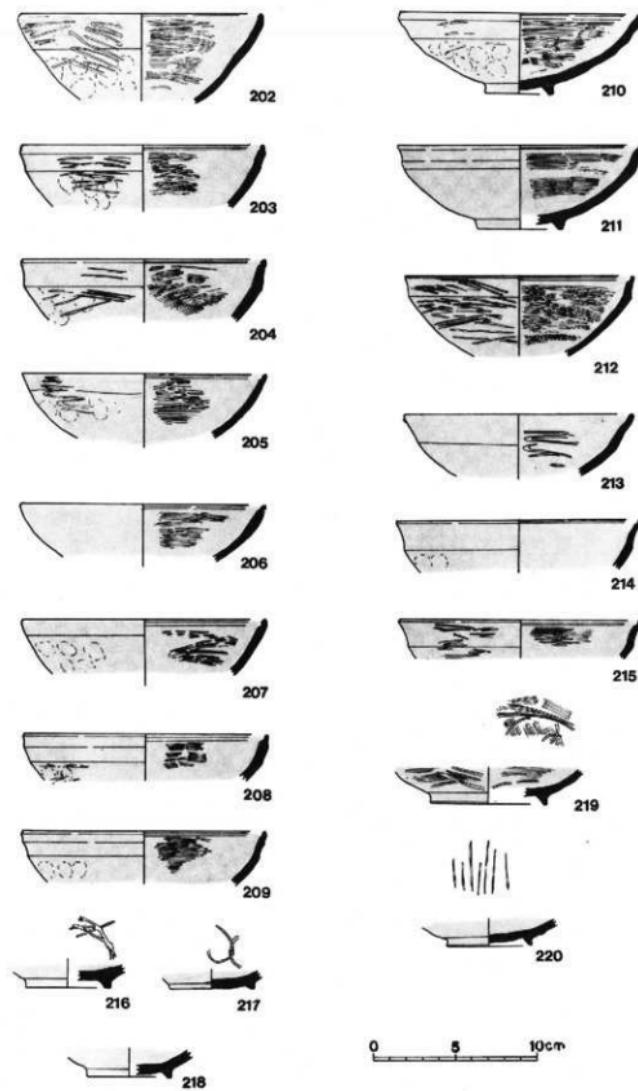
128 (S E 1901) 129-131 (S E 1909) 132-133 (S E 1910) 134-143 (S E 1911) 144-146 (S E 1912)
147 (S E 1906) 148 (S E 1907) 149 (S K 1912) 151 (S K 1904) 152 (S K 1903) 153-155 (p i t 内)



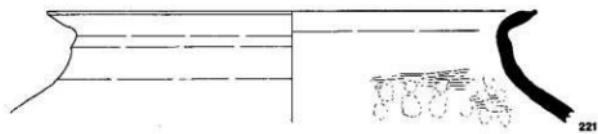
156 (pit内) 157・158 (S E 1911) 159・160 (S D 1902) 161～164 (pit内) 165～180 (イコウ面)
181・182 (S K 1903) 183 (S E 1905) 184 (S E 1901)



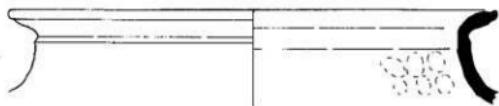
185~201 (19トレンチ出土)



202~220 (19トレンチ出土)



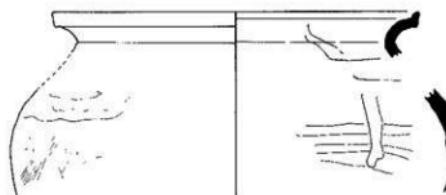
221



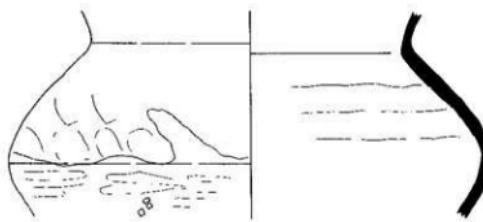
222



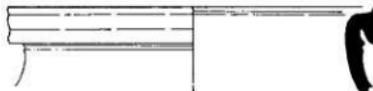
223



224



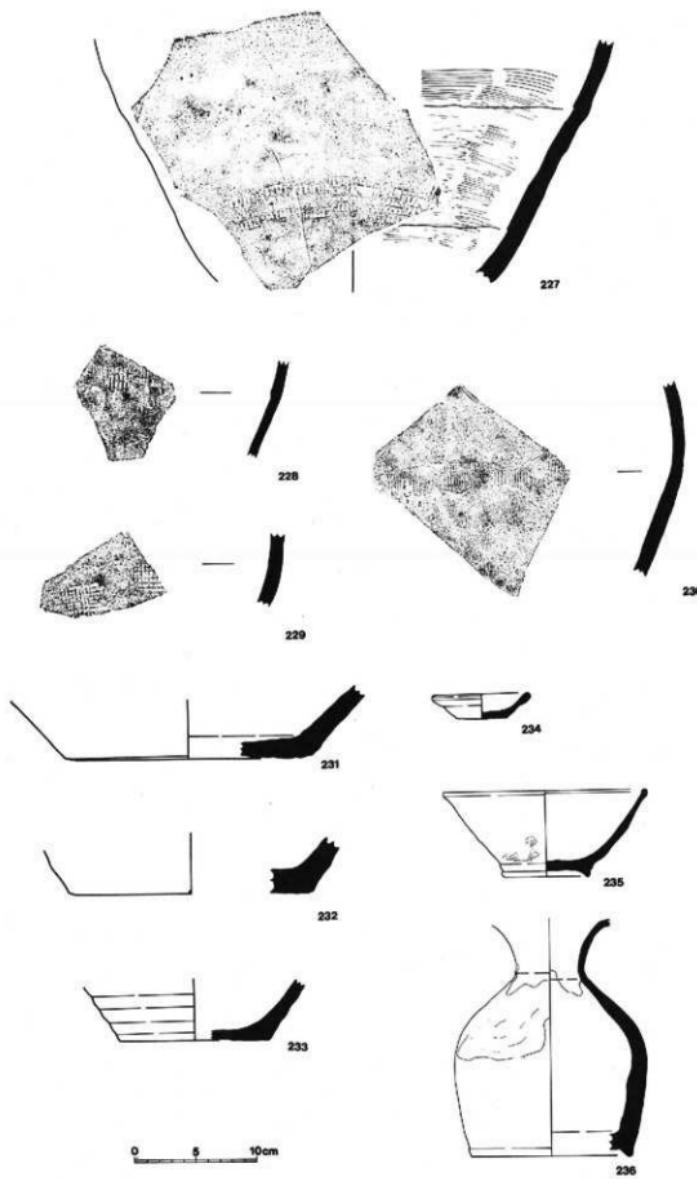
225



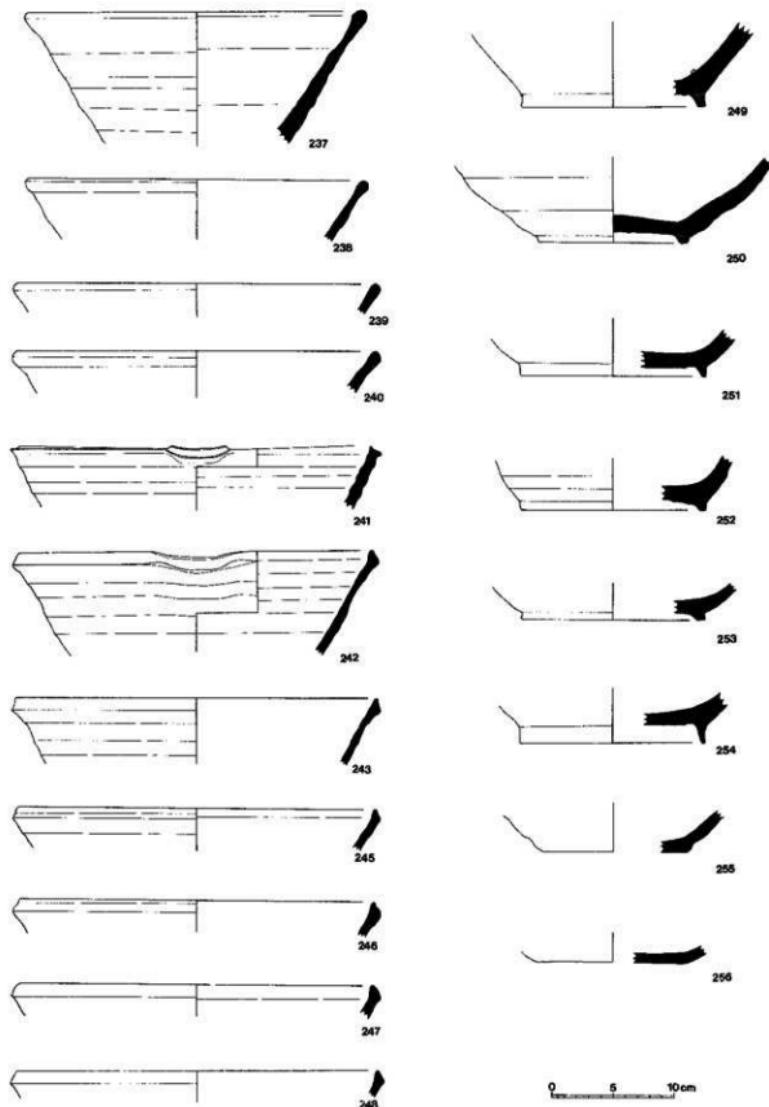
226

0 5 10cm

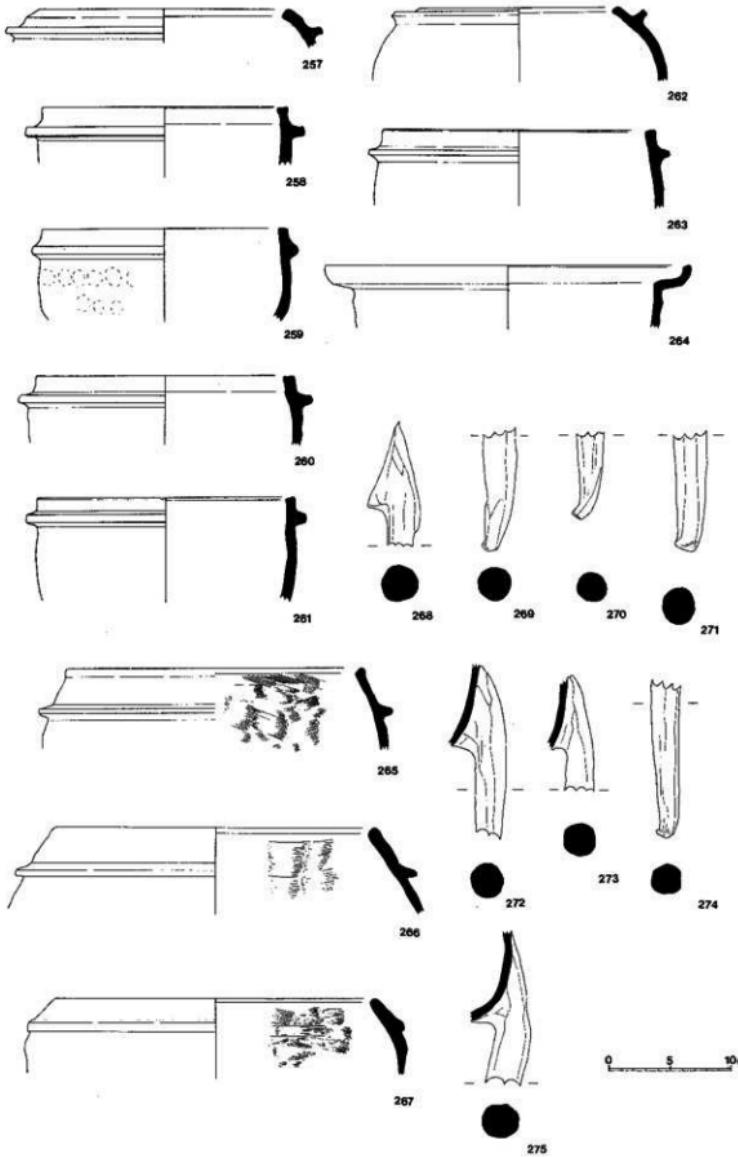
221 (S E 1905) 225・226 (S K 1904) 222 (pit内) 223・224 (造構面)



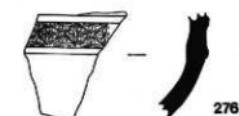
227(ピット内) 228・231・232(S E 1905) 230(S E 1905) 234・235・236(ピット内)



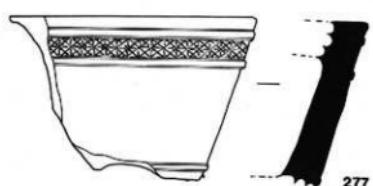
237 (S E 1907) 238~240・242~247・251~255 (造構面) 256 (S E 1905) 248 (S E 1908)
241・249 (ピット内) 250 (S K 1905)



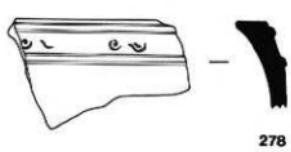
257・258・268・269 (S E 1904) 259・264～267・270～274 (S E 1905) 260・261 (S E 1907)
275 (S E 1913) 262・263 (ピット内)



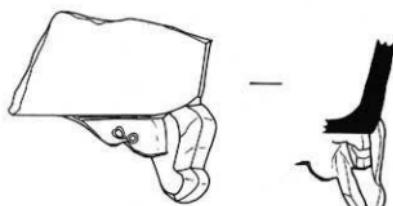
276



277



278



279



280



281



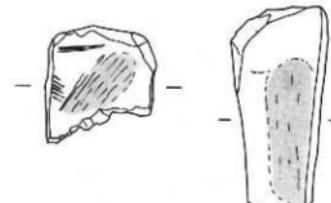
284



282



283



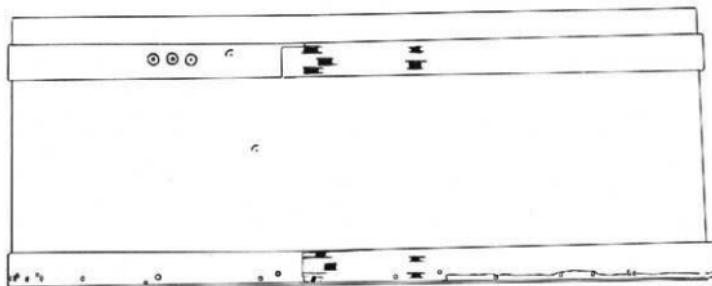
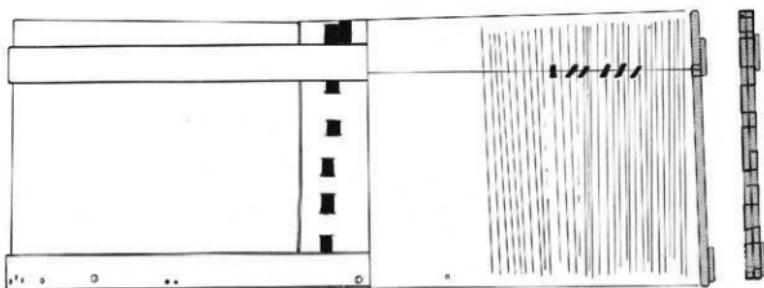
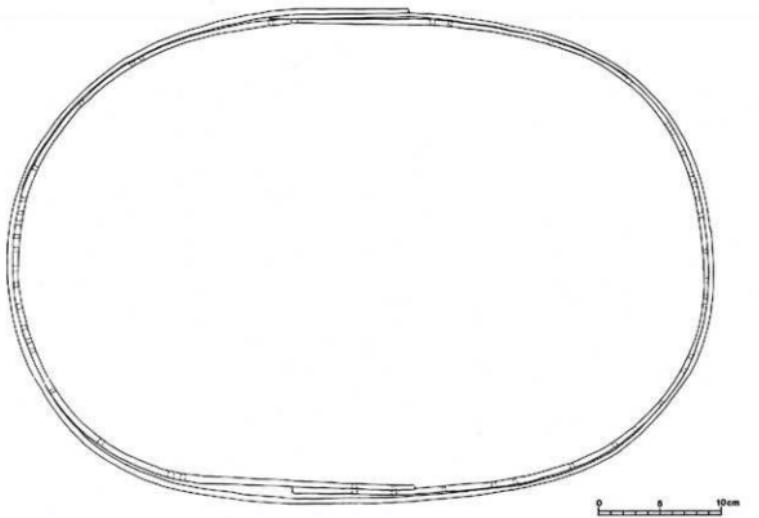
285

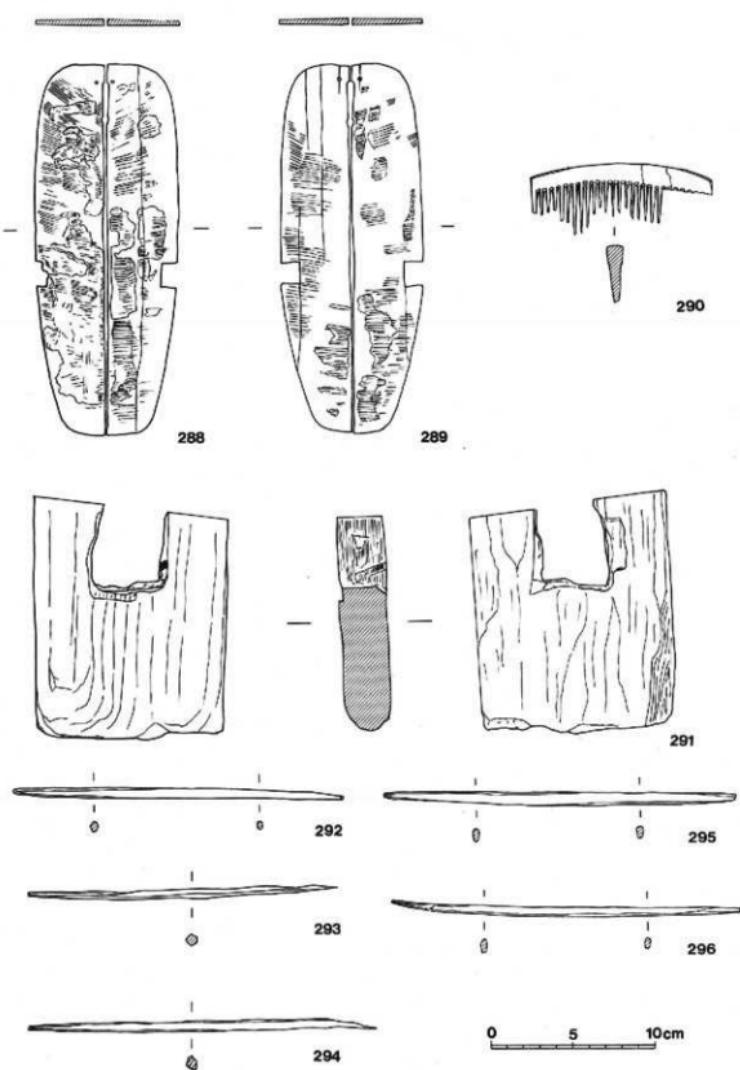


286

0 5 10cm

276～280（遺構面）281～283（S X 1901）284（S E 1904）285・286（遺構面）





288・289 (S E 1907) 290・292 (S E 1904) 293・294 (S E 1905) 295 (S E 1908) 296 (S E 1911) 291 (遺構面)

II. 近江八幡市八甲・黒橋遺跡

1. はじめに

本報告は、昭和60年度県営カンパイ事業（近江八幡金田地区西庄第2工区）に伴う近江八幡市八甲、黒橋遺跡の発掘調査にかかるものである。

八甲、黒橋遺跡は、県教育委員会の分布調査で、中世の土師器等の散布を確認しており、また、中世における古戦場跡として遺跡分布図に記載されている。ここに、県営カンパイ事業が実施されるにあたって事前に発掘調査を行い、遺構の有無と範囲を確認し、その保存策を講じることとした。

調査は、滋賀県教育委員会が同農林部から依頼と経費（555,000円）の再配当をうけ、財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。発掘調査の体制は以下のとおりである。

調査主体 滋賀県教育委員会

調査機関 財団法人滋賀県文化財団保護協会

調査指導 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課 技師 葛野泰樹

財団法人滋賀県文化財保護協会 埋蔵文化財調査三係 係長 大橋信弥

調査担当 向上 技師 仲川 靖

調査期間 昭和60年8月5日～昭和61年3月31日

調査にあたっては、滋賀県農林部耕地建設課、同八日市県事務所土地改良第二課の方々に協力を仰いだ。

なお、本報告の執筆、編集には仲川があつた。

2. 位置と環境

八甲、黒橋遺跡は滋賀県近江八幡市西庄地先に所在する。八幡山、西の湖を配し、西に蛇糸川が流れる。標高は概ね、88.00m前後を割る。

遺跡の周辺には早くから人が居住していたとみられ、長命寺湖底遺跡、元水茎遺跡等では、縄文時代中期～後期にかけての土器が出土している。また、晚期になると前述の遺跡で丸木舟が多数出土しており、湖で漁をし食料を得ていたことがわかる。弥生時代になると遺跡数も増し、前述の遺跡の他、高木遺跡、浅小井遺跡等がある。

3. 調査経過（第2図）（第3図）

本年度の調査地点は、近江八幡金田地区西庄第2工区の中央部にあたる。トレントンは、主に、第3号支線排水路敷を中心とし、30～50mピッチで、遺構の有無、遺跡の範囲を確認するため、幅2m、長さ5mの試掘トレントンを設定し、土層の観察を行った。排水路は延長500mで合計9箇所の試掘トレントンを設定し、T-1～T-9、とし、順次、機械力による表土除去、遺構検出、トレントン断面の精査、写真撮影、尖端作業を行った。

T-1トレントンは、最も南寄りで、今回の調査地点で一番標高の高い箇所である。表土下25cmまでが耕土で、以下灰色砂層が5cm、黄茶色粘土層が25cm、であった。地山は青灰色粘土層のグライ化した土で、遺構、遺物とも存在しなかった。



第1図 トレンチ配置図

T-2 トレンチは、T-1 トレンチとほぼ同一の標高であるが、耕土直下で、砂層は存在せず、黄茶色粘土層が、28cm堆積していた。地山は、青灰色粘土層で、T-1 同様遺構遺物とも存在しなかった。

T-3 は、一段下がった田で、耕土下で黄茶色粘土は堆積せず、以下スクモ層が76cm堆積する。流木片以下に遺物等の包含はなく、スクモ層の下は青灰色粘土層で遺構は存在しなかった。

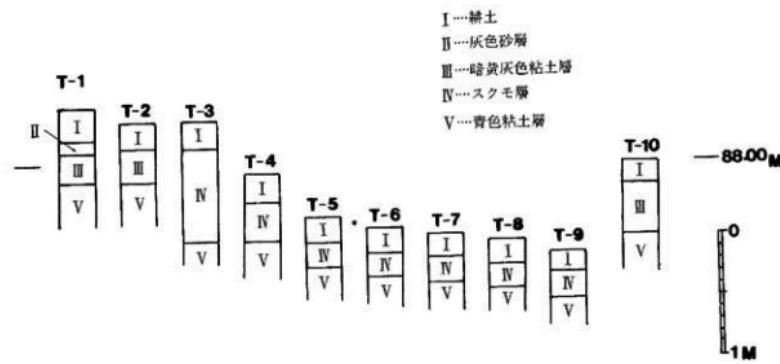
T-4 は、耕土下で、T-3 同様の層位が確認されたが、スクモ層は30cmの堆積にとどまっている。

T-5 以下 T-9 までは、地下水の漏洩が激しく、土層観察がきわめて困難な状況となり、遺物の確認は、バケットであげた耕土をかき分けて確認することにした。ここでも、T-3 同様の層位で、遺構、遺物ともに存在しなかった。

T-10 は台形状に残るマウンドで、現状は竹藪である。古墳のマウンドの可能性がある為、東西に幅 2 m、長さ 5 m のトレンチを設定した。土層は、T-3 同様、黄茶色粘土、スクモ層、青灰色粘土層で、遺構、遺物ともに存在しなかった。

試掘調査の結果、北の西ノ湖寄り程、低湿地の様相を呈しており、極めて漏洩が激しくなり、土層の変化も見られなかった。

調査地は、全体に傾斜しており、遺構の存在が無いものとみられるため、トレンチを拡張せず、調査を終了した。



第2図 試掘トレンチ土層観察図

4. まとめ

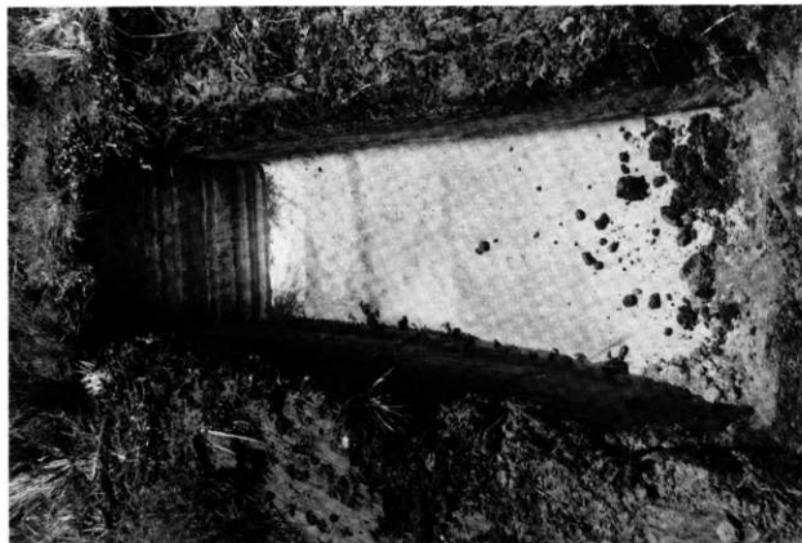
今回の調査地は、古戦場跡とされていたが遺跡分布図によると、八甲遺跡、黒橋遺跡の範囲の間にあたる空白地点である。

土層の状況、あるいは漏水の著しいことから、旧西ノ湖、もしくは、西ノ湖の南に位置する後背湿地であるといえよう。

しかるに、近年、後背湿地でも遺構等が存在することや、周辺でも長命寺湖底遺跡や元水堀遺跡のように湖岸線で遺跡や遺物の出土をみており、その取り扱いに留意する必要があると考えられる。



2. T-3 試掘状況



1. T-2 試掘状況

III. 近江八幡市勸学院遺跡・田中堂遺跡

1. はじめに

本報告は、昭和60年度県営は場整備事業（桜原馬淵Ⅱ期地区第11号分水管網敷設）に伴う近江八幡市勤学院遺跡および田中堂遺跡の発掘調査によるものである。

勤学院遺跡・田中堂遺跡は、供養塚古墳を始めとする千僧供遺跡群の西に隣接し、これまでに、昭和56年度の県営は場整備事業および白鳥川河川改修事業に伴う発掘調査で、弥生時代から室町時代にかけての遺構が確認されている。ここに再び、県営は場整備事業が実施されるにあたって、事前に発掘調査を行い遺構の保護策を講じることにした。

調査は、滋賀県教育委員会が同農林部から依頼と経費（勤学院遺跡・2,220,000円、田中堂遺跡・1,110,000円）の再配当をうけ、財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。

発掘調査にかかる体制は次のとおりである。

調査主体 滋賀県教育委員会

調査機関 財団法人滋賀県文化財保護協会

調査指導 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課 埋蔵文化財係 技師 萩野泰樹

財團法人滋賀県文化財保護協会埋蔵文化財課 調査三係 係長 大橋信弥

調査担当 向上 技師 仲川 睦

調査作業員 井上一三、北尾正一、久郷 熊、小西秀夫、田川初二、橋口勝次、橋口和平、木本みよ、中井千代、橋口きぬ、橋口きみ（敬称略）

調査期間 昭和60年10月1日～61年3月31日

調査にあたっては、近江八幡市教育委員会をはじめ、滋賀県農林部耕地建設課、同八日市県事務所土地改良第二課、近江八幡市西部土地改良課、同市馬淵町地区・同土地改良区の方々に多くの協力を仰いだ。また、近江八幡教育委員会技師岩崎直也氏、財團法人滋賀県文化財保護協会埋蔵文化財課課長近藤滋氏、同調査一係技師松沢修氏、同調査二係技師山路正幸氏の諸氏には調査の全般にわたって多くの協力と教示を得た。さらに木簡の解説にあたっては、国立奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部史料調査室文部技官斎野和己氏の指導を、木製品の取上げ、保存処理には滋賀県埋蔵文化財センター保存処理化学担当の中川正人氏に、同じく写真撮影には寿福滋氏の協力を得た。とくに記して感謝する。

なお本報告の執筆・編集には仲川があたった。

本文中に使用した遺構の略記号は次のとおりである。

S B ; 扱立柱建物跡、S H ; 竪穴住居址、S D ; 溝状造構、S K 文化財土壤状造構、S E ; 井戸状造構、S D X ; 方形周溝墓

遺構の数字番号は遺跡が広範囲で同一面上に重複するため、001～100番までは弥生時代の遺構、101～200番までは古墳時代の遺構、201～300番は白鳳時代から奈良時代にかけての遺構、301～400番は平安時代以降の遺構とした。

2. 位置と環境

勧学院遺跡、田中堂遺跡は、滋賀県近江八幡市馬瀬町・千僧供町地先に所在する。馬瀬町は近江八幡市の南西部にあり、集落の北を東海道新幹線と国道8号線が並走し、東は、瓶削山が、西は日野川が流れる標高97m前後を測る地で、集落内を、八日市市に端を発する白鳥川が縱断している。

周辺には、県の史跡指定を受けている供養塚古墳を始め、住蓮坊古墳、岩坂古墳、トギス塚古墳の他、瓶削山の西そには、大小10数基にわたる円墳が群集している。又、近年掘ノ内遺跡で、弥生時代後期後半に位置づけられる五角形住居跡が検出されており、この時期にも一大集落が形成されていたことがわかる。さらに、同時期の方形周溝墓群が多数検出されていることより、近江八幡市内でも浅小井・高木・出町を中心とする北部の集落と当遺跡の南部の集落に二分されていたことが推定されている。

白鳳時代から奈良時代にかけては、天智天皇の波来系氏族の集団を移任せしめたことと、蒲生野の入口にあたり、県下でも大津市西部の大津京周辺と同様の重要地点となる。この時期では、千僧供廃寺を始め上田廃寺、長光寺遺跡等の寺院跡の他、近年、県内に8箇所置かれたとする郡衙のうちの一つ蒲生都衙の推定地として注目されている。即ち、南に延びる日野一員部街道の廻点にあたること、御館前遺跡で「西殿」と記された墨書き土器の出土や、掘ノ内遺跡等で、墨書き付が記された井戸枠等の検出から、郡衙の存在を濃好にしている。

平安時代以降は、東寺の領地となり馬瀬庄として栄える。馬瀬庄は、一説に現馬瀬町・千僧供町、岩倉町、上田町を含める広大な領地とされるが、その範囲は不明である。

中世以降は、佐々木氏、京極氏の領地となり、織田信長が、安土に城を構えてからは、瓶削山に出城を築き、西南部の廻点となる。

3. 調査経過（第1図）

本年度の調査地点は、近江八幡西部地区朝原・馬瀬2期工区第11号分水管網配地計画箇所の白鳥川沿い西岸にあたる。国道8号線に平行し、白鳥川に直交する形で各々農道、市道路肩寄りに敷設するパイプラインで、路肩下よりパイプ埋設の際掘り込まれる幅1m、深さ70cmの範囲である。当遺跡は、周知遺跡として、ほ場整備にかかる以前に確認されていなかった為、今回の調査は、隣接して行われている白鳥川河川改修事業に伴う発掘調査を参考にして、まず、パイプライン敷設箇所における試掘調査を行い、遺構の有無、遺跡の範囲等の把握を行った。その結果、4地点において遺構の確認をし、それぞれ第1～第4トレンチとした。さらに、当初パイプ埋設箇所のみの調査を予定していたが、工事の工程上パイプを埋設する際に水田内を重機が走行するため、幅5mにわたって耕土を除去することにより、急掘、耕土を除去した際に遺構面が露呈する3地点を重点的に調査することにした。

試掘調査は、昭和60年10月8日から17日まで、本調査は10月18日から開始し、順次第1トレンチから第4トレンチに移り、機械力による表土除去、遺構検出、写真撮影、実測作業を行い、12月23日に完了した。調査終了後は、機械力・人力による現状復帰の埋戻しを行い、とくに方形周溝墓の溝、井戸等の深く掘り込んだものには、ズリを入れ、農作物に支障をきたさないよう考慮した。

1トレンチは、当初幅6m、長さ30mのトレンチの予定であったが、遺構面の擾乱が激しく、現白鳥川結界の

第1図 レンチ配置図



際、土手を修復するのに使用した60P ブルドーザーのキャタピラの跡が遺構面に達しており、今後も同様の事態が考慮されるため、所有者の了解を得て、現白鳥川河川敷と旧白鳥川の間の三角形の範囲約300m²を拡張して調査を行った。

2 トレンチは、市道新在家一馬淵線の東側から現白鳥川河川敷までで、白鳥川の河川敷沿いにL字にトレンチを設定した。しかし、河川敷沿いは、すでに場整備の際にかなり削平されており、一部遺構が残存しているにすぎなかつた。また遺構の残っていた西側でも耕土の厚さが15cm程のため耕耘機やトラクターの車輪のあとが遺構面に深く達しており、今後、は場整備事業の際、切土面の協議において最低耕土の厚みを25cmは残さないと農作業等においても遺構が破壊されることを如実に物語る資料であることがわかつた。

3 トレンチは、すでに昭和58年度に一部調査が行われており、遺構の関連を調べる意味で、再度所有者の了承を得て拡張した。

4 トレンチは、新在家一馬淵線沿いの東側で、幅2mの南北トレンチである。東側は旧白鳥川河川敷のため、かなり削平、攪乱されていた。遺構は、深さ1.5mに及ぶ溝があったが、遺物包含層が耕土直下50cmと深いため、重機走行幅のトレンチは設定せずパイプ埋設箇所のみに限定した。

4. 検出遺構

第1 トレンチ（第12図）

基本層序は、第1層耕土、以下暗褐色粘性砂質土であるが、耕土直下で遺構面の箇所もある。遺構面は黄褐色粘性砂質土で標高96.9m前後を測る。ここでは掘立柱建物跡3棟、竪穴住居址3基、井戸状遺構1基、土壤状遺構2基を検出した。

S B201（第2図）

南北2間、東西3間の総柱の東西棟である。方位は磁北よりN-9°-Wを示す。柱間距離は南北で1.6m～1.8m、東西で1.4～1.6m前後を測る。柱穴は一辺60～80cm前後の隅丸方形のものと不定形のものがある。深さは平均して36cmを測る。柱痕は25～30cm前後と太く、他の掘立建物にくらべて強固な造りであったとみられる。掘形埋土は、黒褐色粘性砂質土に黄褐色粘性砂質土がブロック状に混じっており固くつきかためられている。柱は朽ちてたものとみられ、一部の柱穴で残片が確認できた。柱穴の掘形埋土からは布留式土器の破片が、柱痕埋土中より8世紀中頃の須恵器の杯蓋の破片が出土している。

S B301

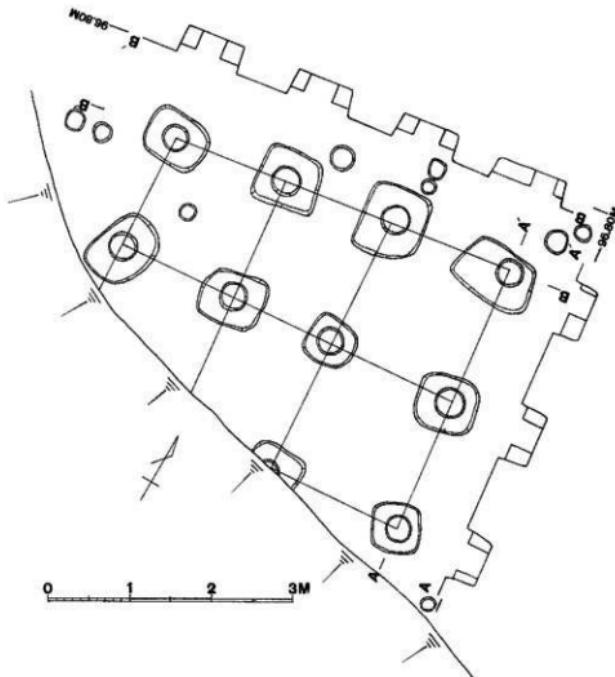
トレンチ中央部に位置しており、南北2間、東西3間の東西棟である。柱間距離は、南北で1.6～2.1m前後、東西で1.8～2.0m前後を測る。柱穴は、15～20cmの円形で、深さは10～15cmと浅い。柱穴内埋土より平安時代後期の土師皿の破片が出土している。

S B302

S B301の建て替えを行った建物で、規模は同じであるが、西側の柱筋が若干北東方向へずれる。

S B303

トレンチ東端にある建物で、東西1間分、南北2間分の柱穴を検出した。柱間距離は、南北で2.25m、東西で3.1mを測る。柱穴は20～30cmで、深さは40cm前後である。柱穴内埋土より平安時代後期の土師皿の破片が出土している。



第2図 第1トレンチSB 201遺構図

S H001 (第3図)

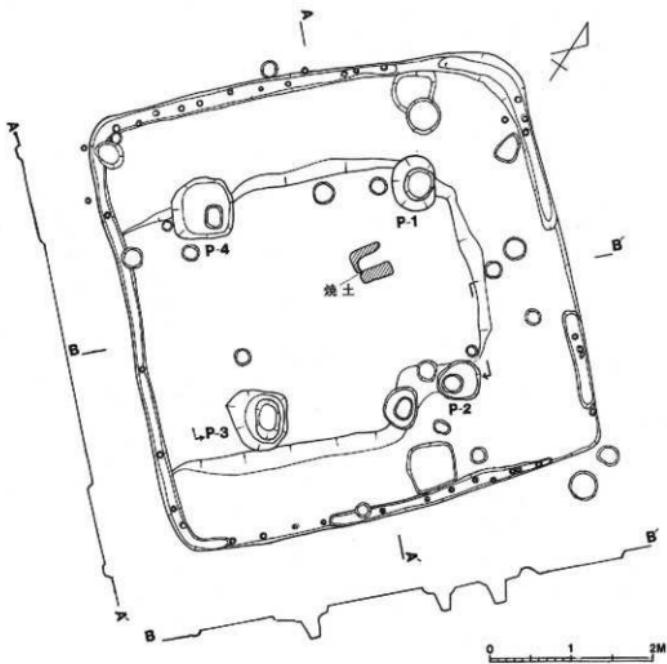
一辺5.3mの方形の堅穴住居である。床面積は28.0m²を測り、方位は磁北よりN-40°-Wを示す。過去の耕作、擾乱のため遺構の残りは悪く床面までの深さは、深いところでも10cmを測るにすぎない。主柱穴は四隅で検出した。柱穴は径40~50cmの円形を呈し、柱痕は径20cm前後、深さ40cm前後を測る。柱間距離はP・1~P・2間で2.5m、P・2~P・3間で2.3m、P・3~P・4間で2.5m、P・4~P・1間で2.5mを測る。周溝は、ほぼ四周をとりまくが、若干東側中央部でとぎれしており、東辺に入口を設けていたとみられる。床面中央には、コの字形に焼上痕が認められ、他にカマドをとりつけた痕跡が認められないため、床面中央にかがを設けていたとみられる。なお、床面は西側をのぞいて、コの字状に落ち込んでおり、中央部がベッド状に広く高まっている。また周溝内には、径4~6cmの小穴が20~30cm間隔ではばちどり状に並んでおり、壁板を支える竹または棒を指し込んだ穴とみられる。出土遺物は微量であるが、時期は弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる。

S H102

トレンチ南東隅にて検出したが、後世の削平をかなりうけており、周溝の一部と中央炉の焼土痕のみしか検出できなかった。時期は床面より出土した布留式土器からみて古墳時代前期と考えられる。

S H103

S H102と重複する住居址で、周溝の一部のみを検出した。規模等は不明である。時期はS H102に先行する古



第3図 第1トレンチ SH 001遺構図

墳時代前期と考えられる。

S E 301

S H 101の北に位置する径110cm、深さ70cmの円形の井戸である。内部の井戸枠等はすでに抜き取られており、廃絶後、井戸枠を抜いた後一掃に埋められていた。遺物は鎌倉時代の土師皿と常滑焼の大甕の胴部片、瓦質の羽釜が出土しており、鎌倉時代に廃絶した井戸とみられる。

S K 001

S H 001の南に隣接する土壤状遺構で、長径240cm、短径160cmの隋円形を呈する。底は舟底形で、黒褐色粘性砂質土が堆積していた。遺物は、壺、甕、高杯、器台で弥生時代後期に比定できるものである。

S K 301

S E 301の東に位置し、幅30cm、長さ100cmを検出した。道路下に延びており、溝状遺構になる可能性もある。出土遺物は平安時代後期の頃に比定できる土師皿が出土している。

第2トレンチ（第13図）

耕土直下（表土面下20cm）で黄灰色粘質土の遺構面で標高97m前後を測る。遺構面は、すでにトラクター、コンバイン等の車輪の跡が無数についており、特にトラクターの車輪跡は、深さ5cmに及び、溝が平行に10数条並ぶ状態であった。ここでは、平安時代以降のPit数基と弥生時代中期末葉の方形周溝墓2基、溝条遺構1条を検

出した。東側は、中央部が落ち込みと旧白鳥川跡で、現白鳥川沿いは、第1トレンチに対応するPit群が検出されたが、現白鳥川に平行する南北トレンチでは、落ち込み以外は、ほとんど削平されて消滅していた。

S DX001 (第4図)

規模は、一边9.0m、溝幅1.0~1.5m、深さ30~50cmを測る。南東隅の溝が浅くなっている陸橋部とみられる。主体部は削平されて遺存していない。埋土は2層からなり、上層が暗紫灰褐色粘性砂質土、下層が黒褐色粘土である。南辺の溝中央部底より弥生時代中期中葉の受口状II縁を成す近江型の甕の半分が出土している(第6図)。築造時期は、弥生時代中期中葉とみられる。

S DX002 (第5図)

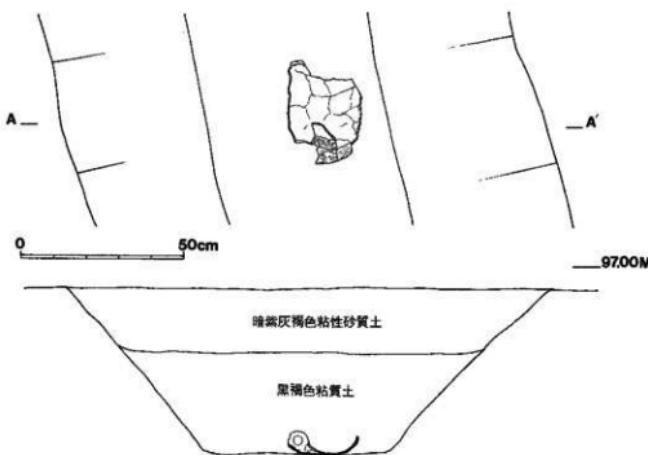
規模は、一边11.0m、溝幅1.0~1.5m、深さ30~50cmを測る。S DX001よりはやや大きい。南西隅の溝が途切れで浅くなっている陸橋部とみられる。方位は、S DX001と同様、やや東に振る。溝の埋土は2層からなり、S DX001と同様の土が堆積していた。遺物は、東辺の溝中央部底より壺1個体が(第7図)、南辺の溝中央付近の底から甕と小型甕が1個体ずつ(第9図)、南辺の南西隅コーナー近くで壺1個体(第8図)が出土した。いずれも供獻土器とみられる。築造の時期は、出土遺物より弥生時代中期末葉とみられ、S DX001よりは遅れて造られたものと考えられる。

S D001

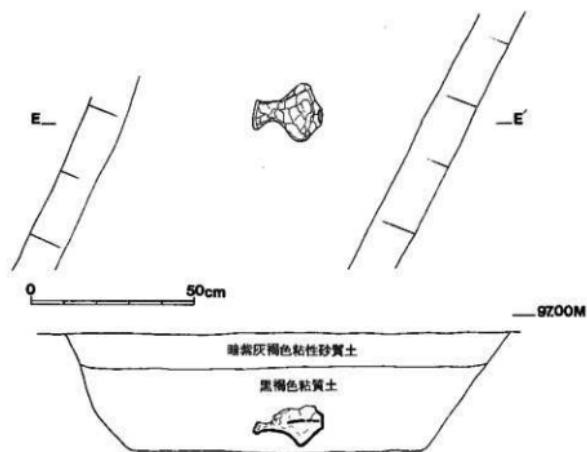
S DX001の東に位置し、幅1.0m、深さ50cmを測る南北溝で、集落と墓域を画する溝とみられる。遺物は包含していない。

第3トレンチ (第14図)

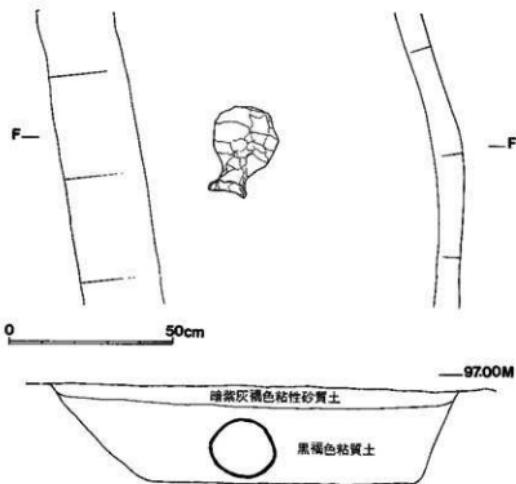
基本層序は、第2トレンチと同様耕土直下で黄褐色粘性砂質土の遺構面にあたる。遺構は、主に馬淵小学校グラウンドの南側に遺存している以外は旧白鳥川により広く削平されている。ここでは、弥生時代後期の方形周溝墓2基、奈良時代中期の掘立柱建物跡1棟、同時期の井戸跡1基、鎌倉時代初頭の井戸跡2基を検出した。



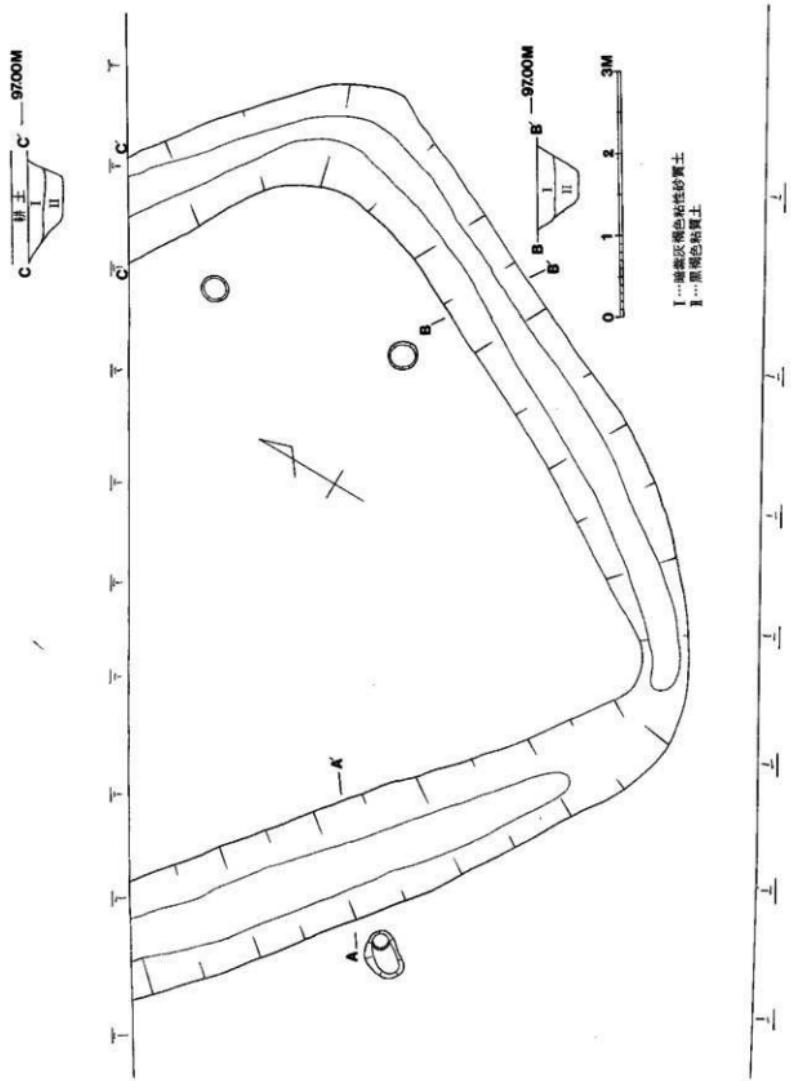
第6図 S DX001土器出土状況図



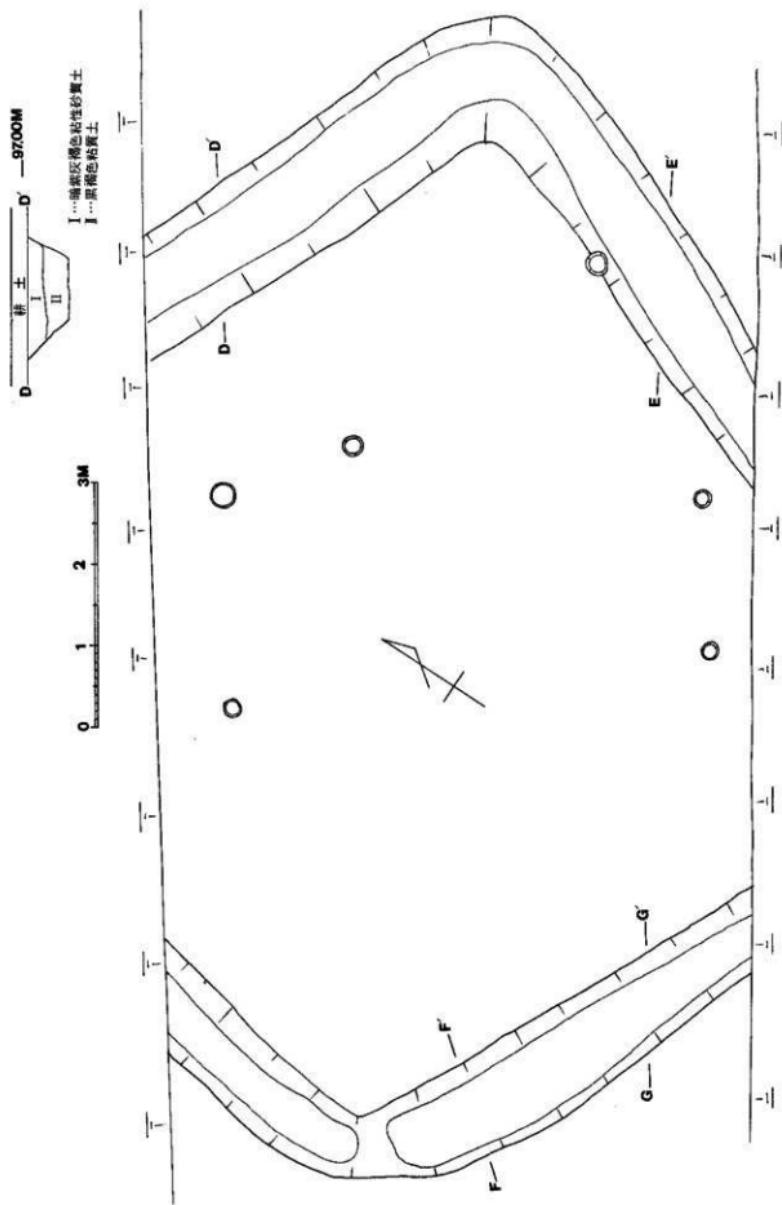
第7図 SD X002土器出土状況図



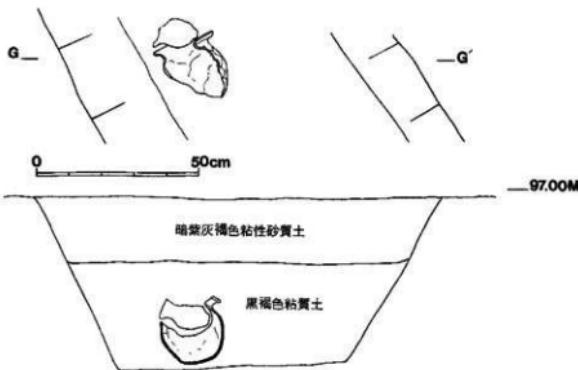
第8図 SD X002土器出土状況図



第4図 第2トレンチSD X001断面



第5図 第2トレーンSDX02選択



第9図 SD X002土器出土状況図

SD X003

一辺11.0m、溝幅1.0~1.2m、深さ20~40cmの方形周溝墓で、北西隅と南京隅以外の各コーナーと辺々を検出したが、西辺は擾乱されており不明であった。南京隅で溝が浅くなっており陸橋部とみられる。溝内より出土遺物はなかった。遺構の北半分は、昭和58年度の調査で検出済みである。

SD X004

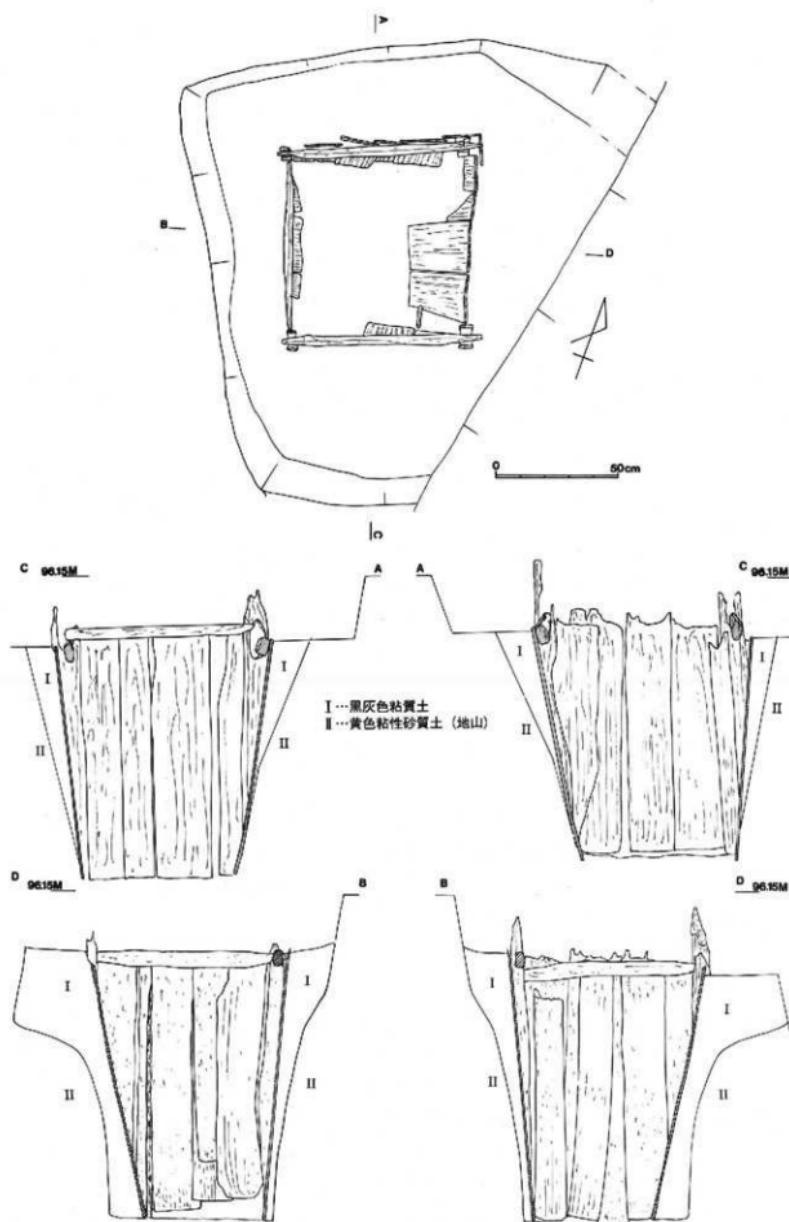
一辺12.0m、溝幅1.0~1.30m、深さ20~80cmの方形周溝墓で、南辺を除く各辺を検出した。溝は北東隅で途切れしており、陸橋部とみられる。主体部は遺存していないかった。溝の各辺は弓形に弯曲し、中央部がもっとも深く掘り込まれ、V字状を成す。溝内埋土は一層で黒褐色粘性砂質土が堆積していた。遺物は出土していない。

S B202

トレンチ東部に位置し、東西1間分、南北2間分の柱穴を検出した。東西2間、南北2間以上の総柱の建物とみられる。方位はN-9°-Eを示す。柱距距離は、南北で1.4mと1.6m、東西で2.3mと2.5mを測る。柱穴は不定形で、一部柱を抜き取った痕跡がみられる。抜き取り埋土中より奈良時代中期の須恵器が出土しており、この時期に廃絶したとみられる。

S E201 (第10図)

SD X003の東辺を切り込んでつくられており、平面プランでは、擾乱層のような状態で、断ち割りをした結果、ほぼ原形をとどめている井戸跡と判明した。井戸は1m四方の掘り形内の四隅に角柱を立て、角柱をとり開むように長さ80~150cm、幅15~25cm、厚さ1~1.5cmの板を30枚交差して立てかけて、上部を横木で押さえた四隅横棎止め縦板井戸と呼ばれる形態のものである。井戸枠の内のは80cm四方、深さは120cmで、南北2ヶ所の横木は、角柱にうがったはぞ穴に貫抜き状に押し込まれており、東西の横木は、井桁状に渡されていたが、先端部は行ちてあり、南北の横木とのように接続していたかは不明である。井戸の埋土は、上部15cm程が黄色粘土と灰色粘土が混じた擾乱層のような土で、その下は、黒灰色粘質土が底まで堆積していた。井戸枠内の埋土中からは、人為的に破壊したと思われる須恵器杯身8点、杯蓋1点、水瓶1点、壺1点、蓋1点、土師器高杯2点の土器の破片(図版七)の他に、壺串8点、柳箱の蓋1点(図版十)、曲物側板残片、網籠残片、瓜1個体、桃



第10圖 SE 201造樣平面圖斷面見通圖

の種子12個が出土している。又、井戸枠の東側の縦板の間から、不用になった箱の側板に記した「諭語」「天」「道」「我」等の文字を書いた習書木簡が1点出土した(国版九)。井戸枠は、下部の方が土圧によりせり出しており、特に東側の縦板は大きく傾き、斜めになっている。そのため、幅10cm、厚さ1cmの板を突きさして板がずるのを防ぐ応急処置を施している。井戸枠に使用している板材及び角柱は、一本の木を斧で断ち割っており、あまり加工をしていない。ただし、角柱のうち1本は転用材で、一面が平坦に加工しており、中央に径4cm程の貫通しない円孔をうがっており、扉の軸受けになる横木とみられる。縦板は、一部のものに、三角形の切れ込みを入れたものがあり、適度に地下水が枠内にしみ出すように施した水抜き用の穴とみられる。井戸が廃絶した時期は、出土土器より、奈良時代中期とみられ、煮申等の出土より、ついでに、井戸の水神を鎮魂し、祭りをしたあと、埋めたと考えられる。

S E 302

径160cm、深さ85cmの井戸で、枠はすでに抜かれており遺存していない。埋土は3層よりなり、上層が暗茶褐色粘性砂質土、2層めが黒灰色粘質土、下層が暗灰色粘質土である。遺物は主に、2層めより出土しており、黒色土器碗3点が出土している。井戸は鎌倉時代初期、12世紀終わり頃に廃絶したものとみられる。

S E 303

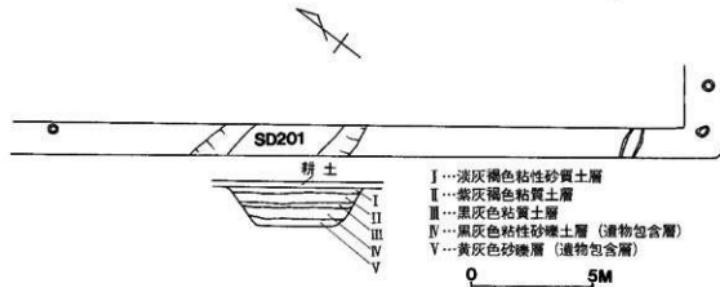
S E 302の西に位置し、径120cm、深さ110cmを測る井戸で、枠はすでに抜かれており遺存していない。埋土は、S E 302と同じである。遺物は、土師皿7点、輸入陶磁器1点、曲物の底板3枚、箸1本が出土している。時期は、S E 302より後とみられる。

第4トレンチ(第11図)

基本層序は、第3トレンチと同じである。遺構は、東側は旧白鳥川によって削平されており、西側に遺存しているものと思われる。ここでは、掘立柱建物跡の柱穴2基と東西に流れる溝1条を検出した。

S D 201

幅4.50m、深さ1.50mを測る。埋土は5層よりなり、第1層淡灰褐色粘性砂質土層、第2層紫灰褐色粘質土層、第3層黒灰色粘質土層、第4層黒灰色粘性砂礫土層、第5層、黄灰色砂礫土層で、遺物は、主に、第4層上面と第3層に奈良時代中期の須恵器、土師器、木製品が、第5層に、弥生時代後期から古墳時代前期中葉にかけての遺物が、多量に含まれていた。



第11図 第4トレンチ南端遺構図

5. 出土遺物

ここでは、各トレンチの遺構内より出土した遺物について、特に特長のあるものをとりあげて説明する。

(1) 土器

第1トレンチ

S K001

壺1は、胴部がやや丸味を帯び、頸部にてやや外反ぎみに外上方へ伸び、口縁部外面に粘土ひもをはりつけ肥厚させる。全面にやや荒いハケ調整を行う。壺3は、頸部より口縁部にかけて外反し、端部でやや屈曲し、外面に面をとり下垂させる。壺2は、いわゆるS字状口縁の受け口状を成す口縁で、端部は、やや丸くつまみ出す。他に、高杯、器台等が出土しているが、断片のみであるため、全体の器形は不明である。いずれも、古墳時代前期の庄内式併行に移らんとする時期と思えるが、弥生時代後期末の土器一括資料とする。

S E 301

常滑焼壺12と土師皿10、11が出土している。常滑焼壺は、大甕の胴部とみられ、外面に長方形の雄型に、格子状の刻みを入れ、粘土ひもの継ぎ目をたたいたとみられる押印が、2列めぐらされている。内面には、押印を施した際のあて木の圧痕が残っている。胎土は、灰茶色を呈しており、常滑焼Ⅱ—前半段階に相当するものと思われる。土師皿10は、粘土塊を押し広げて、口縁部をやや外上方に伸ばし、口縁部内面と外面をヨコナデ調整し、体部外面を指おさえで施し、内面を「の」の字状にナデたもので、全体に扁平で、歪んでいる。土師皿11は、板の上で成形しており、口縁部は外上方へ伸びたあと若干外反し、端部を丸く收める。両者とも焼成・胎土良、色調は淡赤褐色を呈す。両者ともA₃—5タイプとみられる。1300年代初頭に位置づけられる。

S K 301

土師皿9は、口縁部で稜を成し、やや外反したあと端部を丸く收める。歪はなく、正円に近い、調整も外面の指圧痕を丁寧に消している。A₁—1とみられる。11世紀初頭のものである。

第2トレンチ

S DX001で甕が1個体、SDX002で壺が2個体、甕が2個体出土したが、いずれも細かく割れており、復元・実測是不可能であった。SDX001の甕は受け口状口縁のいわゆる近江型の甕で、口縁外面に横方向へハケ目調整を施すもので、体部は、やや細い丁寧なハケ目調整を縱方向に施している。SDX002出土の甕2個体は、いずれも同じ器形で、胴部下半に最大径を有し、細頸の頸部から口縁部にかけて外反し、口縁部で屈曲し、受け口状を成すものである。甕は、大型の甕と小型の甕が重なり合っていたが、小型の甕は、圧痕のみです。すでに土壤化しつつあった大型の甕は、口縁部の端部が上方に屈曲しS字状口縁の甕に移行する前段階のものである。

SDX001の甕は弥生時代中期後半、畿内第Ⅲ様式併行に、SDX002の甕は弥生時代中期末、畿内第Ⅳ様式から第Ⅴ様式に移行する時期ぐらに位置づけられるとみる。なお、SDX002は、東海系の外上唇式併行期に近い器形である。

第3トレンチ

S E 302

13は、黒色土器塊で、体部は大きく内弯し、口縁部で稜を成しやや外反する器形である。内外面ともに丁寧なヘラ磨きを施す。高台部はがっちりした断面台形状の外にふんばるはりつけ高台である。14は、器形は13と大差

ないが、高台部がやや貧弱になり、外面の調整も指圧痕のみである。内面は、ていねいな花卉状暗文を密に施している。内面に×印のヘラ記号を付している。16は、体部が内弯し、口縁部で棱を成しやや外反する土師皿である。13は、久野部遺跡出土例もしくは杉江遺跡出土例で11世紀後半から12世紀前半、14は、杉江遺跡例か富波遺跡例で12世紀前半から12世紀後半に、16は、A₂-1タイプに位置づけられ12世紀前半のものとみられる。

S E 303

小皿17～22と皿の23の土師皿がセットになっており、小皿は、底部が指圧痕で、口縁部にてやや内弯し指ナデを施すものである。内面は、乾燥後、再び上塗りを施し「の」の字状にヨコナデをする。23は、口縁部が外上方に直線上に伸びる器形で、調整手法は小皿と同じである。24は、輸入陶磁器で、口縁部が直線的に外上方へ伸び、端部を横につまみ出し、高台は、ひねり出して断面三角形状につくるものである。全面に黄釉がかかる。土師皿は、A₃-4、5タイプ¹⁴、輸入陶磁は竜泉窯系のものとみられ、1200年代後半から1300年代初頭に位置づけられる。

S E 201

27、28は、土師皿の高杯で、頸部を11面に丁寧にカットしており、27は、杯部内面にラ線状の暗文を施している。頸部は比較的短かい。胎土は、流紋状に粘土がこねられた痕跡があり在地の土器とみられる。29～32は、須恵器の杯身で、底部より屈曲した口縁部が若干内弯し直線的に外上方へ伸びるものである。33は、杯蓋で、天井部よりやや内弯したあと11縫部は水平に伸び、端部を屈曲させるものである。34、35、36は、高台を付す杯身で、34、35は、やや内弯ぎみにつく高台が、底部と体部の境に付され、口縁部が直線的に外上方へ伸びる。36は、はりつけ部が、底部と体部の屈曲する境よりやや内側につく。37は、土師質の須恵器で大型の高台を付すが、器種は不明である。38は、薬壺と思われ、やや肩張りの丸味を帯びた体部で、体部と底部の境に外にふんばる台形状の高台を付す。39は、水瓶の頸部で、やや外上方に外反ぎみに伸び、上部に凹部を1条施す。いずれも、平城宮Ⅲ、750年代に位置づけられる。¹⁵

第4トレンチ

S D 201

最下層より40～65の土器が、第4層より66、68～94の土器が、第1層上面に67の土器が出土した。

40～45は、口縁部がS字状に屈曲する受け口の甕で、端部上面に面をとり、端部を横方向にややつまみ出す。体部は外面がハケ調整で内面でヨコナデ、口縁部は、受け口に屈曲する外面に刺突列点文を施すものや、こぶ状の帖りつけ隆帯文を付すものがある。46は並とみられ、口縁部外面にハケ調整をしたあと、帖り付け隆帯文を1対ずつ付す。47、48はミニチュアの手づくり土器で、とくに47は、粘土塊を指にさし込んで握りしめただけのもので、用途は不明である。49、50、51は高杯で、八の字状に広がる脚部で、三方に円形の彫しを施し、外面は、ていねいにヘラ磨きをしている。いずれも、弥生時代後期末頃に位置づけられるとみられる。

52～56は、須恵器杯身、57、62は有蓋高杯、58～60は、杯蓋、61は高杯蓋である。52～55の杯身は、体部は、やや内弯ぎみに立ち上がり、口縁部で屈曲し、口縁部は内彎ぎみに長く伸びる。端部内面に鋭い棱をとり面を成す。受部はやや外上方につまみ出し丸く収める。体部2分の1に、丁寧な回転ヘラ削りを施す。56は、底部が、やや弯曲し、体部の立ち上がりも浅く、受部も水平に伸びるやや扁平な器形で、底部は荒い回転ヘラ削りである。底部外面に×印のヘラ記号が施されている。57は、形態の特徴は、52～55の杯身と同じであるが、体部の調整が、板状工具による回転横ナデ調整である。58～60の杯蓋は、天井部から内弯ぎみに下垂する体部で、口縁部との境に明瞭な棱を成し、中に横方向につまみ出すものもある。口縁端部内面に鋭い棱をとり面を成す。61は、形態的

には杯蓋と同じであるが、天井部に中央がへこむ、やや扁平なつまみを付す、体部2分の1に丁寧な回転ヘラ削りを施す。以上、56以外は、いずれも陶邑II-1、もしくはII-2に位置づけられる。

68-81は須恵器で、内、68-71は高台のない杯身で、底部より鋭く口縁部が屈曲し、外上方へ直線的に伸びるものである。72-74、77は、外にふんばる断面台形状の高台を底部と口縁部の境よりやや内側に付す杯身である。75、76は、屈曲部の境に五角形状の高台を付す。78は、扁平な薺壺に高台を付した薺壺と杯身を合せたもので、蓋がつくものとみられる。口縁端部は上方に伸びる。79-81は杯蓋で、内湾ぎみに水平に伸びたあと、口縁部で屈曲する器形で、天井部中央に扁平な宝珠型のつまみを付す。82は、灰釉陶器の皿で、断面三月型の高台を付す。体部より口縁部にかけてやや内湾ぎみに外上方へ大きく開き、端部で横方向へつまみ出す。83-87は、土師器の皿で、やや外反する口縁部を厚し、端部内面に浅い沈線を施す。89-94は土師器椀で、内湾ぎみに外上方に伸びる口縁部で、端部を丸く収めるものと、内面に浅い凹面をとるものがある。

68-71、75、76は平城Ⅲ(750年代)に位置づけられる。¹⁰⁹ 72-74、77、78は、平城Ⅰ(710年代)頃に位置づけられるとみられる。82は、折戸53号窓第1段階に位置づけられる。

(2) 木製品

第3トレンチ

S E 201

木簡、斎串、柳箱の良好な資料が出土している。

木箱は、長さ331mm、横48mm、厚さ10mmを測り、木箱の側板を転用したようなものに習善したものであるが未詳である。型式的には065型式に属す。

釋文は

と記されており、2人の人物が書き記したとみられ書体の違うものがある。

蓋半は、頭部を山型に落とし、下部をやや長く突がらすもので、頭部よりやや下に、両端に斜めの切れ込みを1箇所ずつ施すものでC-2型式のものである。

柳箱は、桝22cm、器高3cmを測るもので蓋とみられる。径2~3mmの柳を平行に並べ、糸で縫じ合わせていったもので、端部を切り落として、両側から竹でおさえ棒とし、桿皮で縫じている。縫じ糸は腐っていないが、圧板が明晰に残っている。



勧学院遺跡出土遺物観察表

器種	器形	No.	法 量 (cm)	形態上の特徴	手 法 上 の 特 徴	その他の特徴	遺 様・備 考
弦 生 式 土 器	壺	1	口径 高さ	14.0 26.0 体部は球形 口縁は外上方に開き、口縁外 面に粒状ひもを結りつけ把厚 させる 口縁外面はやや下垂する	内外面ともていねいなハケ目 調整	焼成 良 胎土 良 色調 赤褐色	SK001 写真版五-9
	壺	2	口径	18.0 体部は肩張りの大きくふくら む形状、口縁部はS字状に曲 曲する受口狀	体部はハケ目調整 口縁部はヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 乳白色	SK001
	壺	3	口径	20.0 口縁は外上方に内凹し、瑞部 で把厚させ直立する 端部外面に面を成し、やや下 垂する	口縁部外面・体部内面 ヨコナデ、体部外面 ハケ 目調整	焼成 良 胎土 良 色調 赤褐色	SK001
	器合	4	口径	18.0 口縁は大きく外上方に直線的 に開く 端部はややとがる		焼成 良 胎土 良 色調 淡赤褐色	SK001
	高 环	5	口径	22.0 口縁は大きく外上方に直線的 に開く 端部はややとがる	内外面ともヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 淡褐色	SK001
	壺	6	口径	12.0 口縁は外上方に開く	内外面ともヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 淡赤褐色	SK001
土 器 器	甕	7	口径	22.0 口縁は外上方にやや内窪み に開く受口狀 縁部はまみ出でて内面に浅 い凹を成す 体部は、あまり張らず直線的	体部外面は幅1.5~2.0 cmの ていねいなハケ目調整 体部内面は横機方向、横方向の 幅1 cmのハケ目調整 口縁部外面は横方向のハケ目 調整、「縁部内面は横方向の ハケ目調整 体部と口縁部の内面間に指正 痕	焼成 良 胎土 良 色調 淡黄灰色	SB201 西落ち込み
	埴 身 器	8	LH 器高	10.0 体部は外上方にゆるやかに内 凹する、受口狀を中心にびる 口縁部は内傾したあと端部に て直立する、端部はくにおさ める	底部 ヘラ切目調整 体部外面・口縁部 凹部ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	SB201 西落ち込み
上 師 器	皿	9	LH 器高	10.6 1.8 体部は外上方に開き縁部と の境に甘い接合となる 口縁部はやや外反し、端部は 丸く收める	体部前面下半 不定方向のナ ダ 「縁部・体部内面 ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 乳茶色	SK201 写真版五-12
	皿	10	口径 器高	9.6 1.4 体部と口縁部の間に甘い接合を とる、口縁部はやや外反し 端部はくにおさめる	全面ナデ	焼成 良 胎土 良 色調 乳褐色	SE301 写真版五-11
	皿	11	口径 器高	12.0 2.4 体部はやや内凹したあと外上 方に伸びる 口縁部はやや把厚させ丸く 收める	底部外面 板目仕上げ 体部内面 口縁部 ナデ	焼成 良 胎土 良 色調 乳褐色	SE301 写真版五-10
常滑燒	甕	12		体部は外上方に伸び、肩部で 大きく内凹する	内外面ともヘラナデ 肩部に格子状の押印を連続し て付す 押印の内側にあて木の圧痕 ある	焼成 良 胎土 良 色調 灰茶色	SE301
黒色土器	碗	13	LH 器高 両径	15.2 5.6 6.4 体部は外上方に内窪みに開 く、口縁部との間に甘い接合を とり、端部はややまみ出しと がりぎみに收まる、端部 内面に幅2 mmの沈線をめぐら す	内外面ともていねいなヘラミ ガキ 口縁部はヨコミガキ	焼成 良 胎土 良 色調 内外面とも 黒色	SB302 写真版六-14 久野部Aタイプ

器種	器形	No	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考	
黒色土器	縁	13		貼り付け高台 外にふんばる合形状の安定した高台				
	縁	14	口径 器高	15.0 5.5 高台径 5.5	体部内面ぎみに外上方に開く、口縁部との境に甘い棱をとり、端部は丸く收める 端部側面に沈線をめぐらす 貼り付け高台 外にふんばる合形状の安定した高台 底部内面にX印のヘラ記号有り	体部外面、指圧痕 内面に凹状の線文を密に施してしまってみがく 口縁部外面、ヨコみがき 外面部高台付近、ヘラミガキ	焼成 良 胎土 良 色調 内面 黒色 外面部 乳白色	SE302 写真図版六-15 杉江タイプ
	縁	15	高台径	5.4	外にふんばる五角形状の安定した高台貼り付け高台	内面みがき 花弁状暗文 外面部高台付近 ヘラミガキ	焼成 良 胎土 良 色調 内面 暗色 外面部 乳白色	SE302 杉江タイプ
土器	皿	16	口径 器高	14.0 3.5	体部はやや内窪ぎみに外上方に開く 体部と口縁部の境に甘い棱をとり、口縁部は外反ぎみに外上方に開く、口縁部側面く收める	体部外面下半は指圧痕 体部外面上半部と口縁部外面 体部内面はヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 乳白色	SE302 図版
	皿	17	口径 器高	9.0 1.5	17. 18. 20は底部は内窪ぎみで口縁部がやや内窪ぎみに外上方に開く	底部外面は指圧痕 口縁部外面はヨコナデ 底部内面はの字状ナデ	焼成 良 胎土 良 色調 黄灰色	SE303 図版
師器	皿	18	口径 器高	8.4 1.2	19. 21は口縁部の直線的に外上方に開く	内面は牛乾きの後、底面別土で上げナデ調整を施す		
	皿	19	口径 器高	8.2 1.5	底部と口縁部立ち上がりの境にいずれも甘い棱をとる 口縁部は丸く收める			
	皿	20	口径 器高	8.0 1.5				
	皿	21	口径 器高	8.8 1.3				
	皿	22	口径	11.4	口縁部は外上方に直線的に開き、端部で若干内凹する 端部は丸く收める	口縁部外面ヨコナデ 底部、指圧痕	焼成 良 胎土 良 色調 黄灰色	SE303
輸入陶磁器	皿	23	口径 器高	12.0 2.5	底部はやっとがるものほぼ水平、口縁部は直線的に外上方へ開く 端部は丸く收める	底部および口縁部下半外面 指圧痕 口縁部外面、底部内面、ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 黄灰茶色	
	縁	24	口径 器高	12.4 4.2	底部水平、底部より口縁部は外横方向へ開き出す 断面逆三角形の高台部を底部よりつまみ出でて作る	全面に厚さ1mmの質地が強さ れておりガラス状にひび割れ している	焼成 良 胎土 良 色調 白色 黄系色	
須恵器	縁	25-1	口径	20.4	腹部は中央に最大径を有し、 やや幅扁の球形 口縁部はやや直立したあと外 反し端部で深澤する 端部内面で面をとり、やや内 傾する	全面回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 暗灰包	SDX003 南落ち込み
	縁 縁部蓋蓋	25-2	口径 器高	9.0 3.4	天井部外面はやや丸味をとび 内窪しながら口縁部にて直立 ぎみに下垂する 端部内面で堅な様をとる 端部はややとがる	天井部外側 回転ヘラ削り その他は回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	SDX003 南落ち込み
	縁身	25-3	口径 器高	14.0 3.4	底部ほぼ水平、口縁部はやや 内窪ぎみに立ち上がり、底部 にてやや外反する、 端部は丸く收める	底部外面、ヘラ切末調整 他は回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 明灰色	SDX004 南piti内

器種	器形	No	法量 (ml)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
須恵器	环身	26	口径 器高 14.4 4.8	底部ほぼ水平、腹部よりやや内窓したあと、口縁部は直線的に外上方へ開く 帖り付の合台、高台は逆台形内側に接地面をもち、腹部と底部の境にとりつく	底部へラ切末調整 他は回転ヨコナデ 底部外面に「高」の墨書きあり	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	白鳥川沿い第2トレ ンチ包含層 写真図版五-13
土師器	高环	27		环部、内面下半はほぼ水平 脚部の基底 11向に面取りをする	脚部外面、ヘラ削りのあと磨き、内面ナデ 环部内面、ナデ、磨き、ラ線状暗文を施す	焼成 良 胎土 良 色調 赤褐色	SE201 図版七-29
	高环	28		环部内面下半は水平、口縁部はやや外上方に開きぎみにつくる 脚部基底は11面に面取りをする	环部は内外面ともナデのあと磨き 脚部外面は、ヘラ削りのあとナデ磨き	焼成 良 胎土 良 色調 淡赤褐色	図版七-28
甕	环身	29	口径 器高 12.6 3.3	底部水平、腹部よりやや内窓したあと、口縁部は直線的に外上方へ開く 口縁端部がよく收める	内外面ともヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	図版七-18
	环身	30	口径 器高 12.0 4.0	底部水平、腹部より内窓し、口縁部は直線的に外上方へ開く、端部がよく收める	底部外面 ヘラ切末調整 底部内面 ナデ、他は回転ヨコナデ 内面に若干 指圧压痕	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	図版七-16
	环身	31	口径 器高 13.6 5.0	底部水平、腹部で若干内窓したあと、口縁部は直線的に外上方へ開く 端部がよく收める	底部外面、回転ヘラ削り 他は回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	図版七-19
	环身	32	口径 器高 14.0 4.6	底部水平、腹部より若干内窓したあと、口縁部は直線的に外上方へ開く 端部は丸く收め、若干外反ぎみにつまみ出す	底部外面、ヘラ削りのあとナデ、他は回転ヨコナデ 底部内面中央に、ヨコナデの仕上げナデを施す	焼成 良 胎土 良 色調 暗灰色	図版七-17
甕	环蓋	33	口径 12.4	天井部外面やや落らくぼむ 内窓ぎみに下革したあと、口縁部端に内窓にして成し、口縁端部にて屈曲する、腹部内側に面を成し施部を外下方へ吞下つまみ出す	天井部外面 ヘラ削りのあとナデ 他は回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	図版七-26
器	环身	34	高台径 10.0	底部水平、腹部より上端にかけて直線的に外上方へ開く 内窓ぎみの合台状の帖り付高台を脚部と底面部にとりつける	底部ヘラ切末調整 他は回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	SD201 図版七-20
	环身	35	高台径 11.8	底部水平、腹部は内窓ぎみに外上方へ開く 腹部と底面部に内窓する断面逆台形の高台を帖りつける 接地面が外側にある	底部ヘラ切末調整 他は回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	図版七-21
	环身	36	高台径 12.0	底部水平、腹部は内窓したあと外上方へ開く、腹部と底面部に断面逆台形の高台を帖りつける	底部へラ切末調整 他は回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰白色	図版七-22
	壺	37	高台径 17.0	底部水平、腹部はやや内窓したあと外上方へ開き、胸部と底面部に断面逆台形の高台を帖りつける	全面ナデ	焼成 軟質 胎土 良 色調 乳灰色	図版七-27
	壺	38	高台形 7.4	底部水平、腹部はやや内窓したあと外上方へ開き、胸部と底面部に最大径を有し、やや肩張り状。端部を外下方へつま	底部外面、ヘラ切末調整 脚部外面下半 回転ヘラ削り 他は回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	図版七-23

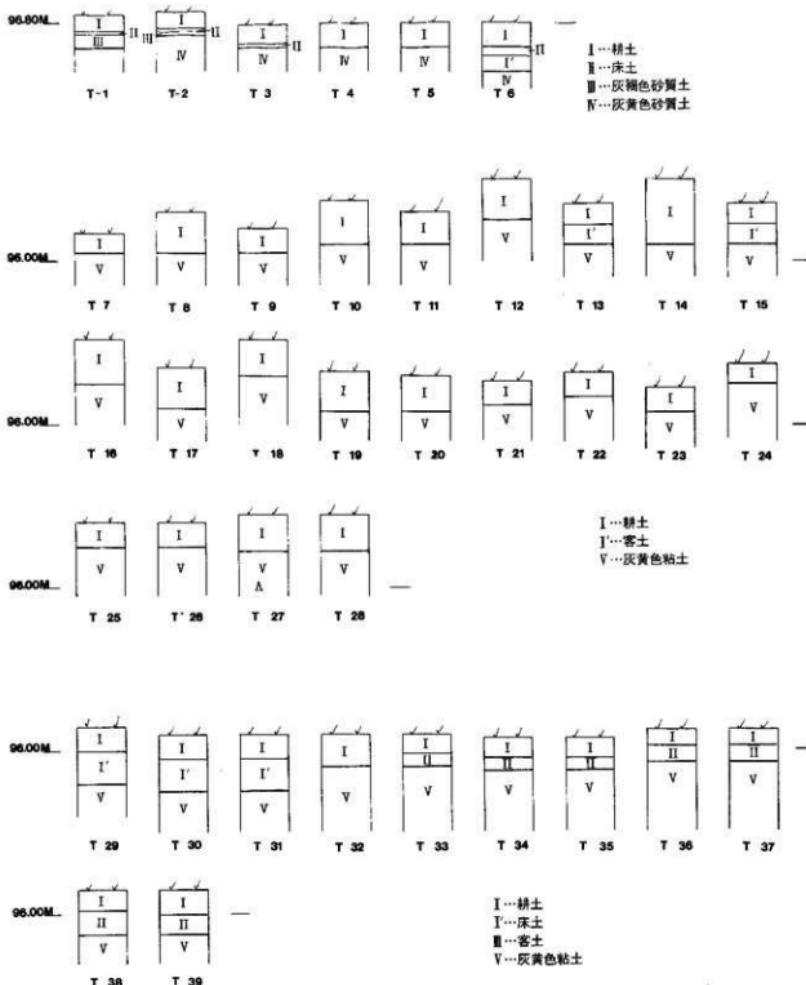
器種	器形	No.	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
水瓶	39			み出す、断面逆台形状の高台を貼りつける	底部外面へラ切味調整		図版七-25
				やや外反ぎみに外上方へ開く頸部で上部に幅5mmの凹部を1条施す	全面 回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 淡灰色	
甕	壺	40	口径 18.0	肩部は直線的に内傾し、頸部にてやや外反ぎみに凸曲したあとでS字形に屈曲する縦部はやや外につまみ出し、内曲上方に面を成す	肩部外面 壁ハケ目調整 肩部内面 ハケのあとナデ 口縁部から外面向ともヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 乳灰茶色	第4トレンチ SD201 最下層
	甕	41	口径 18.0	40と同じ	手法はほぼ40と同じ S字状の口縁を成し、口縁部は外上方へつまみ出す	焼成 良 胎土 良 色調 乳白色	
	甕	42	口径 20.0	S字状の口縁を成し、口縁部は外上方へつまみ出す。屈曲は40より大きく屈曲部が外へ張り出す	肩部 内外面 ハケ 他はヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 乳灰茶色	
	甕	43	口径 14.0	S字状の口縁を成すが口縁部の内面は鋸く、端部は直線的に立ち上がる端部内面に面を成す	口縁部の屈曲部外面に、対になる角突起を以て施す 肩部より腰化にかけて、横方向のハケ、ハケはヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 黄灰茶色	
	甕	44	口径 14.0	S字状の口縁を成し、口縁部は外上方へ開く端部内面上方に面を成す	口縁部外面の粘土を、貼り付け棒で3ヶ所削仕する 貼り付け方法を施す 頸部内面ハケ 他はヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 黄灰色	
	甕	45	口径 14.0	S字状の口縁を成す。口縁部はやや外上方につまみ出し内曲上方に面をとる	口縁部外面に2条の平行沈模文を施す 他はヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 黄灰色	
土	甕	46	口径 14.0	粘土塊を指にさしこんで、握りしめて作っている	底部にヘタによるX印の記号あり	焼成 良 胎土 良 色調 淡灰茶色	
	手づくね	47		粘土塊を指にさしこんで、握りしめて作っている	底部にヘタによるX印の記号あり	焼成 硬質 胎土 良 色調 黄灰色	
器	三字土子器	48		ややとがりぎみの不安定な底部を成し、体部外上方へ開く	外面 ナデ 内面 指圧痕	焼成 良 胎土 良 色調 茶褐色	
	高环	49		八の字状に開く脚部で基部付近で若干直立する三方に円孔をつくる	脚部外面は横方向のていねいなへラ磨き 内面はナデ	焼成 良 胎土 良 色調 赤褐色	
	高环	50		八の字状に開く脚部で三方に円孔をつくる	40と同じ	焼成 良 胎土 良 色調 茶褐色	
	高环	51	脚部径 7.4	八の字状に開く脚部で基部はややとがりぎみで内面に面を成す 三方に円孔をつくる	脚部外面はいねいな横方向のへラ磨き、脚部内面上方に横方向のへラ磨き、下半は横方向のへラ磨き	焼成 良 胎土 良 色調 黄灰色	
須恵器	环身 or 高环	52	口径 10.0	体部は内傾ぎみに立ち上がる受脚は外上方につまみ出し、端部は丸く收める 口縁部は、内傾ぎみに立ち上がり過疎となる。端部内面に面をとり明瞭な腰を成す	底部から体部下半、いねいな凹はへラ削り 他はヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	

器種	器形	No	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	追記・備考
須	坏身	53	口径 11.0	体部は内窓きみに立ち上がる受部は外上方へのび、端部は丸く收める 口縁部はやや内傾し、端部にて若干外反する 端部内面に面をとり、明瞭な棱を成す	外面は、底部より体部下半まで回転へラ削り 他は回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 青灰色	第4トレント SD201 最下層
	坏身	54	口径 11.0	受部は外上方へのび、端部はやや丸く收める 口縁部はやや内傾し長くのびる端部はとがる 端部内面に面をとり明瞭な棱を成す	回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 青灰色	
	坏身	55	口径 11.0	体部は内窓きみで、窓壁が厚い、受部はやや外上方へのび 端部は丸く收める 口縁部はやや内傾し端部はとがる 端部内面に面をとり明瞭な棱を成す	回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 白灰色	
	坏身	56		底部角底形、やや内窓きみに外上方へ体部はひび 受部は水平にひび窓部を丸く收める	底部外面 回転へラ削り 体部口縁部 内外面回転ヨコナデ、底部外面にX印のヘラ記号あり	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	
	高坏	57	LJ径 10.0	体部内窓し受部は外上方へのび 端部は丸く收める 口縁部はやや内傾し、端部はとがる 端部内面に面をとり明瞭な棱を成す	体部外面は板状工具によるナデ 他は回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 青灰色	
器	坏蓋	58	口径 13.0	体部は内窓する、口縁部は直下に下垂し端部は外下方につまみ出す、端部(窓)はややくほみ明瞭な棱を成す 体部と口縁部の窓はつまみ出し、明瞭な棱を成す	回転横ナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	
	坏蓋	59	口径 13.0	58とは同じ 体部と口縁部の窓はつまみ山さす、明瞭な棱を成すだけ	回転横ナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	
	坏蓋	60	LJ径 13.0	58と同じ	回転横ナデ	59と同じ	
	高坏蓋	59	LJ径 13.0	天井部ドーム状、体部は内窓きみに下張し直下に伸びる、端部はやや外下方につまみ出し、内面に面を成し明瞭な棱をとる 体部と口縁部の窓はややつまみ出し棱をとる 天井部中央に頂部がくぼむ扁半なつまみを付す	天井部外面 回転へラ削り 他は回転横ナデ	焼成 良 胎土 良 色調 青灰色	
	高坏	62		ハの字状に開く脚部で、脚部端部で組曲させ、外面に面を成す 二方に長方形の彫を施す	回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	
土器	亞	63		頸部にてくの字状に屈曲し、 口縁部は外上方に直線的に開く	口縁部 体部外面 ハケ目調 内面 ナデ	焼成 良 胎土 良 色調 赤褐色	
	裏	64	LJ径 14.0	頸部にてくの字状に屈曲し、 口縁部にて外上方に直線的に大きく開く	体部外面 ハケ目調 他はヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 赤褐色	
	小形甕	65	口径 12.2	頸部にて直立きみに屈曲し、 口縁部上半で外上方へ開く	口縁部、体部外面斜方向のハケ目、口縁部内面ヨコ方向の	焼成 良 胎土 良	

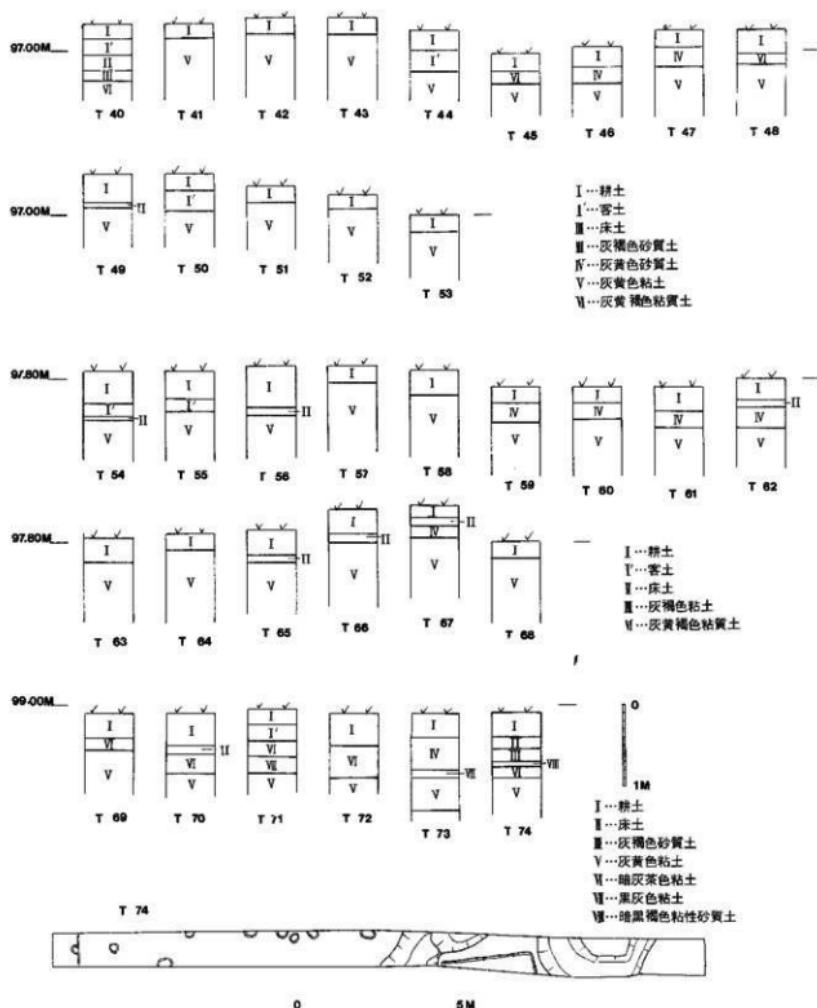
器械	器形	No	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
		65		端部は丸く収める	ハケ目 体部前面 ナデ	色調 茶褐色	
須 身	口径 器高	66	10.2	底部水平、腰部若干外反し、 口縫側は内弯きみに立ち上がる、 口縫端部はほほ逆立し丸く 収める	底部外面 ヘラ切本調整 他は回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	第4トレンチ SD201 第4層
	口径 器高	67	12.0	底部水平、腰部より内弯きみ に立ち上がり口縫部以外上方 に直線的に開く 端部は丸く収める	底部外面 ナデ 他は回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 浅灰色	第4トレンチ SD201 第1層
	口径 器高	68	13.0	底部水平、腰部は線を成し屈曲したあと、 口縫部は外上方に直線的に開く 端部は丸く収める	底部 ヘラナデ 他は回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 白灰色	第4トレンチ SD201 第4層
	口径 器高	69		底部は若干くぼむ 腰部より扁曲し、口縫部は外上方に直線的に開く	底部 ヘラ切直 他は回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	
芯 身	口径 器高	70	12.0 3.7	底部水平、腰部に直曲し、 口縫部は外上方に直線的に開く 口縫端部は丸く収める 恐らく、口縫端部にむけて縮る	底部外面 ヘラナデ 他は回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	第4トレンチ SD201 第4層
	口径 器高	71	12.0 3.5	底部水平 腰部にて屈曲し、 口縫部は外上方に直線的に開く、 口縫端部は丸く収める	底部外面、ヘラ切りのあとで 1.5mmなナデ 他は回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	
	口径 器高	72	16.0 4.2	底部 水平、腰部よりやや内弯 きみに立ち上がり、口縫部は 若干外反ぎみに外上方に開く 端部は丸く収める 腰部よりやや内側に断面台形状の 高台を軸りつける 接地面は内側にある	71と同じ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	
	口径 器高	73	13.0 3.5	底部水平、腰部よりやや内弯 きみに立ち上がり、口縫部は 外上方に直線的に大きく開く 端部は丸く収める 腰部よりやや内側に断面台形状の 高台を軸りつける	71と同じ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	
器 身	口径 器高	74	12.6 4.1	底部水平、腰部よりやや内弯 きみに立ち上がり口縫部が 反きみに外上方へ開く 端部は丸く収める 腰部より底部の端に外にふんば る断面台形状の高台を軸りつ ける	底部外面 ヘラ切りのあとナ デ 他は回転ヨコナデ 底部端部のみ 仕上げナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	
	口径 器高	75	15.0 5.5	底部水平、腰部より若干内弯 したあと、「U」字型に直線的に 外上方へ開く、端部は丸く収 める 腰部と底部の端に外にふんば る断面五角形の高台を軸りつ ける	71と同じ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	
	口径 器高	76	15.0 6.0	75と同じ 器高は75より厚い	71と同じ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	
	口径 器高	77	14.4 4.4	底部は器壁厚く大きく突出して いる、腰部よりやや内弯したあと、「U」字型に直線的に 外上方へ開く 端部は丸く収める 腰部よりやや内側に断面逆台	71と同じ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色 底部全面に墨痕があり粘付器として使用 したとみられる	図版八-33

器種	器形	No	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
須 類	坏身	77		形狀の高台を貼りつける 高台は用は足していない	71と同じ		
	栗畫型坏身	78	口径 器高 4.5	底部水平、腰部より大きく内 凹したあと、円筒にてくの字 状に内傾し、口縁部はやや外 反ぎみに上方へつまみ出す 端部は丸く曲める 腹部やや内側向外にふんばる 逆台形狀の高台を貼りつける	底部外面、回転ヘラナデ 他は回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 内面セビア色 外面灰色	四版八-31
	坏畫	79	口径 器高 14.8 1.5	やや高くほんね平な天井部 より屈曲して出水水平に伸び る口縁部は腰部を下方へ屈曲 させる やや扁平な宝珠型ツマミを付 す	天井部外面回転ヘラナデ 他は回転ヨコナデ	焼成 良 壁部に電ね 胎土 良 焼きの跡 色調 淡セビア色	
器 類	坏蓋	80		天井部は内傾ぎみに下垂し、 口縁部にて屈曲し、明顯な段 を成す やや扁平な宝珠型ツマミを付 す	全面回転ヨコナデ	焼成 良 天井部自然 輪付着	
	坏蓋	81	口径 14.0	天井部はやや内傾ぎみに下垂 し、口縁部にて段を成し、や や外反したあと腰部を下方へ 屈曲させる	人井部 外面ヘラナデ 他は回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 白色砂粒を 若干含む 色調 灰色	
	灰釉 陶器	82	口径 器高 14.6 3.5	底部水平、腰部より口縁部は 若干内凹きみに上方へ大き く開き、腰部を下方へつまみ 出す、腰部前面三日月形の 高台を貼りつける	全面でいねいなロクロナデ 口縁部内外面につけがけによ る輪がつく	焼成 良 武部内面に 重ね焼き所 胎土 良 色調 白灰色	
土 器	皿	83	口径 器高 17.0 2.1	底部は水平、体部はやや内 窪したあと口縁部にて外反し る上方へ開く 端部は丸く收められ前面に1条の 沈線を施す	底部外面 指圧痕のあとナデ 他は本等による回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰茶色	
	皿	84	口径 17.2	83と同じ	83と同じ	焼成 良 胎土 良 色調 暗灰色	
	皿	85	口径 17.0	体部は外反きみに外上方へ開 く、口縁端部はやや厚せさせ 丸く收める 端部内側に1条の沈線を施す	底部外面 指圧痕 他は本等によるヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 暗褐色	第4トレンチ SD201 第4編
師 器	皿	86	口径 17.0	85と同じ	85と同じ	焼成 良 胎土 良 色調 暗褐色	
	皿	87	口径 17.0	85と同じ	85と同じ	焼成 良 胎土 良 色調 暗褐色	
	高 坏	88	口径 18.0	体部は直線的に外上方へ大き く口縁端部外側に面を取る 端部内側に1条の沈線を施す	体部外面 いねいな革ナデ 体部外面 いねいな擦き タタキ状文を付す	焼成 良 胎土 良 色調 灰茶色	
四版八-30	坏	89	口径 器高 13.8 3.2	底部は水平 体部より口縁部は直線的に外 上方へ開く 端部は丸く收める	底部外面 指圧痕 体部外面 回転ヨコナデ 指圧の段を残る 内面は回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色 底部外面に「指」の墨 書きある	
	坏	90	口径 器高 14.0 3.2	体部よりやや内窪きみに立ち 上がり、口縁部より上方へ大き く開く 端部前面に面をとり明瞭な接 を成す	89と同じ	焼成 良 胎土 良 色調 橙色 底部外面に墨書きあり	

器種	基形	No.	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
土	环	91	口径 高さ 3.6	13.0 90と同じ	底部 指圧法のあとナデ 他回転ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 棕褐色	
	环	92	口径 高さ	14.0 体部は底部との境に段を或し 内窓きみに立ち上がり、口縁 窓が上方へやや内窓きみに 開く、窓部は丸く収み、内面 に1条の状線を施す	91と同じ	焼成 良 胎土 良 色調 乳白色	
師	环	93	口径 高さ	13.0 3.8	体部はやや内窓きみに立ち上 がり、口縁窓は外上方へ大き く開く 窓部は丸く収める	91と同じ	焼成 良 胎土 良 色調 白灰色
	环	94	口径 高さ	14.0 3.2	体部はやや内窓きみに立ち上 がる、口縁窓は若干内窓きみ に外上方へ開く 窓部が横方向へつまみ出し 丸く収める 窓部内面に面をとり明瞭な棱 を残す	91と同じ	焼成 良 胎土 良 色調 白灰色
木	吾妻木箇	95	長さ 幅 厚さ	33.0 3.5 ~4.5 1.0	片面の上下端に長さ1.5cm、 厚さ0.5cmの切り込みを入れる 全体に細型	表裏・側面ともていねいに削 る	表面 「諸君 之子 犬天 左右 我我我我道人」 裏面 「□ □ 入口」 の墨書きあり SE201 図版九-34
	柳箇		口径 高さ	22.0 2.0	全体にザル状であるが、もと は筒形で組曲していたものと 思われる	横方向に棒を並べ、糸でとじ 合わせたつちを竹製の枠ではさ みとする。枠は複数でとじる	図版十一-35
製	斎 串	96 103	長さ 幅 厚さ	13.0 ~21.7 2.0 ~25 0.1 ~0.4	8本とも頭部を山形に削り落 とし前をV字形にそぎ落と す形で底面と側面の側面の 内側に斜め下に切れ込みを入 れる	全体に斜め削りを施す	図版十一-36 40
	曲物底	104	径 厚さ	14.0 7.0	断面 若干台形状		SE303 図版十一-43
品	曲物底	105	径 厚さ	11.5 8.0	断面 若干台形状		SE303 図版十一-41
	曲物底	106	径 厚さ	13.5 6.0	断面 長方形		図版十一-42
	盤				盤面は面をとり、舟底状に内 向をくりぬく	外面数回にわたる面取り 内面をていねいなろくろ削り	まさ目方向に木方り 刀傷1条あり 第4トレンド SD201 第4層 図版十一-44



第12図 田中堂遺跡試掘トレンチ土層観察図



第13図 田中塩遺跡試掘トレンチ土層観察図

6. まとめ

勧学院遺跡では、3箇所のトレンチで、それぞれ特徴のある遺構が検出された。すでに、昭和56年度のは場整備事業に伴う発掘調査や白鳥川河川改修事業に伴う隣接地区の発掘調査で遺構の存在は確認されていたが、今回の調査では、旧の地割に残る「勧学院」の小字名の箇所が、おおよそ遺跡の範囲であることが判明した。

田中堂遺跡は、昭和56年度のは場整備事業に伴う発掘調査で、「七ツ屋」の集落北で若干の遺物の採集があつたが、今回の調査では、東川町、新在家、七ツ屋の集落の周辺部の主に東西に走る農道沿いに試掘トレンチを設けて遺構の確認をしたが、新在家の集落の最も岩倉寄りにあるT-74トレンチ以外は、遺構の検出を見ず、後世に擾乱、消滅したとみられる。T-74も、明確な遺構とはいはず、土器も全く出土しなかつたため、時期の特定はできなかった。

次に勧学院遺跡の各トレンチの状況からみると、第1トレンチは、白鳥川河川改修に伴う発掘調査トレンチの西に隣接しており、弥生時代後期木葉の竪穴住居址、土壌状遺構と古墳時代前期初頭の竪穴住居址、奈良時代中期の掘立柱建物跡、平安時代終わりから鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡、井戸が、同一面上で検出した。

竪穴住居址は、残りが悪く、壁溝と床面、四柱穴のみであるが、壁溝に残る小穴やベッド状に中央部が高まる床面等から、その構造等が判明できる好資料である。又、奈良時代中期の掘立柱建物跡は、その規模、柱の径、棟方向にはほぼ東西南北にとる点等から、一般住居に伴う倉庫ではなく、豪族クラスか、もしくは官衙に伴う倉庫とみられる。同様の規模のものが、白鳥川河川改修に伴う調査トレンチでも4~5棟確認されている。

第2トレンチでは、2基の方形溝墓が確認されたが、現在の近江八幡市馬瀬小学校のグランド拡張、および、それに平行する白鳥川河川改修に伴う調査で同様の方形周溝墓が検出されており、その延長とみられる。周溝は、いずれも独立しており、溝の共有はみられない。供獻土器は、いずれも1~4個と少なく、台下部の周辺に埴輪の如く並べるものではなく、死者が生前使用していた土器か、もしくは葬儀の際に使用した土器を周溝内にほり込んだものと思われる。

第3トレンチでは、2基の方形周溝墓の他に、奈良時代中期の井戸と掘立柱建物跡、鎌倉時代の井戸2基を検出した。方形周溝墓は、昭和58年度の調査の際に北側の大半を掘っており、規模の確認にとどまった。奈良時代中期に廃絶した井戸は、原形をほぼ残しており、井戸枠は、四隅の角柱、横木、縦板とともに良好に遺存していた。井戸は、ていねいに、鎮めの祭りをして埋められたとみられ、井戸枠内の埋土中より、故意に打ち削られた土師器の高杯2点、須恵器杯身8点、杯蓋1点、水瓶1点等の土器の破片の他、柳箱の蓋1点、肅串8点、曲物鋸板残片、網籠残片、瓜1個体、桃の種子12個が出土した。中でも柳箱の蓋は、ほぼ完形で、構造は柳行李の円形のものと考へらえればよいが、同種の物が、東大寺正倉院御物の中に殊数を納めた柳箱として伝わっている。大きさは、当遺跡のものが一回り大きいが、柳を糸で止めて編んでいる点や、肩部の柳の編み方等、ほとんど同じである。又、今回の出土遺物から、奈良時代中期における井戸の水神、竜神の魂抜き・鎮魂の祭りに使用した供獻物の品数や、それを盛った器が、おおよそ判明できよう。

さらに、井戸枠の縦板の間から出土した木簡は、いわゆる同一文字を反復練習して手習いをした「習書木簡」といわれるものである。一部ひび割れをしており、判読し難い文字もあるが、大部分は肉眼で確認できた。とくに、「論語」「犬」「道」「我」等の文字から推測するに、「論語」・「老子」の一文にある文字を手習いしたものとみられる。「論語」の一文が記された木簡は、奈良市平城宮跡で多く出土しているが、「論語」と明記されてい

木簡は、これまでに、静岡県城山跡^{注1}、奈良市平城宮跡式部省跡^{注2}、平城宮二条大路北側溝跡^{注3}の3例を数えるのみである。「論語」は当時、役人官僚の間では必読書で、式部省大学寮で定められたテキストであった。いわゆる現代版の文部省検定教科書で、しばしば、官吏登用試験にも用いられた。又、今回出土の木簡には、秀筆・稚筆の二例がみられ、二人以上の人物が同一木簡に記入したとみられる。このような点から推察して、SE201出土の木簡は、「論語」・「老子」を座右に置き、その一文の文字を使用不能になった箱の側板に手書きをしていたとみられる。さらに、これを書いた下級役人が、周辺に居住していたか、もしくは、執務をとる官衙のような施設が存在していたことがうかがえる。

第4トレンチでは、深さ1.5mに及ぶ、東西溝と掘立柱建物の柱穴と思われるPitが2基検出された。

溝内の埋土中より、弥生時代後期から奈良時代中期にかけての遺物が多量に出土した。弥生時代後期から古墳時代中期にかけての遺物は、ローリングを受けたものや残片が多く、流出してきたものと思われるが不明である。奈良時代中期の遺物は完形品を含め、器種も豊富である。中でも豪華型の高台付杯身は出土例が少なく注目すべき資料である。他に墨書き1点、転用鏡1点が出土した。

今回は、調査トレンチの範囲が限られていたことや、すでに、ほ場整備で造構面が削平され、一部攪乱を受けたため、遺構一つ一つの性格や、遺跡全体で、どのような位置を占めるものが不明であった。とくに奈良時代中期の掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡は、構造といい規模の面で、官衙の従属施設と思えるが、断定するに至らなかった。しかし、今回の調査で、「高」・「用」と記された墨書き土器が出土していること、周辺の御館前遺跡で、「西殿」と記された灰釉陶器の他、「大」と記された黒青土器が4点程出土しており、今回の木簡と合わせて、官衙を予想するには良好な資料がそろったといえる。今後、官衙の中心的な建物の検出と合わせて、蒲生郡衙の解明につながりとなったと考えられる。

又、弥生時代後期の集落跡であるが、白鳥川の河川改修等の調査も含めて、東の微高地に居住空間が拡がり、西の低地に、方形周溝墓を中心とする墓地が拡がっていたとみられる。現在、このような様相は、市内北部の浅小井、高木、出町周辺の遺跡でもみられ、市内北部と南部に二つの一大集落が展開されていたとみられる。今後の両者の周辺調査に期待されるところである。

注1 赤羽一郎「常滑窯の段階区分と各段階の様相」(『常滑焼、考古学ライブラリー23』 ニューサイエンス社 1984)

注2 横田洋三「土師皿の分類と編年観」(『平安京跡研究調査報告』 第11号 古代学協会 1984)

注3 注2と同じ

注4 大橋信哉「近江型黒色土器再考」(『手原遺跡発掘調査報告書』 栗東町教育委員会他 1981)

注5 2と同じ

注6 2と同じ

注7 古泉 弘「中世都市の生活」(『図説 発掘が語る日本史 2 関東・甲信越編』 新人物往来社 1986)

注8 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告」Ⅱ、Ⅳ、Ⅶ、XII (1962~1982)

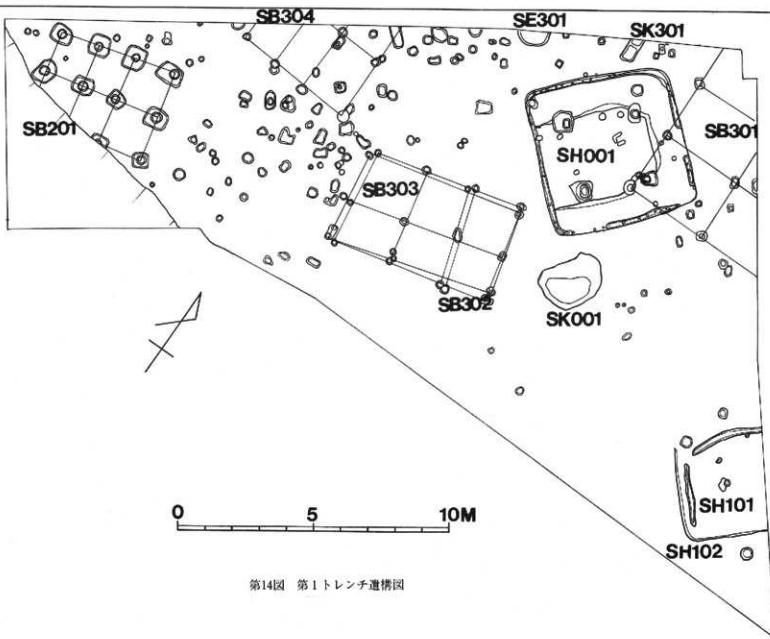
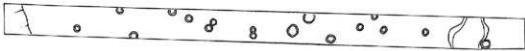
注9 田辺昭三「陶邑古窯址群I」(『平安学園考古クラブ 研究論集』)

注10 注8と同じ

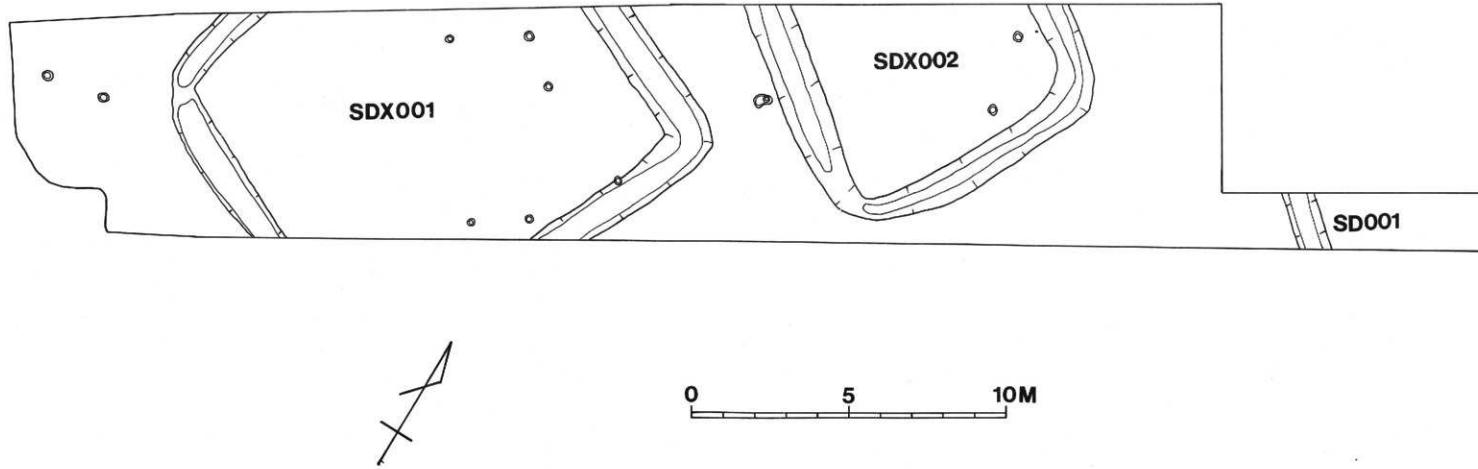
注11 前川 要「猪俣窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」(『滋賀市歴史民俗資料館 研究紀要』 1984)

注12 「滋賀県文化財調査年報」昭和五十四年・五十五・五十六年度 (滋賀県教育委員会 1983)

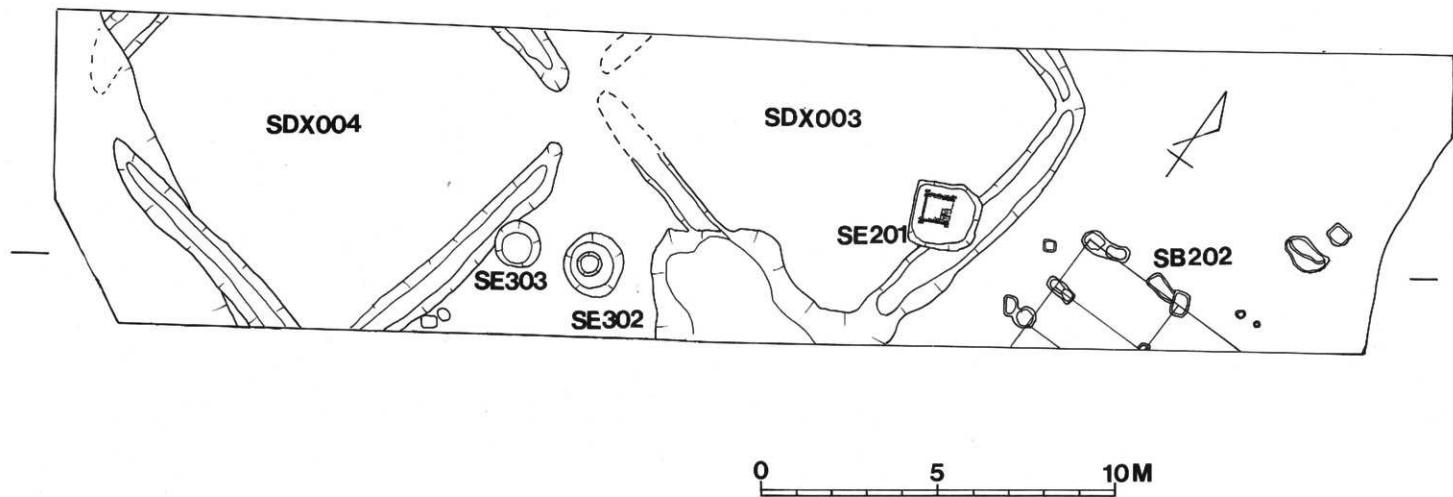
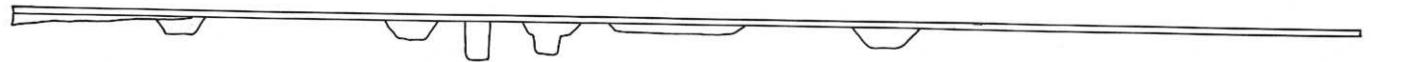
- 注13 「正倉院展目録」1977、奈良国立博物館
- 注14 「木簡研究 第2集」 木簡学会
- 注15 「木簡概報 (四)」
- 注16 「木簡概報 (十五)」
- 注17 「正倉院文書と木簡の研究」
- 注18 「近江の官衙—墨書き器と硯」 滋賀県立近江風土記の丘資料館 1983



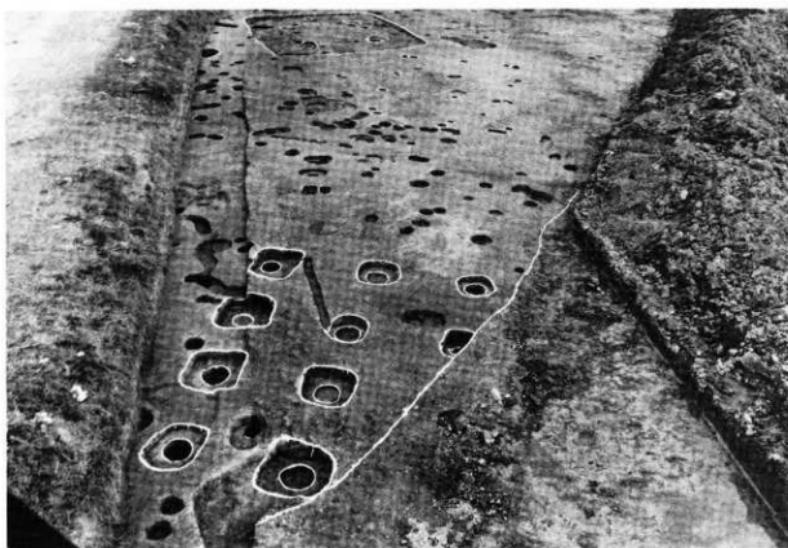
第14図 第1トレンチ遺構図



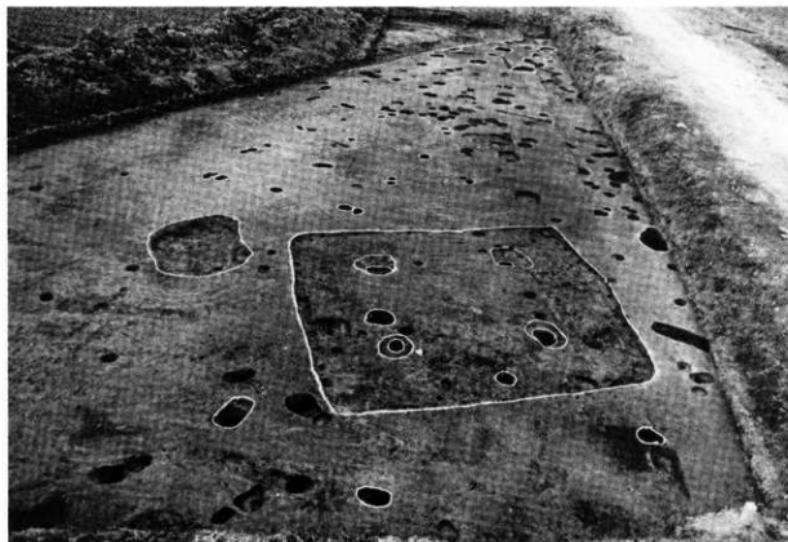
第15図 第2トレンチ遺構図



第16図 第3トレンチ遺構図



1. 第1トレンチ全景（西から）



2. 第1トレンチ全景（東から）



3. 第2トレンチ全景(東から)



4. 第3トレンチ SE 201



5 第3トレンチ全景（東から）



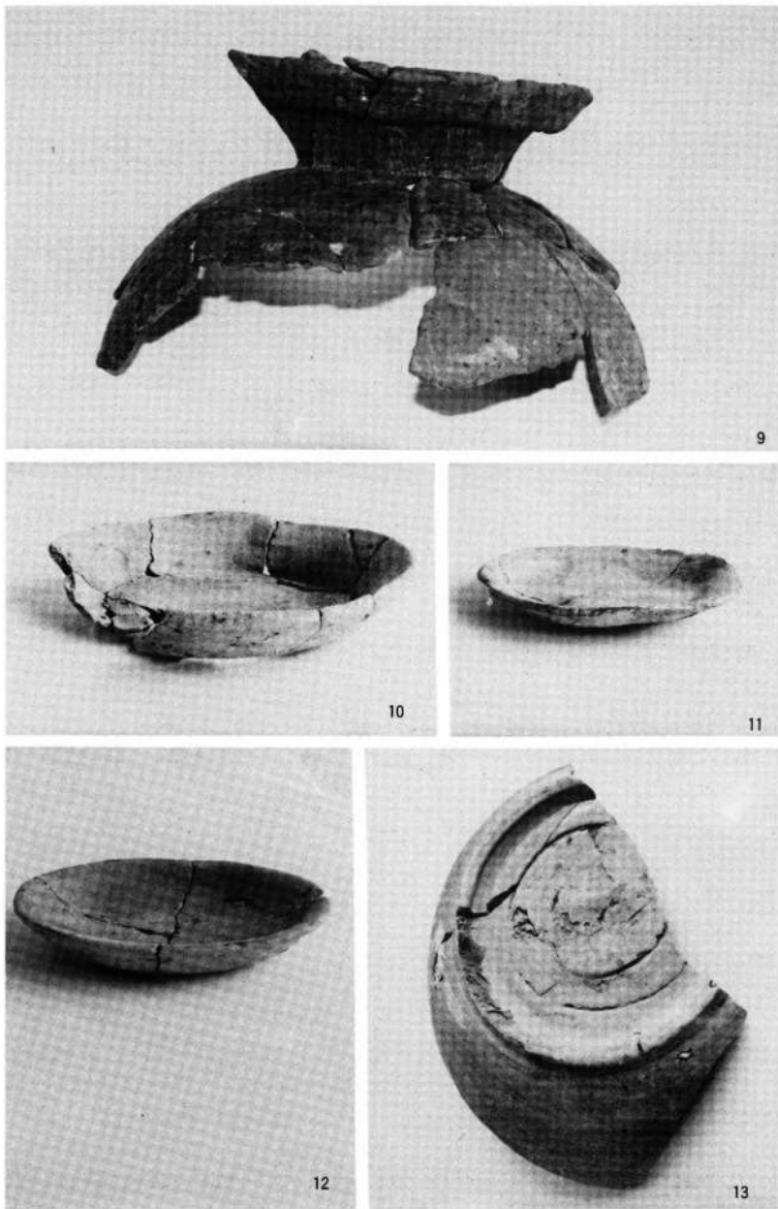
6 第4トレンチ全景（南から）



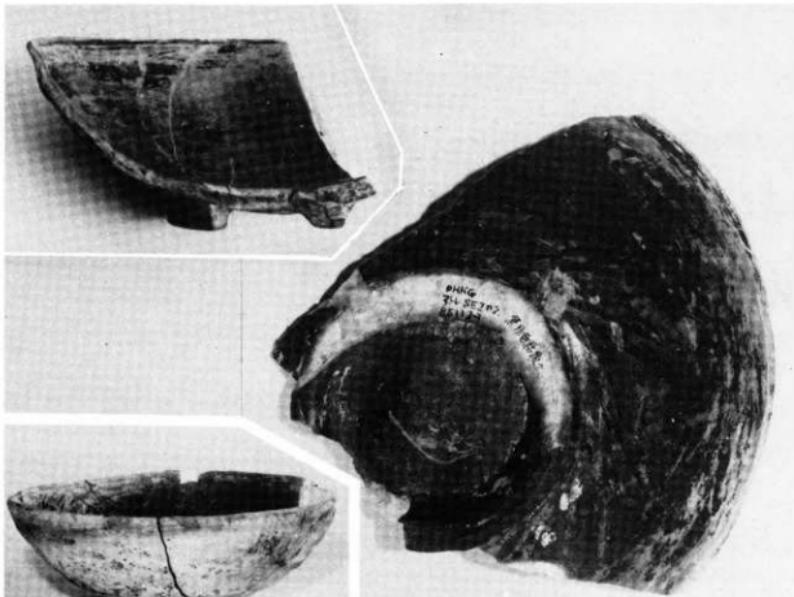
7. SDX001 弥生式土器出土状況



8. SDX001 弥生式土器出土状況



9 (SK001) 10.11 (SE301) 12 (SK301) 13 第2トレンチ北包含層

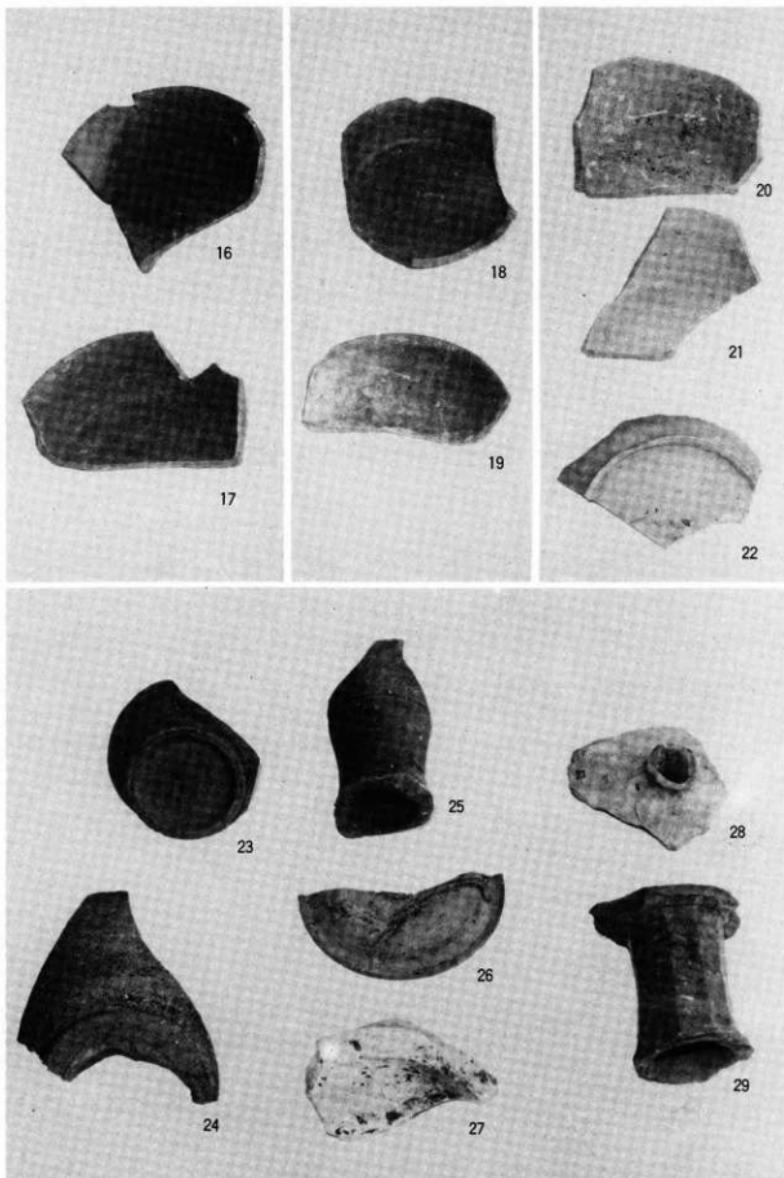


14

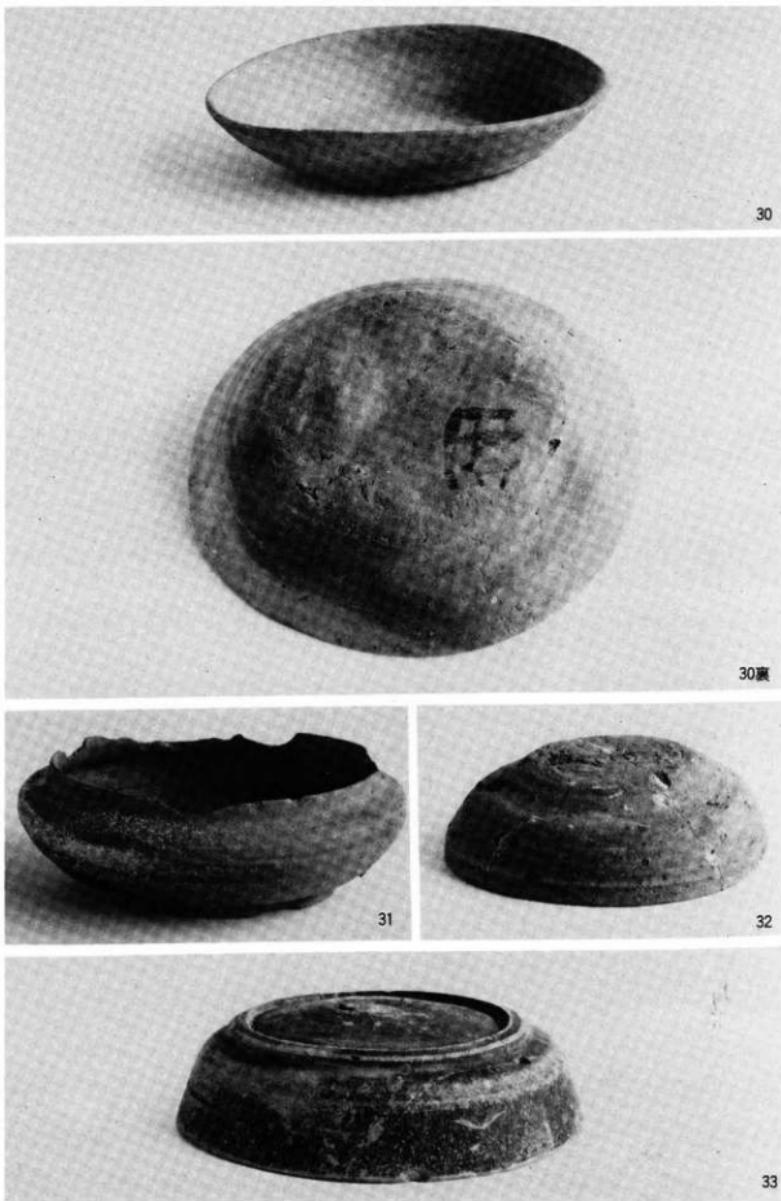


15

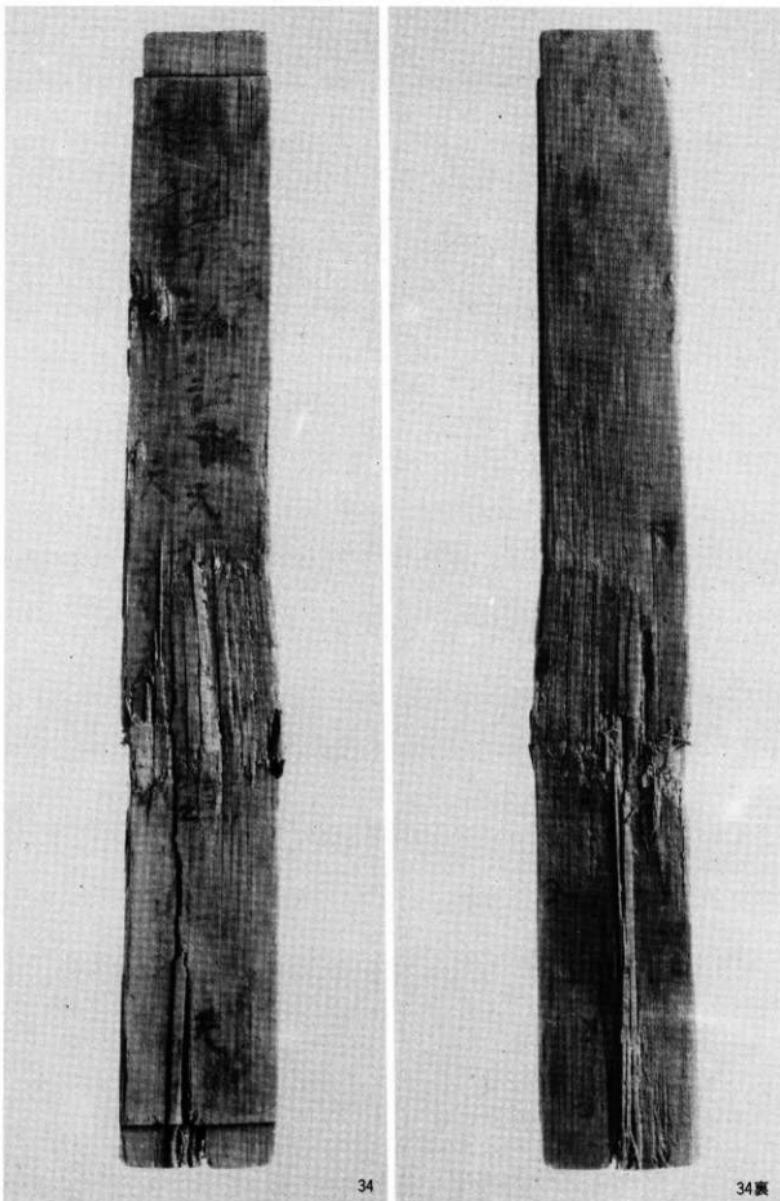
14·15 (SE 302)



16~29 (S E 2 0 1)



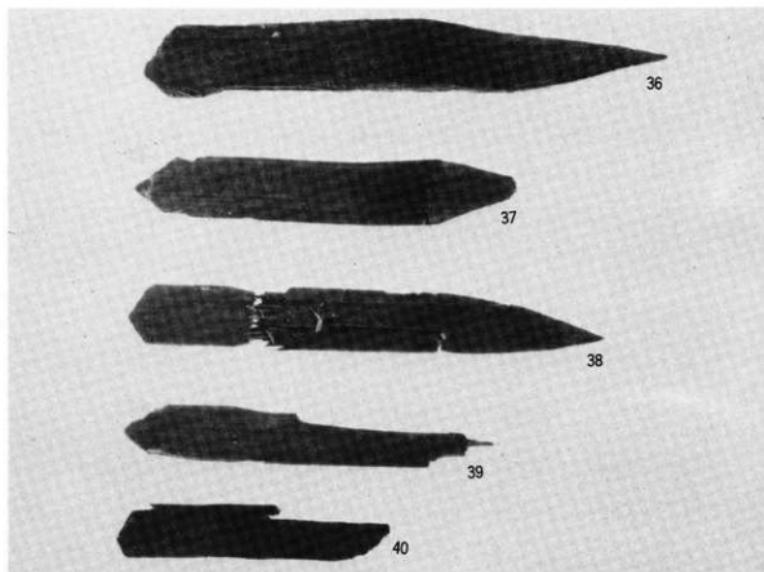
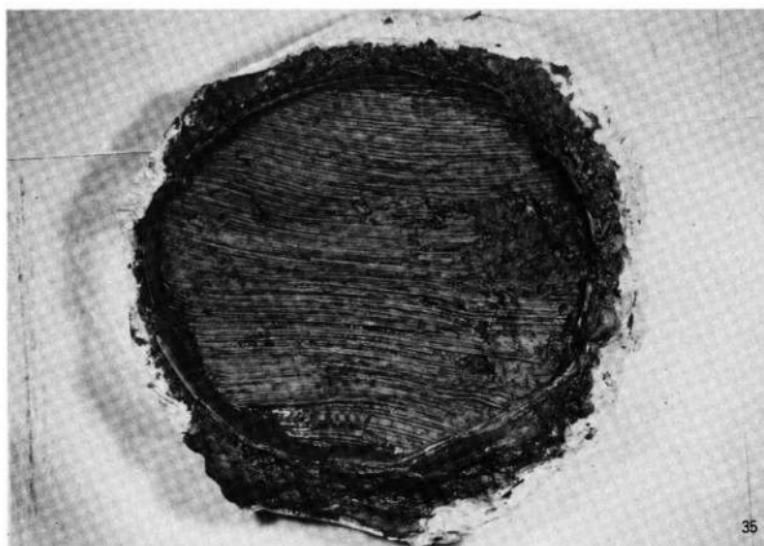
30~33 (S D 2 0 1)



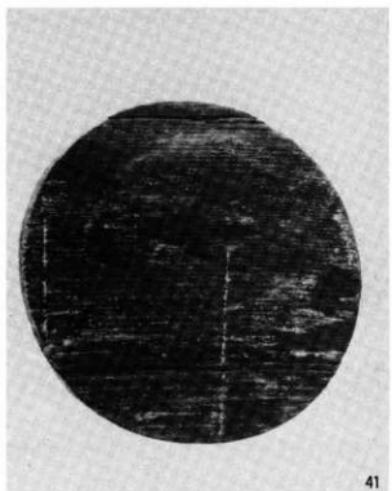
34

34裏

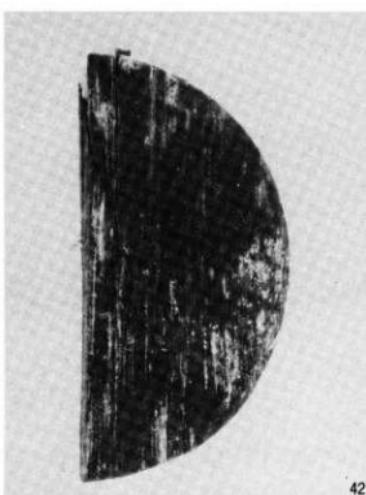
34 (S E 2 0 1)



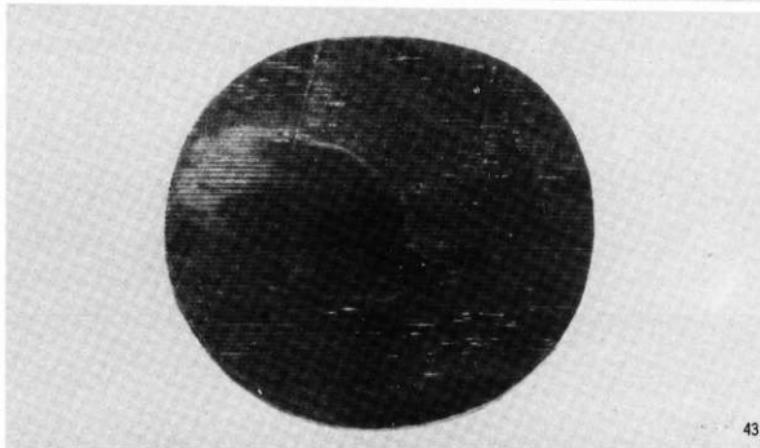
35~40 (S E 2 0 1)



41



42

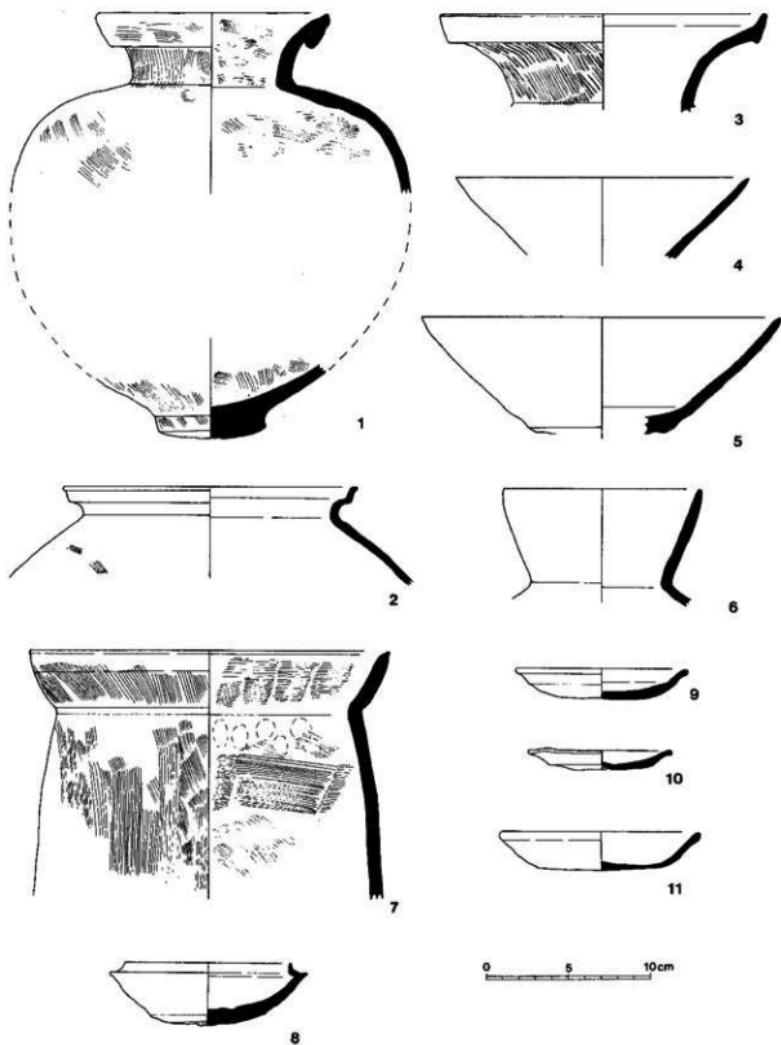


43

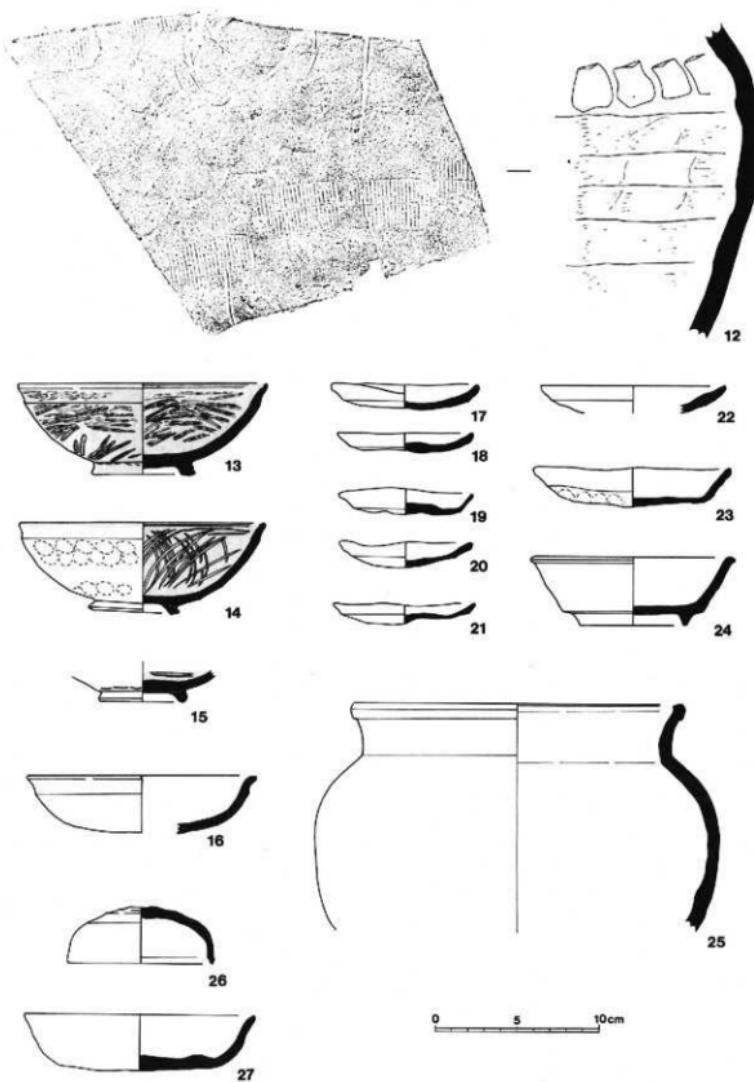


44

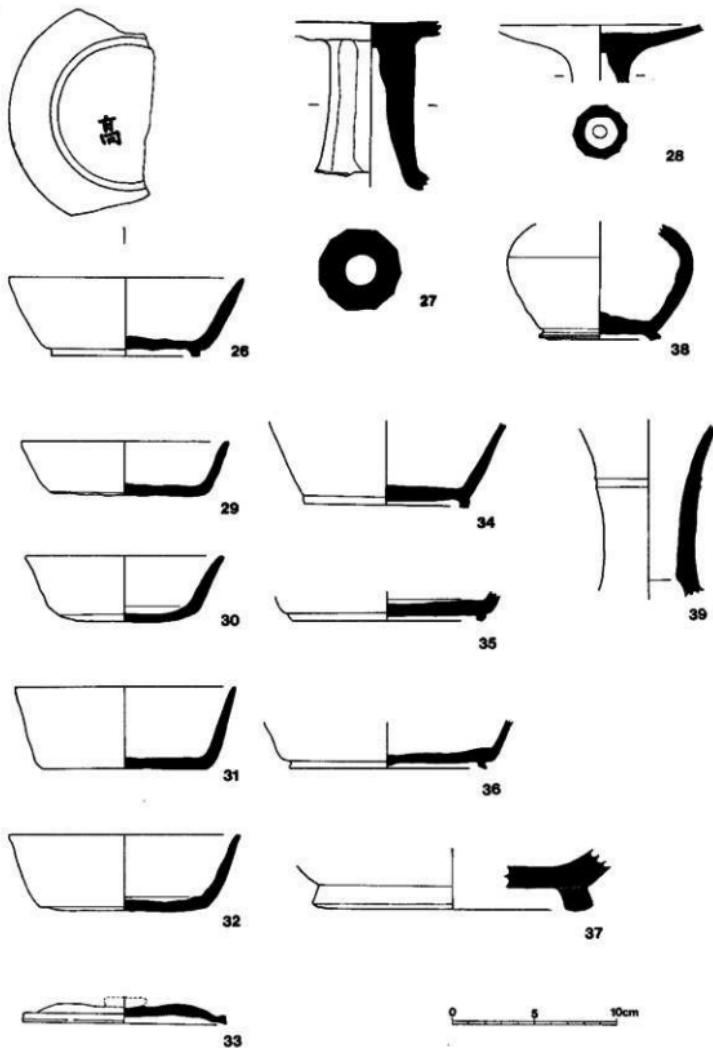
41-43 (SE 303) 44 (SD 201)



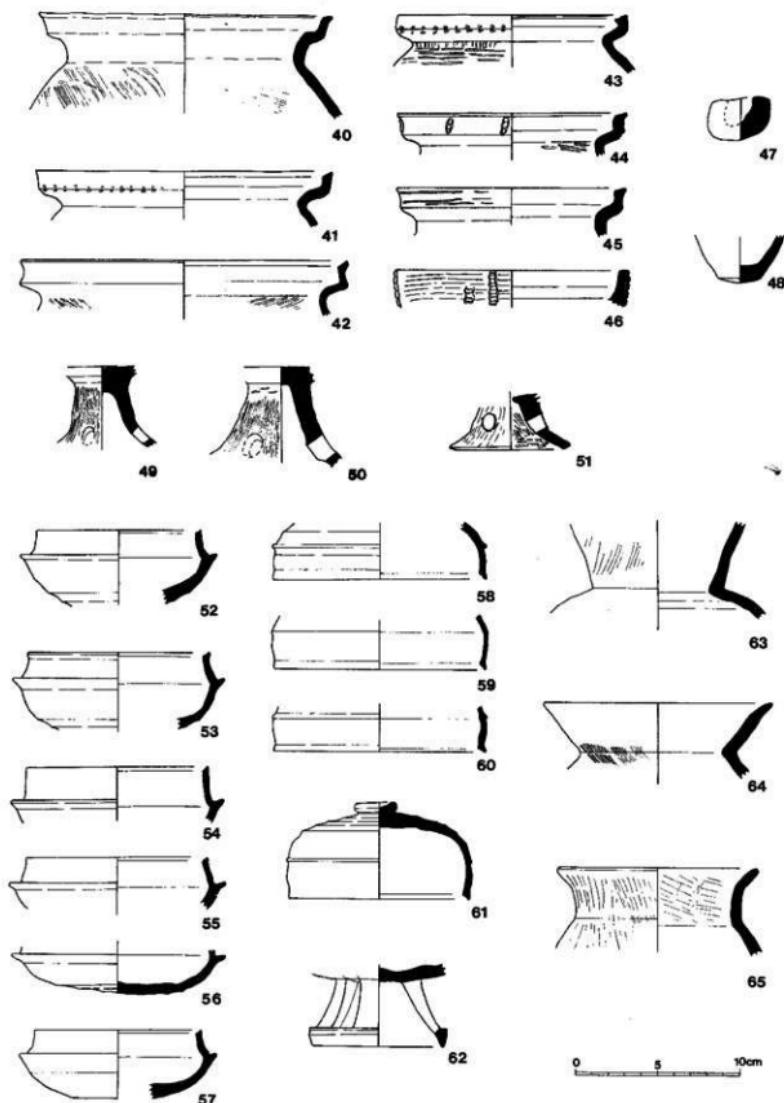
1~6 (SK 001) 7~8 (第1トレンチ西包含層) 9 (SK 301) 10·11 (SE 301)



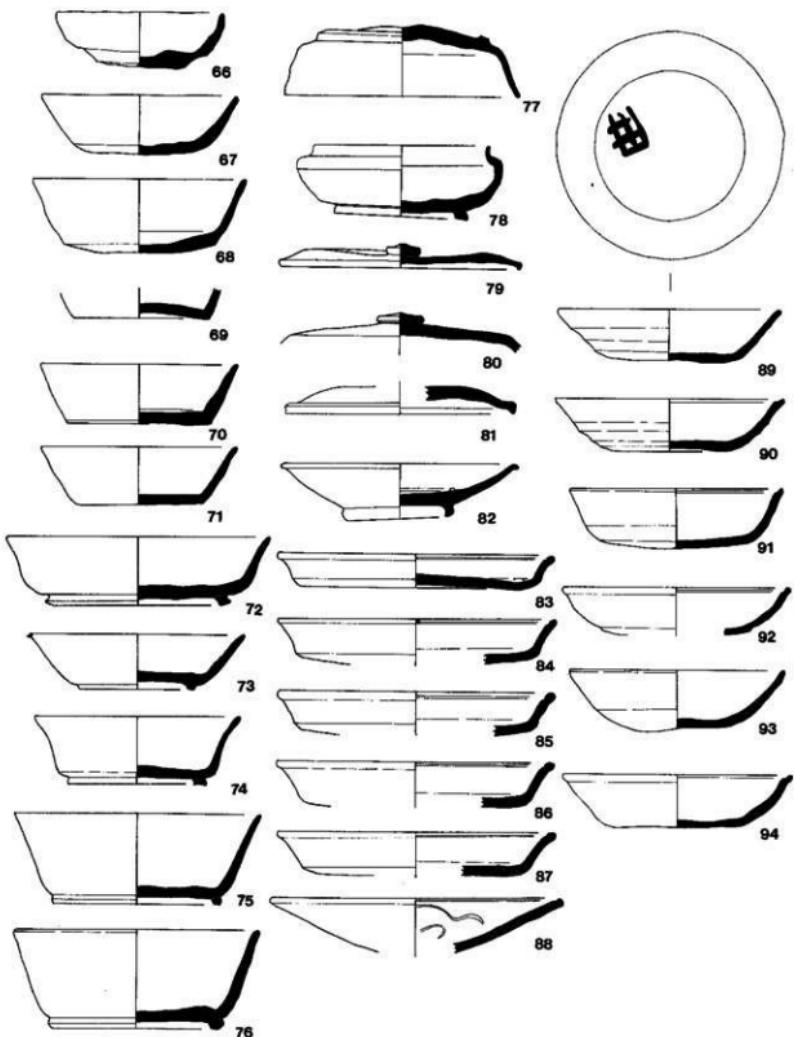
12 (SE 301) 13~16 (SE 302) 17~24 (SE 303) 25~26 (第3トレンチ包含層) 27 (pit内)



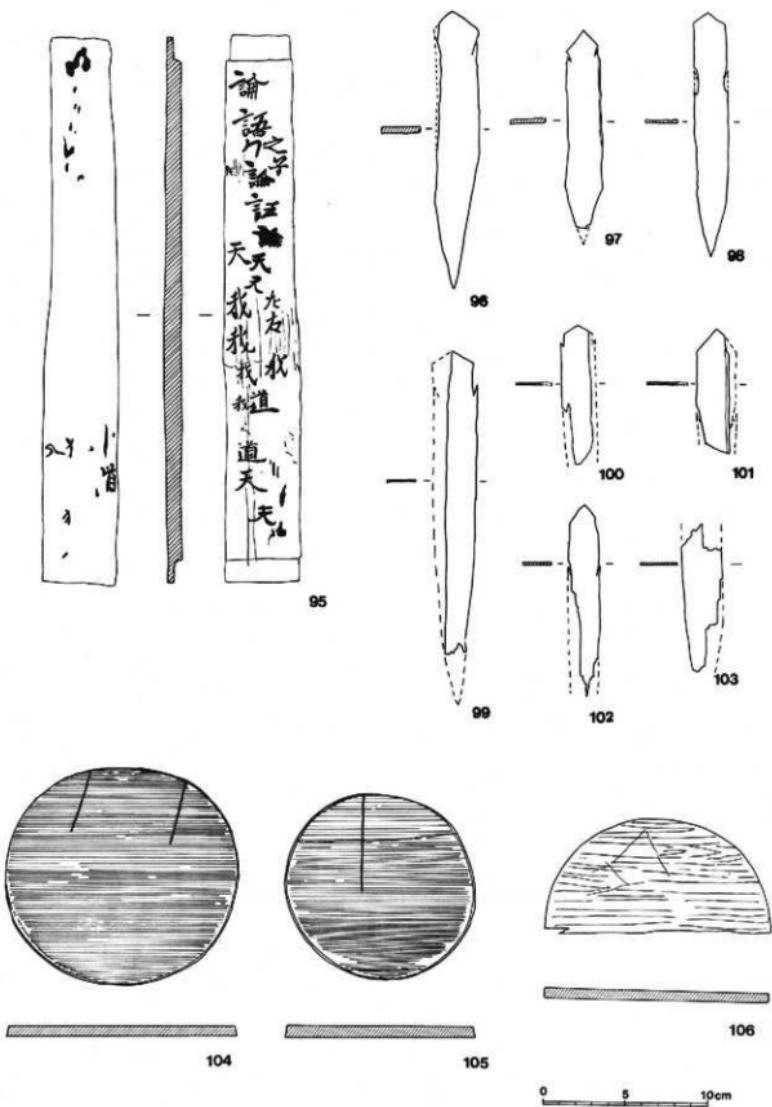
26 (第2トレンチ北端包含層) 29~39 (SE 201)



40~65 (S D 2 0 1)



66~94 (S D 2 0 1)



95~103 (SE 201) 104~106 (SE 303)

IV. 近江八幡市柿ノ町遺跡

1. はじめに

本報告は、昭和60年度県営は場整備事業（桐原馬淵Ⅱ期地区第10号分水管網敷設）に伴う近江八幡市柿ノ町遺跡の発掘調査によるものである。

柿ノ町遺跡は、柿木原遺跡の西に位置し、遺跡の西南部には、中世の馬淵城跡が推定されている。又、須恵器・土師器等の散布をみると、ここに県営は場整備事業が実施されるにあたって、事前に発掘調査を行い遺構の保護策を講じることにした。

調査は滋賀県教育委員会が同農林部から依頼と経費（2,220,000円）の再配当をうけ、財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。

発掘調査にかかる体制は次のとおりである。

調査主体 滋賀県教育委員会

調査機関 財団法人滋賀県文化財保護協会

調査指導 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課 技師 萩野泰樹

財団法人滋賀県文化財保護協会埋蔵文化財調査係 係長 大橋信弥

調査担当 同上 技師 仲川 靖

調査期間 昭和60年10月1日～昭和61年3月31日

調査にあたっては、滋賀県農林部耕地耕作課、同八日市県事務所土地改良第二課、近江八幡市西部土地改良設課、同市馬淵町地区、同土地改良区の方々に多くの協力を仰いだ。又、調査においては、勤学院・田中堂遺跡のメンバーに作業をお願いした。

なお、本報告の執筆・編集には仲川があたった。

2. 位置と環境

柿ノ町遺跡は、滋賀県近江八幡市馬淵町・千僧供町・上田町地先に所在する。遺跡は、東海道新幹線、国道8号線、白鳥川、市道近江八幡一戸野線に囲まれる地点で、標高は、93.0～95.0m前後を測る。

周辺の遺跡では、市道をはさんで、白鳳時代の創建とされる上田庵寺と、鎌倉時代から室町時代の集落跡である柿木原遺跡・半田遺跡・歳ノ町遺跡・上田氏館跡等がある。白鳥川をはさんで対岸には、同じく中世の出城が推定されている馬淵城跡がある。又、国道より以南は、供養塚古墳・住蓮坊古墳を始めとする千僧供遺跡群が広がる。

柿ノ町遺跡、そのものは、昭和56年度のは場整備事業に伴う試掘調査で一部の地区は調査されているが、遺跡台帳には、中世の土師器片等の散布地とあるだけで、具体的な遺構は検出されていない。ただし、中世において東寺の管轄からなる馬淵庄の範囲には入るため注意する必要がある。

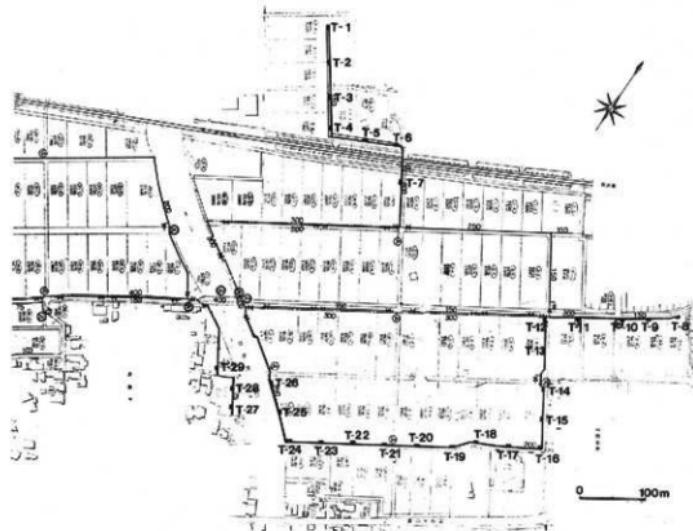
3. 調査経過（第1図・第2図）

本年度の調査地点は、近江八幡西部地区桐原・馬淵2期工区第10号分水管網配置計画箇所で、農道の路肩下に埋設するパイプラインにおいて、幅1m、深さ70cmの範囲で、遺構の有無を調べた。

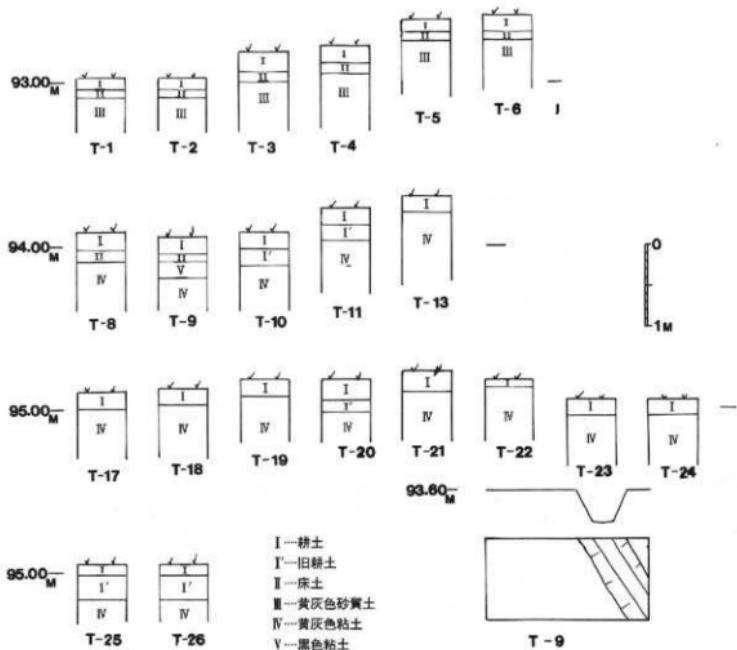
調査は、全長約2kmのパイプ埋設箇所に、50mピッチで、幅1m、長さ2mの試掘トレンチを入れ、土層観察を行いつつ、遺構の有無、遺跡の範囲を調べた。

試掘トレンチは、新幹線より北側で、6箇所、南側の白鳥川と市道の間で13箇所、白鳥川西岸で2箇所設けた。調査の結果、新幹線より北側では、耕土直下（表土面より15cm下）で、黒色粘性砂質土と黄灰色粘質土が混ざって、黒色粘性砂質土がPit状に堆積しているため、全線にわたって拡張したが、遺構にはならず、両者の土が混ざった底土の客土と判明した。地山のベースは、黄灰色砂質土で、遺物等も存在しなかった。新幹線より南側のT-1からT-26は、ほとんど、は場整備の際に削平・擾乱されており、わずかに、T-9で、耕土下30cmで黒色粘質土の堆積を認め、さらに50cm下の青灰色粘土層のベースを東西に切る幅60cm、深さ30cmの溝を検出した以外は、遺構は存在し得なかった。T-9では、遺物等が検出しなかったので、溝の時期は不明である。白鳥川西岸の塙地では、耕土下50cmで同様の黒色粘質土層の堆積を認め、さらに50cm下の灰色砂層のベースまで掘り下げたが、遺構は確認し得なかった。T-9とも、いずれもパイプ埋設高の地表下70cmより遺構面が下にあるため、土層観察にとどめ拡張はしなかった。

以上をもって、遺構面等にさしかかる箇所は見あたらなかったため、試掘調査、ならびにトレンチ調査による土層観察と写真・実測による記録化をして、調査を終了した。



第1図 トレンチ配置図



第2図 試掘トレンチ土層観察図

4. まとめ

調査の結果、上田廃寺、柿木原遺跡寄りで遺構を確認したが、同様の遺構が、柿木原遺跡でも検出しているため、T-9で検出した遺構は、柿木原遺跡に連続するもので、加えて、その西限にあたるものとみられる。

又、白鳥川西岸では、明らかに堆積土層が異なり、現在の馬淵町の集落内に遺跡が存在し得ると思われる。今回の調査地点は馬淵城の推定地の東にあたるが、それらしき遺構・遺物等は検出されなかった。今後の周辺調査に期待されるところである。

V. 犬上郡甲良町下之郷遺跡

1. はじめに

本章は、甲良南部地区下之郷丁区の県営ほ場整備事業に伴う発掘調査の成果である。調査は、県農林部耕地建設課より予算（3,885,000円）の再配分を受け実施した。

調査体制は以下のとおりである。

調査主体 滋賀県教育委員会

調査機関 財團法人滋賀県文化財保護協会

主任調査員 宮崎幹也（財團法人滋賀県文化財保護協会 堆蔵文化財課 調査三係 技師）

仲川 靖（ タクミ トシル ）

調査員 和田光生（仏教大学大学院）

調査補助員 夏原善治・西村利通・小森伊知郎・星野 翁（滋賀大学）、梶本真理・手塚貴子・藤田亜希（関西外国语大学）、三野小雪・能勢幸了・中西賀津子・正木美穂・赤江智子・林 美和・斎藤恵子（京都文教短期大学）、高橋素子（京都産業大学）、若谷千代子（仏教大学）

なお、前年度より継続される試掘調査については、葛野泰樹（滋賀県教育委員会）、田中勝弘・大橋信弥（財團法人滋賀県文化財保護協会）の諸氏の協力を得た。

調査にあたっては、甲良町教育委員会と甲良町下之郷の方々の御助力をいただきいた。ここに記して謝意を表します。

現地調査における図面実測・写真撮影は調査員・調査補助員があたり、遺物写真の撮影については寿福 滋氏の手を煩わした。

なお、本書は宮崎幹也が執筆し、編集した。

2. 位置と環境

下之郷遺跡は、行政上犬上郡甲良町下之郷地先に所在する。また、犬上川の南西約2.0kmに位置し、犬上川の形成する扇状地の南裾部の標高110.0m～114.0m附近に立地する。

当遺跡の周辺には、甲良町尼子遺跡（古墳）、尼子南遺跡（奈良時代集落跡）、法養寺遺跡（古墳～平安時代集落跡）、長畠遺跡（奈良・平安時代集落跡）、豊郷町雨降野遺跡（飛鳥～奈良時代集落跡）などの周知の遺跡が隣接する遺跡の密集地帯である。

犬上川左岸の扇状地形には、条理地割の残らない開発後進地帯が認められており、雨降野遺跡、尼子南遺跡、法養寺遺跡（一部）とともに、下之郷遺跡も方格地割未施行地帯に含まれる。

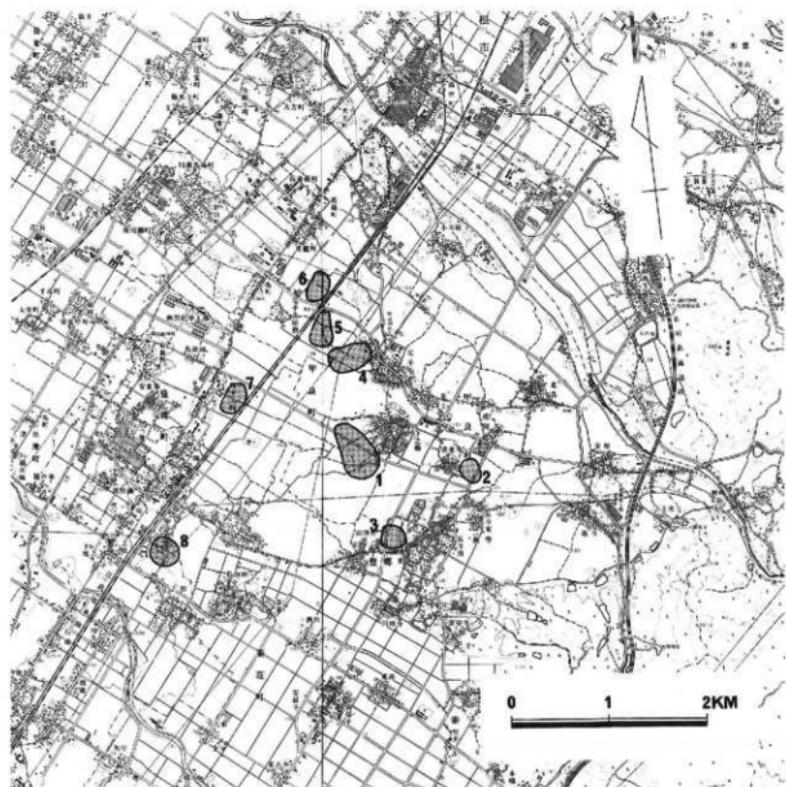
下之郷遺跡は從来「古墳」として周知されてきたが、周辺に散在する遺物には、飛鳥、奈良、平安時代のものが多く認められ、数時期にわたる集落跡の存在が推察され始めている。

3. 調査の経過

調査の対象となったのは、ほ場整備事業予定地のうち排水路箇所と切土箇所であり、それぞれ遺跡の範囲、性格を捉えるための試掘調査を先行して実施した。

試掘調査は、4月と10月の2回に分けて実施し、その後、発掘調査を実施したが、対象地域の耕作物の都合上、南西部を夏季、北部を秋・冬季に実施した。

発掘調査の方法は、試掘調査によっては場整備の影響を受けると判断された箇所において、表土層および堆積土層をバックホウで掘削した後、人力によって遺構の精査・掘削をおこなった。



第1図 下之郷遺跡位置図

- | | | | | |
|----------|-----------|----------|----------|---------|
| 1. 下之郷遺跡 | 2. 法蓋寺遺跡 | 3. 雨降野遺跡 | 4. 尼子南遺跡 | 5. 尼子遺跡 |
| 6. 長畠遺跡 | 7. 四十九院遺跡 | 8. 古戸遺跡 | | |

4. 調査の結果

(1) 遺構

試掘調査の後、発掘調査をおこなった箇所は計6ヶ所（第1トレンチ～第6トレンチ）にわたり、総計3,100m²を対象面積として実施した。

発掘により検出した遺構は、溝状遺構・竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土旗等であり、各トレンチの検出遺構を次に示す。

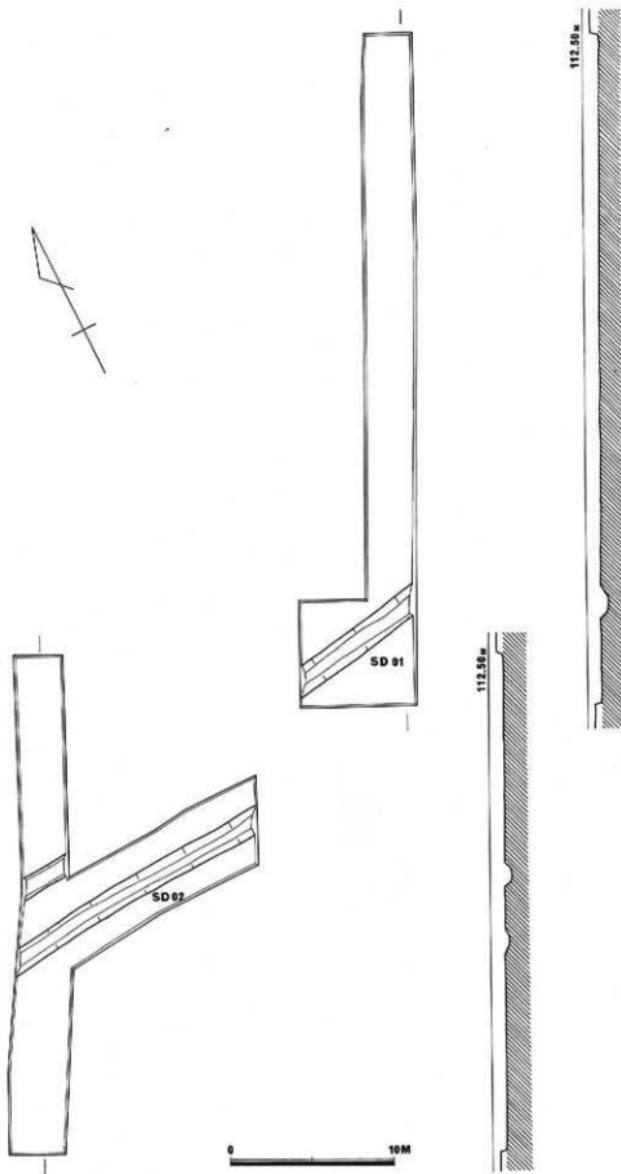
第1・2トレンチ

対象地域の南西部に設定した第1・2トレンチからは、平行して直進する2条の溝（SD-01・SD-02）を検出した。

SD-01は幅160cm、深さ40cm、SD-02は幅140cm、深さ25cmを測る大きさで、いずれもN-3°-Wに基軸



第2図 下之郷遺跡 トレンチ配置図



第3図 下之郷遺跡 第1、第2トレンチ遺構

をもつ。

第3トレンチ

第1・2トレンチの北西約40mの位置にあたり、排水路箇所と切土箇所の両方を含めた範囲に設定した。

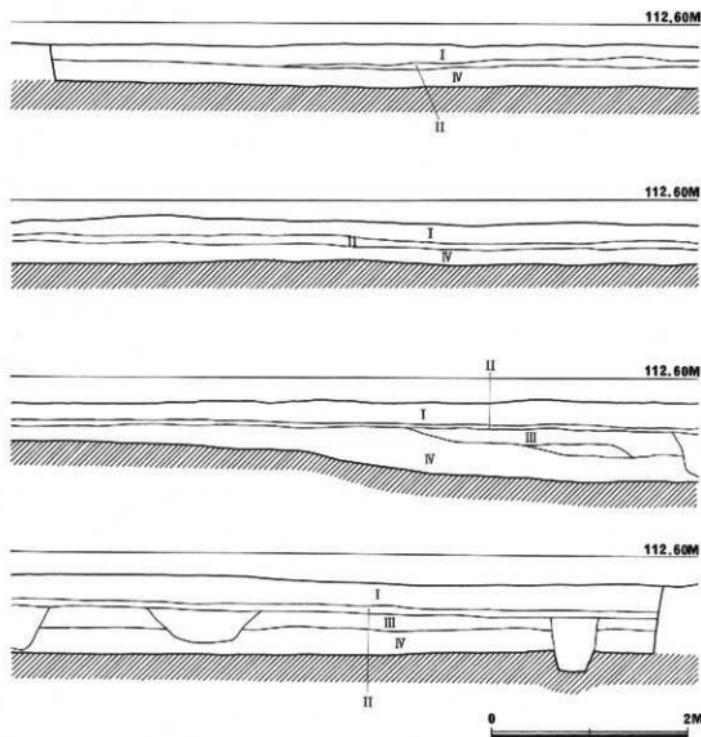
第3トレンチの基本土層は、第Ⅰ層・耕作土層、第Ⅱ層・黄色土層（床土）、第Ⅲ層・暗茶灰色砂質土層、第Ⅳ層・黄灰色土層の4層に大別され、地山（黄褐色砂礫層）に至る。

各層の堆積は第4図に示すとおりであり、第Ⅰ層・約15cm、第Ⅱ層・約6cm、第Ⅲ層・約4-20cm、第Ⅳ層・約25cmを測る。このうち、第Ⅲ層は第3トレンチの東半分にのみ認められる土層である。

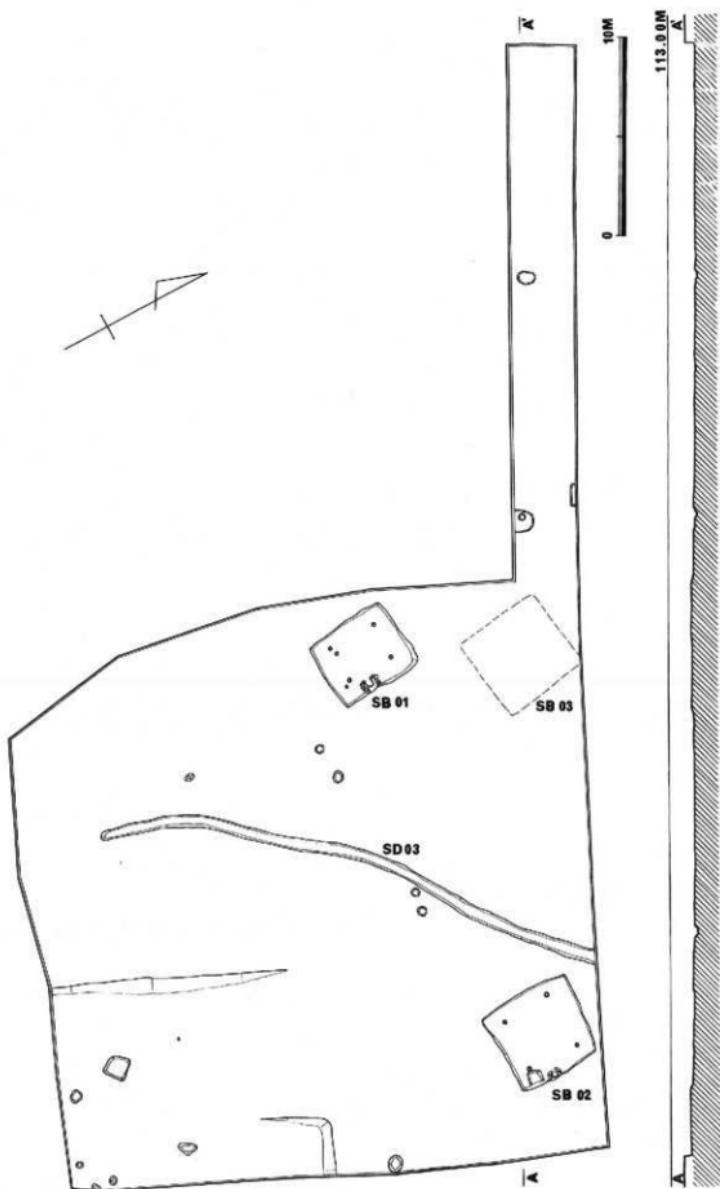
断面図には、第Ⅲ層の上面から掘り込まれる遺構が認められるが、これらの遺構内からは、土師器（小皿）と灰釉陶器（山茶椀）が出土しており、12世紀を上限とする時期の遺構面が第Ⅲ層上面と判断される。

第3トレンチからは、溝状遺構（S D-03）と堅穴住居跡（S B-01・02・03）を検出した。

S D-03は、幅約45-60cm、深さ約20cmを測る溝状遺構である。同遺構は北東から南西へまっすぐ伸びたのち、南端部で屈折して消失する。遺構内には、淡灰褐色と淡茶褐色の荒砂層が堆積しており、若干量の須恵器片と土



第4図 下之郷遺跡 第3トレンチ土層図



第5図 下之郷遺跡 第3トレンチ遺構図

師器片を包含する。

S B -01は、第3トレンチのほぼ中央部で検出した方形の堅穴住跡である。

この堅穴住跡の規模は、南北4m 54cm、東西3m 58cmを測るもので、南北に長軸をもつ平面長方形を呈している。

遺構の遺存度は深く約30cmを残しており、遺構検出時において、カマドの一部が露出しているに過ぎなかった。

床面は黄褐色（一部灰褐色）砂疊層の地山面をたたきしめた床面である。

カマドは、東壁の中央から少し右側に設置されている。

構造は上部のみを欠損しており、床および張り出し部を残す。

カマド壁部は、平面八字状を呈するもので、その外側に10~20cm大の礫石を組み上げるのを特徴とする。

カマドの規模は、幅104cm、奥行72cm、遺存高25cmを測る。

カマド本体の素材には黄色粘土が使用されている。

カマドの内部には、支柱石の施設が無く、土師器の壺が倒立した状態で置かれていた。

この壺は、完形品を思わせる状態で

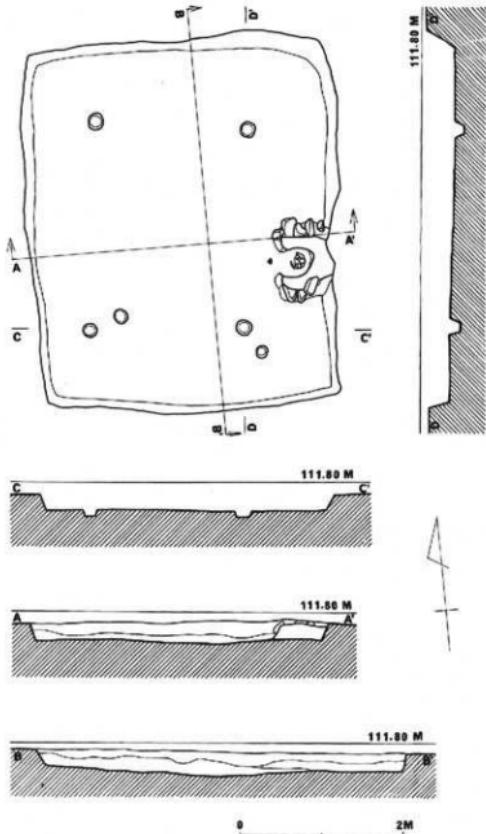
出土したが、カマドの奥壁に面する器壺半分が欠損しており、壺本来の使用状態で投棄されたものではない。

壺の用途としては、支柱石の代用とも考えられるが、カマドの外、張り出し部から約52cmの位置に支柱石が置かれている点から、代用する要因が求められない。また、支柱石もカマドの外にあることから、本来の用途を果たしていないことが明らかである。

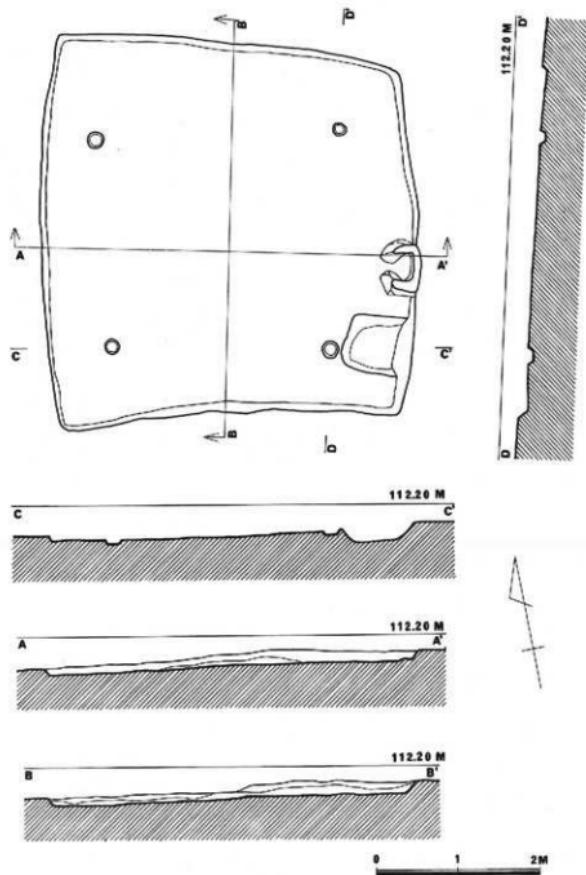
カマドは奥壁をほぼ垂直に立ち上がりさせており、煙道部を残さないため、この種の施設が欠損しているカマド上部に付随すると考えられる。

柱穴は合計6本あり、そのうちの4本が四柱穴を構成する。四柱穴の平面は円形を呈しており、直径18~20cmを測る。

住跡の内部からは、須恵器・土師器等の遺物が出土した。



第6図 下之郷遺跡 S B -01遺構図



第7図 下之郷遺跡 S B-02遺構図

れる。遺構の規模は、南北70cm、東西90cm、深さ18cmを測る、方形を呈する。断面はU字形である。

住居の壁は、わずかな傾斜をもって立ち上り、堅周溝は認められない。

柱穴は合計4本あり、四柱穴を示す。柱穴の直径は13~20cmを測る。

住居跡の内部からの出土遺物は、極めて少ない。

S B-03は、S B-01の北側に隣接する堅穴住居跡である。

この堅穴住居跡は、南北9m20cm、東西9m5cmを測る規模のはば正方形を呈する遺構であるが、遺構の遺存度が極めて低く、約0~2cmを呈すもので、東壁の中央部にカマドの痕跡をとどめる程度の残りの悪い遺構である。

堅穴住居跡3棟(S B-01・02・03)から検出したカマドのうち、S B-03に伴うカマドは全壊しており、基

S B-02は、第3トレーンの最東端で検出した方形の堅穴住居跡である。

この堅穴住居跡の規模は、南北4m26cm、東西4m45cmを測るもので、平面正方形に近い。

遺構の遺存度は低く深さ約5~10cmを残し、遺構検出時において、カマドおよび床面の一部が露出していた。

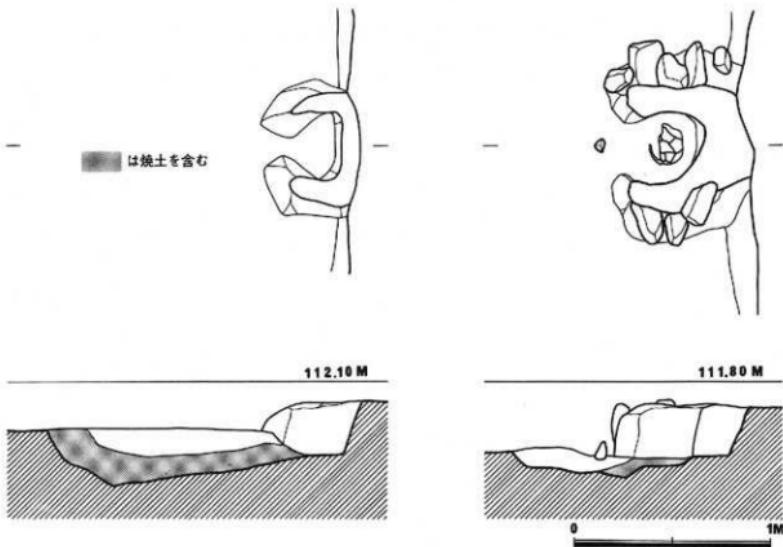
床面は、黄褐色(一部灰褐色)砂疊層の地山面をたたきした直床である。

カマドは東壁の中央から少し右側に設置されており、平面コの字状を呈する。

カマドの規模は、幅67cm、奥行48cm、遺存高9cmを測るもので、黄色粘土を使用している。

S B-02のカマドには、S B-01のカマドに見られるような礫石による外装は認められない。

カマドの右側には、貯蔵穴と思われる遺構が認めら



第8図 下之郷遺跡 カマド遺構図

底部の焼土塊を残すだけであったが、残りの2つのカマドについては比較的の残りが良く、調査終了時にカマド基底部のたちわりを行ない、精査した。

カマドは、その構造内部を住居跡床面よりやや低く掘り込んだものであるが、カマド前面の床面にも焼土塊を含む堆積が確認された。

S B-01においては、カマドの前面50cmから深さ約10cmの掘り込みがなされており、その内部を上・下2層の土層堆積が認められる。上層は黄褐色混礫土層であり、地山（黄褐色砂礫層）と酷似する。下層は暗灰褐色土層であり、焼土塊の小片を多量に含む。

また、S B-02においては、カマドの前面108cmから深さ約30cmの掘り込みがなされており、S B-01のカマドと同様に上・下2層の土層堆積が認められる。この際、下層の焼土塊を含んだ土は住居跡の中央付近まで続くことが明らかになった。

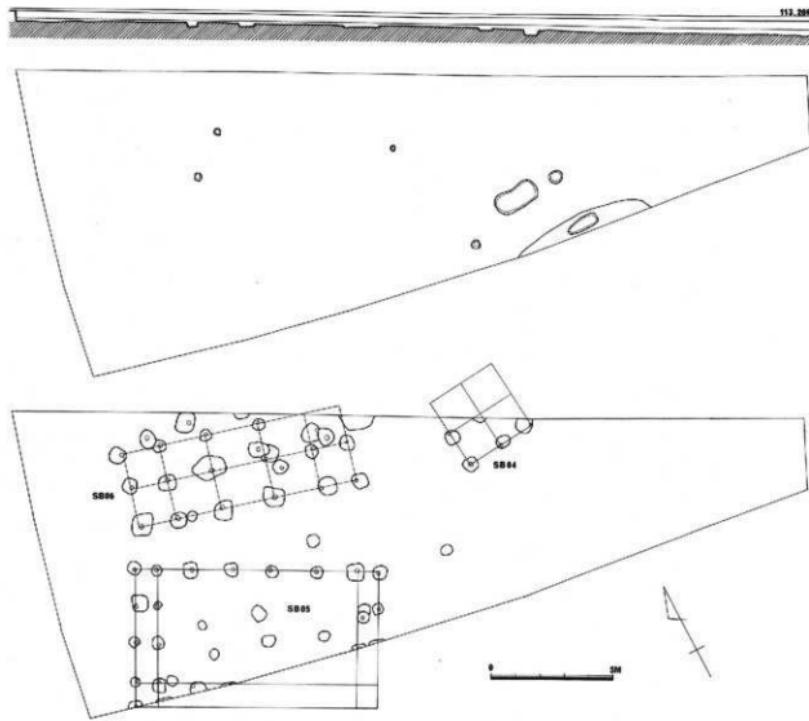
以上の2つのカマドに見られる前面下方の構造は、再度にわたるカマド内の焼土・炭の清掃に伴うものとも考えられるが、S B-02のカマドに見られるような大規模なものについては、カマドの再構築時の所産か、もしくは、カマド設置時の基礎工事とも考えられる。

第4トレチ

第3トレチの北方約120mに位置する第4トレチは、南北約13m、東西約32mを測るほぼ三角形の切土箇所にある。

第4トレチからは、上・下2面の遺構を検出した。

上層の遺構は、暗茶灰色混礫粘質土を基盤とし、土塙と柱穴を伴う。遺構内からは、灰釉陶器（山茶碗）が出土した。



第9図 下之郷遺跡 第4トレンチ上層図・遺構図

下層の遺構は、黄褐色砂礫層を地山とする。同遺構面上では3棟の掘立柱建物跡を検出した。

SB-04は、第4トレンチの北壁中央部よりやや東寄りで検出した総柱建物跡である。桁行2間(3.0m)、梁行2間(3.0m)を測る。掘形は方形で直径45~65cm、柱穴は直径15~20cmを測る。

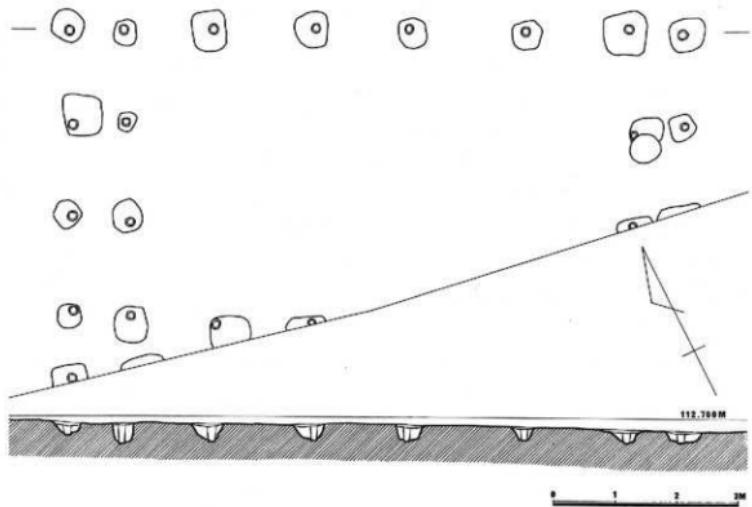
SB-05は、SB-04の南西6mに位置する桁行5間、梁行3間の掘立柱建物跡で、西・南・東の3面に庇を伴う。桁行の寸法は、145cm・175cm・140cm・175cm・160cmを測り、梁行の寸法は、140cm・165cm・150cmを測る。庇幅は、南面が95cm、東・西面が90cmを測る。掘形は方形で直径30~60cm、柱穴は直径15cm前後を測る。

SB-06は、SB-05の北隣に位置するが、SB-05と基軸を異にする掘立柱建物跡である。桁行5間、梁行2間を測る総柱建物である。桁行の寸法は、150cm・190cm・220cm・190cm・150cmを測り、梁行の寸法は、150cm・155cmを測る。掘形は方形で直径40~75cm、柱穴は直径15~20cmを測る。

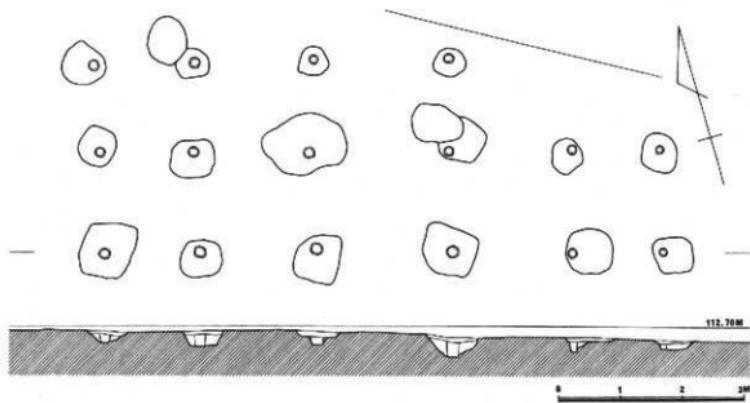
第5トレンチ

調査範囲の最北部の排水路箇所に第5トレンチと第6トレンチを設定し、調査した。

このうち西寄りに設けた第5トレンチからは、遺物の出土を見たものの、遺構の検出は無かった。



第10図 下之郷遺跡 SB-05遺構図



第11図 下之郷遺跡 SB-06遺構図

第6トレンチ

第5トレンチの東側にあたる。第5トレンチの土層堆積が砂疊層で構成されるのに対し、第6トレンチでは安定した土の堆積が認められ、黄褐色土層（一部砂疊層）を地山とする。

トレンチ内からは、3棟の掘立柱建物を検出した。

SB-07は、第6トレンチの最西部に位置しており、桁行2間（3.0m）、梁行2間（3.0m）を測る総柱建物跡である。

掘形は方形で直径40~45cmを測り、柱穴は15~18cmを測る。遺構は遺存度が低く、掘形が消失する箇所も認められる。

SB-08は、第6トレンチの中央部に位置しており、桁行5間（7.7m）、梁行2間以上を測る掘立柱建物跡である。

掘形の切合関係からSB-09より古い時期の遺構と考えられるが、遺存度が低く詳細は不明である。

掘形は方形で直径45~55cmを測り、柱穴は18cm前後を測る。

SB-09は、第6トレンチの最東部に位置しており、桁行2間、梁行2間を測る総柱建物跡である。掘形は方形で直径45~50cmを測り、柱穴は10cmを測る。

以上6トレンチの遺構は、堅穴住居跡3棟と掘立柱建物跡6棟を中心とする構成を示す。

堅穴住居跡は、平面形が正方形ないし長方形の四辺形を呈するもので、やや傾斜した壁面を持ち、壁溝を持たない。これは、遺構面を形成する黄褐色砂疊層が非常に水はけの良い土質によるものと考えられる。柱穴は、いずれも直径の小さいもので、しかも、床面をあまり掘らない四柱穴である。

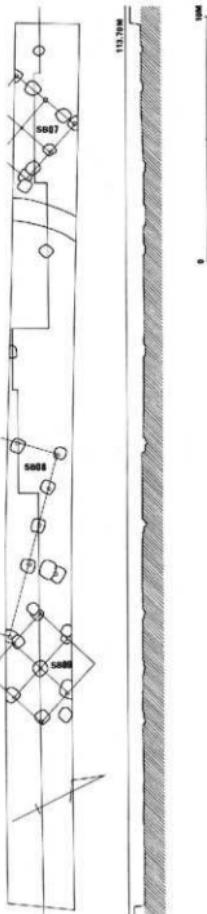
堅穴住居跡の付属施設としては、カマドと貯蔵穴が認められる。このうちカマドは、いずれも東壁の中央部を意識して設けられており、消失している上部構造上に烟道を持つと考えられる。また、SB-01のカマドについては壁体外間に礫石による補強構造が見られ、特異な形態を示す。

掘立柱建物跡6棟は、長形の建物（SB-05・06・08）と正形の建物（SB-04・07・09）に区分される。前者は、いずれも東西棟であり、総柱建物であるSB-06、三面庇を持つ建物SB-05、一部を南壁に接するSB-08の順に主軸を東側に大きく振る。また後者は、いずれも桁行2間、梁行2間の総柱建物であり、前者三棟とも異なる主軸を示す。

下之郷遺跡で今回検出した掘立柱建物跡の特徴は、柱穴の直径（15~20cm）に対し、掘形の直径（30~75cm）が大きい点にある。

掘形は、いずれも方形の平面形を呈するが、底面は平坦な構造で示さず、掘形よりもさらに深い位置で柱穴が認められる。

また、掘立柱建物跡は堅穴住居跡に比して残りが浅く、掘形および柱穴の消失している箇所も幾つか認められ



第12図 下之郷遺跡
第6トレンチ遺構図

る。

(2) 遺物

今回の調査では、第1～6トレンチすべてから土師器、須恵器や灰釉陶器の出土をみた。これらのうち多くは破片であり、完形品は少ない。また、出土遺物の総量は整理用コンテナパットに4箱程度である。

出土遺物は6世紀前半から8世紀後半にかけてのものが中心であり、灰釉陶器（山茶椀）は上層遺構に伴うものである。

出土遺物のうち遺構に伴うものは少なく、堅穴住居跡（SB-01）を除き、大半は遺構面精査時に出土した遺物である。

堅穴住居跡出土遺物

SB-01から須恵器（1・5・6・8）と土師器（4・13・14・15）が出土した。また固化していない小片の遺物が多く出土している。

(1) は堅穴住居跡の埋土から出土した杯蓋である。口径10.9cm、器高4.5cmで、天井部は丸味を帯びる。天井部と口縁部との境界は不明瞭で、口縁端部をわずかに内傾させている。

(5) は堅穴住居跡の床面から出土した杯蓋である。口径9.9cm、器高1.9cmで、天井部のつまみを欠損している。かえりを持つ小形の杯蓋。

(6) は床面から出土した杯蓋である。口径15.3cm、器高3.6cmで、平坦な天井部に扁平なつまみを持つ。かえりを持つ大形の杯蓋で、須恵器3点のうちで最も新しい時期の遺物である。

(4) はカマドの内部に倒立した状態で置かれていた小形の壺である。口径14.1cm、器高14.9cmを測る。体部は球形を呈しており、最大径が口径よりわずかに大きい。体部外面の調整は、上半がハケ、下半が横方向のヘラ削りであり、体部内面上半にもハケ調整が認められる。

(13)～(15) は床面より出土した土師器である。

(13) は長胴壺の口縁部である。口径25.5cmを測る。斜上方に伸びる口縁部は外面をわずかに肥厚させる。口縁端部は面をもたず、沈線がめぐる。体部外面の調整は斜め方向のハケである。

(14・15) は鍋の口縁部と考えられる。(14) は口径23.4cm、(15) は口径21.0cmを測る。

(14) は口縁部への強いナデ調整により外面に棱をもつ。内面は弯曲しており、上端部を丸く終える。体部の調整は内外面ともにハケである。

(15) は頸部へのやや強いナデ調整により外面に棱をもつ。内面は弯曲しており、口縁端部に内傾する面をもつ。

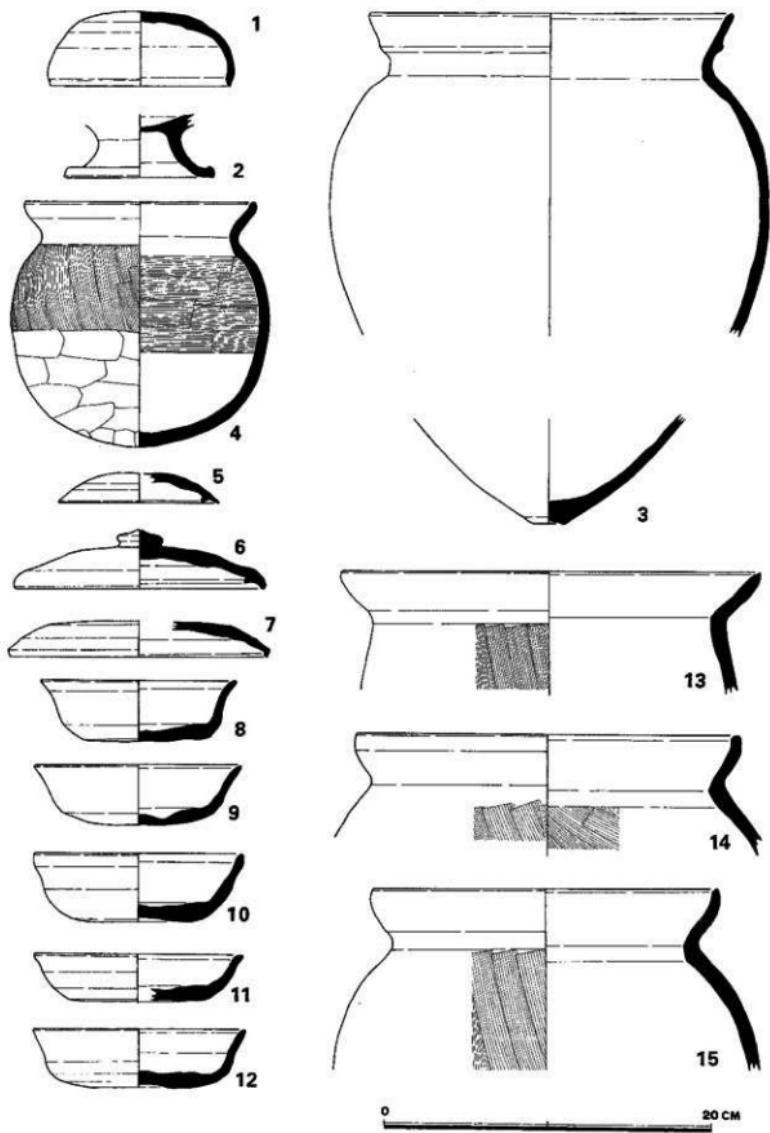
以上の8点を除く遺物は遺構面精査時に出土した遺物である。

(2) は須恵器の脚部で、上半が欠損しており、全体の器形が不明である。

(3) は土師器の甕で、口径21.8cm、復元高31.1cmを測る。口縁部外面に段をもつを特徴とする。

(7)・(9～12) は須恵器の杯で、高台を持たない所謂「杯Aタイプ」に属する。これらの遺物は、第4・6トレンチのSB-04～09付近で出土した遺物である。

掘立柱建物跡（SB-04～09）の柱穴および拊形からの出土遺物は細片が多く、年代を決定する資料となるものは無かった。



第13図 下之郷遺跡 遺物実測図

5. まとめ

今回の調査では、これまで古墳を中心とする遺跡と考えられていた下之郷遺跡が、古墳時代中期から平安時代に至る時期の複合集落跡であることが明らかになった。

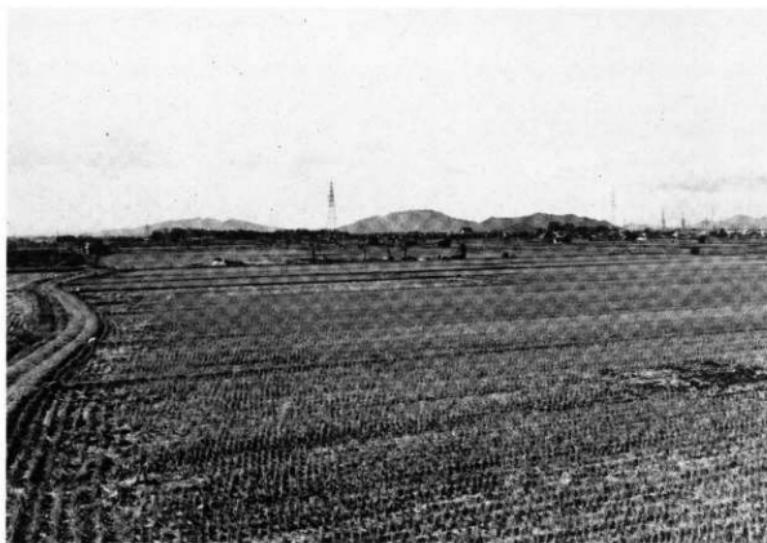
遺構は砂礫層上の堅い地盤に築かれており、これまで遺構の存在が推定されなかった地域に拡がるものと考えられる。

遺跡の存在する年代のうち、6世紀代のものは遺物のみが出土しており、遺構として考えられるものは、第3トレーナーのSD-03のみであり、今のところ遺構の拡がりは不明である。

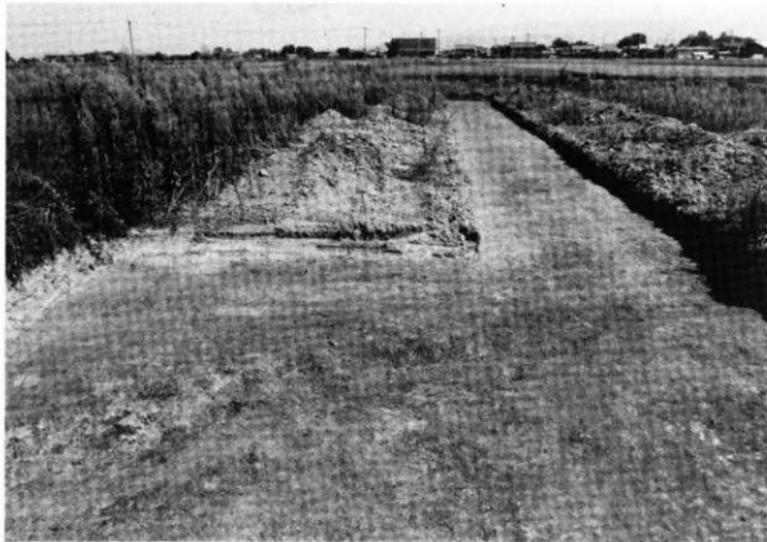
7世紀になると、SD-01・02に区画された内にカマドを持つ堅穴住居跡群が構成され、下之郷遺跡の南部を占める。堅穴住居跡のカマドは東壁に築かれており、隣接する兩陣野遺跡の同時期の堅穴住居跡が西壁にカマドを築く傾向と異にしており、近接する同時期の集落形成を知る上で貴重な資料となろう。

これらに続く掘立柱建物群の時期は、今回の調査で明らかにされなかつたが、付近で出土する遺物の多くは、8世紀のものであり、次年度に実施される広範囲な調査で、改めて明らかにされよう。

今回明らかになった下之郷遺跡の大規模な拡がりは、これまで条理制の方格地割未施行地帯のもつ開発後進地帯という概念と大きくかけ離れたものになった。今後の調査によって、水田条理の開発過程とそれに伴う村落の形成を捉える資料が、さらに充実することを願うものである。



下之郷遺跡調査前風景



第1 トレンチ全景



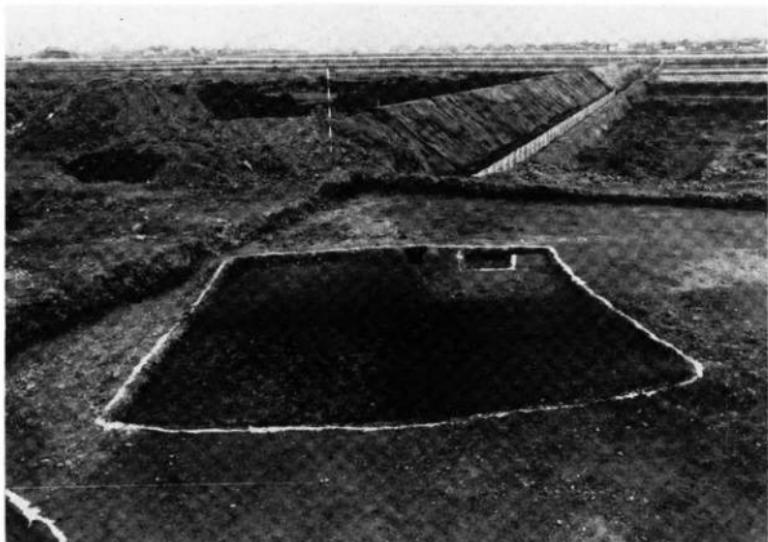
第2 トレンチ全景



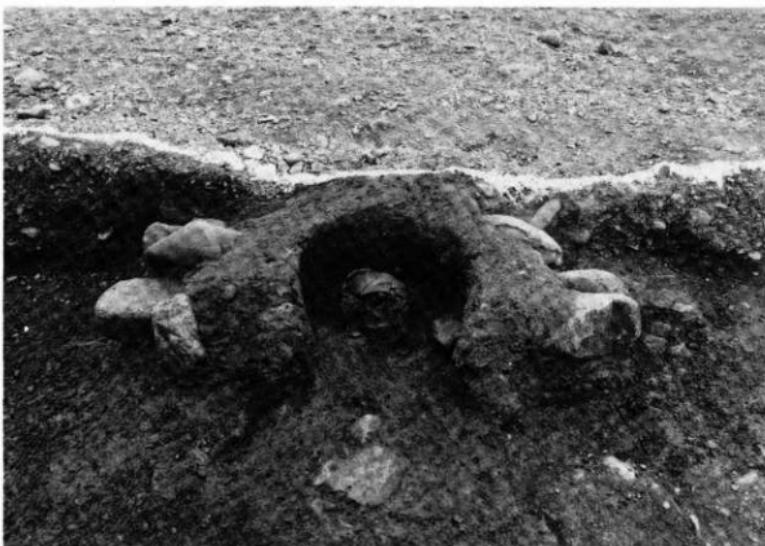
第3 トレンチ



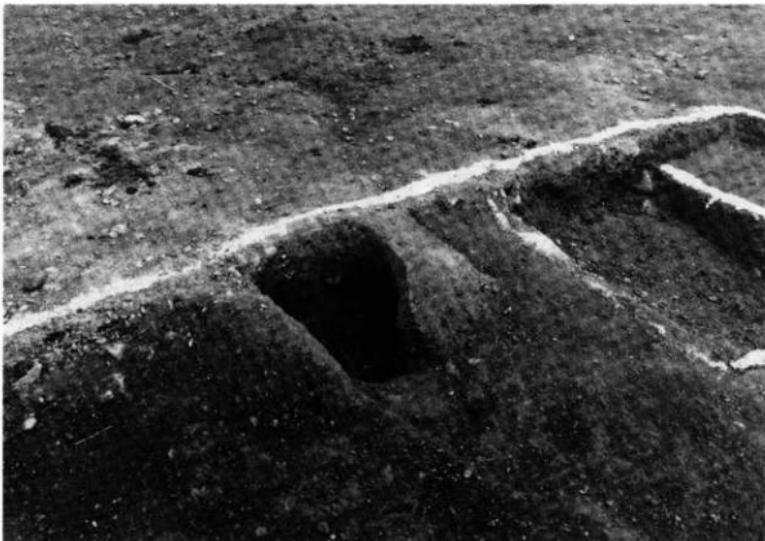
第3トレンチSB-01



第3トレンチSB-02



SB-01 カマド



SB-02 カマド



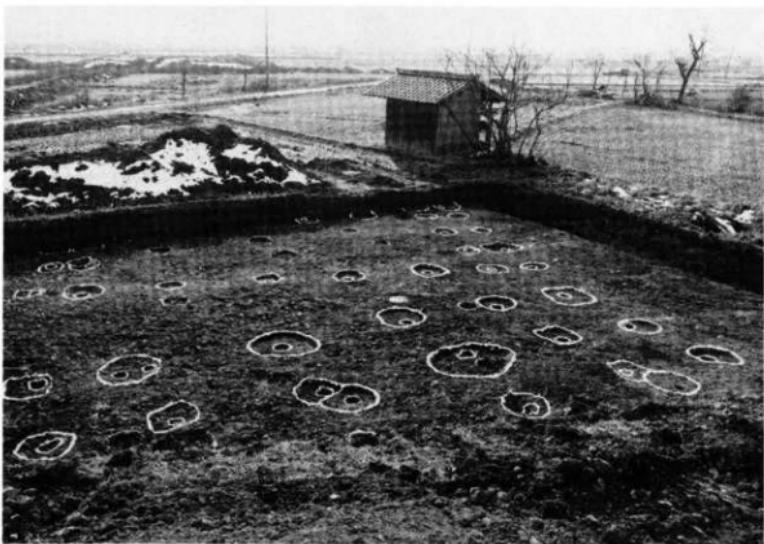
S B - 01 カマド (南より)



S B - 01 カマド (北より)



第3 トレンチ SD-03



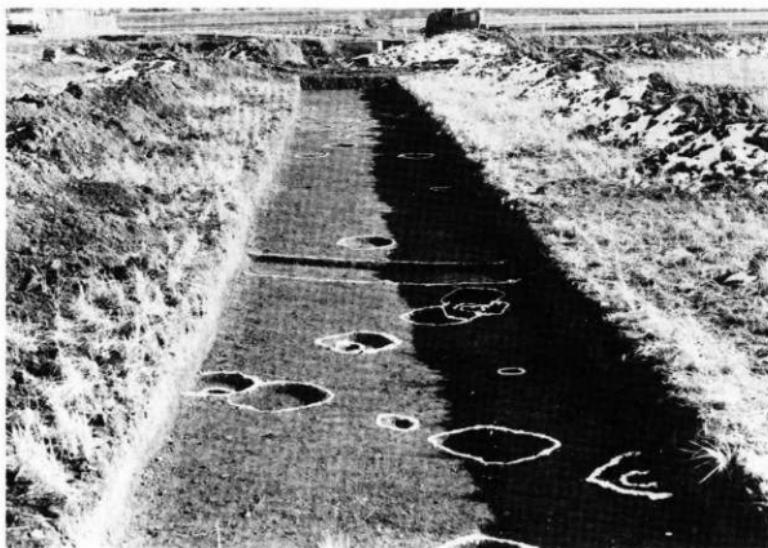
第4 トレンチ全景



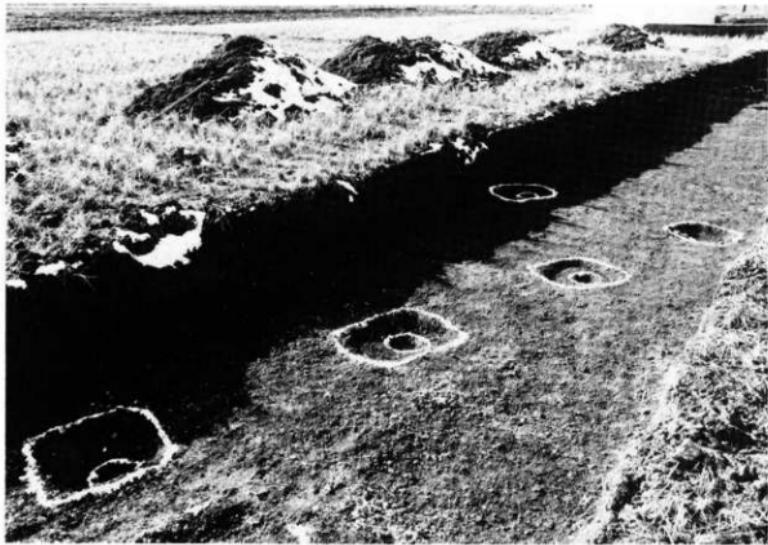
第4トレンチ SB-05



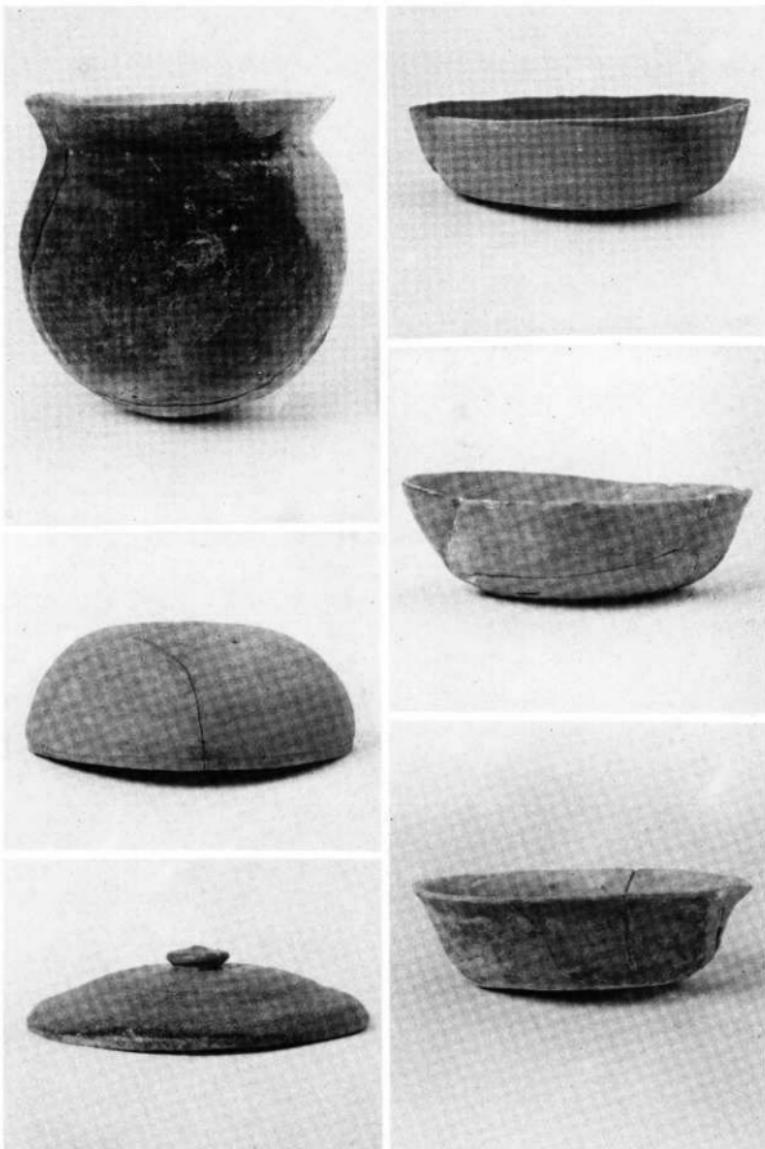
第4トレンチ SB-06



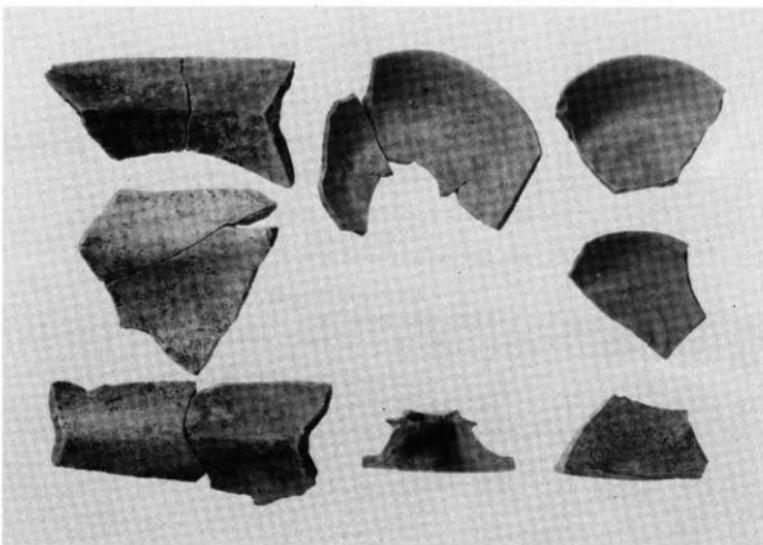
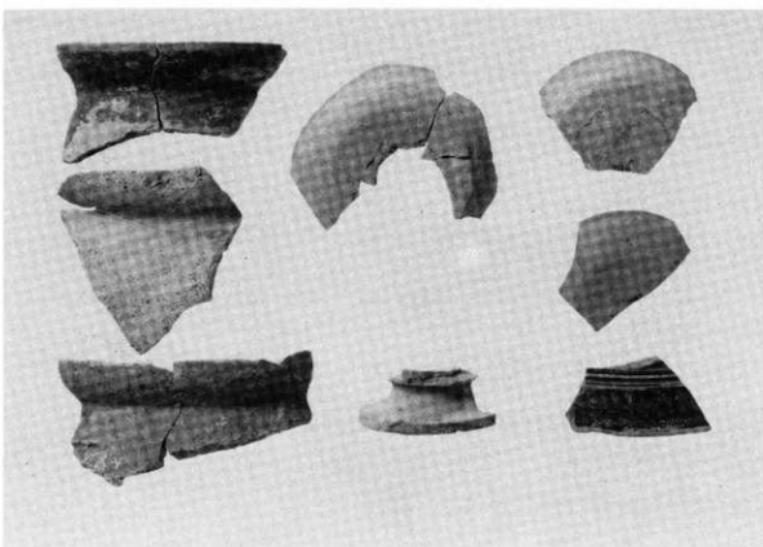
第6トレンチ全景



第6トレンチ SB-08



下之鄉遺跡出土遺物



下之鄉遺跡出土遺物

刊行年月 昭和61年3月
刊行物名 ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ-2
編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課
大津市京町四丁目1-1
電話 0775-24-1121 内線 2536
助成賛賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
電話 0775-48-9781
印刷所 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20